

鏡村埋蔵文化財発掘調査報告書第2集

高知県土佐郡鏡村

KOHAMA

小浜城跡

-城ノ平運動公園整備に伴う緊急発掘調査報告書-



2002.3

KAGAMIMURA

鏡村教育委員会

高知県土佐郡鏡村

K O H A M A

小浜城跡

－城ノ平運動公園整備に伴う緊急発掘調査報告書－

2002. 3

KAGAMIMURA

鏡村教育委員会

巻頭カラー 1



北方より高知市方面を望む

巻頭カラー 2



巻頭カラー 3



巻頭カラー 4



序

「我が影を映すこと鏡の如し」土佐15代藩主山内豊房がその清流をたたえて名付けた鏡川。この清流にちなんで名付けられた鏡村の誕生は、今から百有余年前のことです。明治22年、村制施行により村を流れる鏡川とその支流吉原川・的渕川を境に、その東岸に位置する地頭分郷14村（蓮台・尾立・柴巻・大河内・大利・今井・小浜・的渕・草峰・白岩・狩山・吉原・柿ノ又・敷ノ山）のうち、蓮台・尾立を除く11村をもって発足しました。さらに昭和3年、その西岸にある（旧領家郷）16村の中から、去坂・葛山・横矢・竹奈路・増原・梅ノ木・小山の7地区を編入して現在の村となりました。

21世紀を迎える、鏡村はどのように変わっていくのでしょうか。いま、心安らかに地図の中の鏡村を眺めてみると、その輪郭が美しい女神の横顔となって私たちに何かを語りかけているように見えます。村の未来を創造するには、先人たちの築き上げてきた文化や歴史から学び、またそれを後世に伝えていくことも重要かつ意義深いものと考えます。

報告書を刊行するにあたり、本書が学術的に多くの研究者に活用されることはもちろんのこと、地域学習の一環として学校教育や社会教育、あるいは多くの村民の方々に広く活用されることを願うところであります。また、小浜城跡の発掘調査が本村の歴史を紐解く契機となり、一人でも多くの方々が埋蔵文化財に関心を持たれ、ひいてはより一層の文化振興の一助になれば幸いに存じます。最後になりましたが、調査・報告書作成にあたって多大なご理解とご協力を頂いた高知県教育委員会、及びご指導いただいた高知県埋蔵文化財センターをはじめ、お世話をになった関係者の皆様及び地元の方々に厚くお礼申し上げます。

2002年3月

高知県鏡村教育委員会
教育長 高橋 和宣

例　　言

- 1 本書は、城ノ平運動公園整備事業に伴う「小浜城跡」の緊急発掘調査の報告書である。
- 2 調査は、高知県文化財団埋蔵文化財センターの協力を得て、鏡村教育委員会が実施した。
- 3 小浜城跡は鏡村小浜字城ノ平に所在した。
- 4 発掘調査は1999年8月9日から2000年3月31日まで実施し、引き続き2001年3月31日まで整理作業及び報告書作成を行った。調査面積は8,000m²である。
- 5 発掘調査は、高知県文化財団埋蔵文化財センター調査第5班長 松田直則の指導のもと、鏡村教育委員会主事 弘瀬友也、鏡村役場農林建設課主任 横村浩一、鏡村役場農林建設課臨時職員 今城徳忠、高知県文化財団埋蔵文化財センター主任調査員 池澤俊幸が担当した。
- 6 調査にあたっては関係諸機関、地元関係各位に多大なご協力を頂いた。また、次の諸氏には発掘調査や報告書作成に関して多大な御指導、御教示を賜った。記して感謝申し上げます。池田誠、市村高男、片桐孝浩、久保藤美朗、徳平　晶、筒井三菜、中井　均、野本　亮、松田直則、山本浩之、吉成承三（敬称略）。池田氏には第6章掲載の縄張り図を作成して頂いた。
- 7 本書の執筆は第1章第1・2節、第2章を弘瀬友也、第1章第3節、第3章、第5章を池澤俊幸が担当し、第4章は両者が協同で執筆した。編集は池澤が行った。遺構・遺物の撮影は池澤が行った。
- 8 航空測量及び航空撮影は（株）アイシーに委託した。
- 9 検出遺構は掘立柱建物跡：SB、柱穴列：SA、溝跡：SD、土坑：SK、ピット：SPで表示した。出土遺物は通し番号とし、挿図、写真図版とも同一番号を使用した。
- 10 出土遺物は鏡村教育委員会で保管しており、注記の略号は99-8KHである。

本文目次

第1章 調査に至る過程と経過	
第1節 調査に至る過程と契機	1
第2節 調査組織及び経過	1
第3節 調査前の状況と試掘調査	2
第2章 地理的・歴史的環境	
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3章 調査の概要	
第1節 調査の方法	6
第2節 調査成果の概要	6
第3節 基本層準	11
第4章 調査の成果	
第1節 中世の検出遺構と遺物	17
第2節 近世以降の検出遺構	34
第5章 まとめと考察	
第1節 小浜城跡出土土器について	49
第2節 小浜城跡について	52
第3節 山間部の村落と城郭—長宗我部地検帳を利用して—	56
第6章 付編 小浜城跡周辺の城郭縄張図	105

挿図目次

Fig. 1 鏡村位置図	1
Fig. 2 測量原点選点図	6
Fig. 3 調査区及び周辺図	7
Fig. 4 小浜城跡概要図	8
Fig. 5 試掘トレーン位置図	9
Fig. 6 調査前地形図	10

Fig. 7 土層断面位置図及び曲輪1～曲輪4 土層断面図	12
Fig. 8 堀切1及び曲輪5 土層断面図	13
Fig. 9 曲輪1～2 土層断面図 (e-e')	14
Fig. 10 曲輪1～2 及び北西斜面土層断面図 (f-f'・Kライン)	15
Fig. 11 曲輪2 北端から北尾根土層断面図	16
Fig. 12 曲輪2 及び周辺遺物出土状況図	19～20
Fig. 13 SB1平面・エレベーション図	21
Fig. 14 根太状遺構平面・エレベーション図	22
Fig. 15 SP1～5平面・エレベーション図	24
Fig. 16 台状遺構1平面・セクション・エレベーション図	25
Fig. 17 曲輪3、SA1平面・エレベーション図	26
Fig. 18 台状遺構2平面図	27
Fig. 19 堀切1平面図	28
Fig. 20 堀切2平面図	29
Fig. 21 堀切2セクション図	30
Fig. 22 堀切3平面図	32
Fig. 23 堀切3縦断セクション図	33
Fig. 24 堪堀2及び周辺平面図	35
Fig. 25 堪堀1、2セクション図	36
Fig. 26 SD1出土土器実測図1	37
Fig. 27 SD1出土土器実測図2	38
Fig. 28 SD1出土土器実測図3	39
Fig. 29 堀、根太状遺構、包含層出土遺物実測図	40
Fig. 30 鉄器、石器実測図	41
Fig. 31 SK1、2平面・エレベーション図	42
Fig. 32 杯・皿類型図	49
Fig. 33 土左山九名北東部及び中切名検地順路及び概要図	58
Fig. 34 大垣内村概要図	60
Fig. 35 コハマノ村概要図	62
Fig. 36 太利村概要図	63
Fig. 37 下村付近(今井氏給地中核地区)概要図	65
Fig. 38 識山名(本村)概要図	68
Fig. 39 梅木名中心部概要図	70
Fig. 40 横屋名概要図	73
Fig. 41 去坂名概要図	75
Fig. 42 地検帳による寺社・名本の居所と城跡	87～88

Fig. 43	村落類型分布図	88~89
Fig. 44	行川城跡縄張図	103
Fig. 45	西ノ森城跡概要図	104
Fig. 46	今井氏「土居ヤシキ」比定地	105
Fig. 47	今井城縄張図	106
Fig. 48	大河内城縄張図	107
Fig. 49	横矢城縄張図	108
Fig. 50	去坂城縄張図	108
Fig. 51	古井の森城縄張図	109
Fig. 52	梅ノ木城縄張図	110
付図 1	小浜城跡 檢出遺構全体図及び断面図	
付図 2	高知平野北西部周辺の城郭	

表 目 次

Tab. 1	ツブテ計量表	43
Tab. 2	ツブテ重量グラフ	43
Tab. 3	遺物観察表	44
Tab. 4	SD 1層位／型式別出土点数	50
Tab. 5	曲輪 2グリッド／型式別出土点数	50
Tab. 6	名本等居所一覧表	76
Tab. 7	地検帳等の史料にみる寺社関連一覧表	77
Tab. 8	地目別地積集計表	81
Tab. 9	地積と扣・作職人数一覧表	82
Tab. 10	田・畠の地積と主作・名本分等比率一覧表	83
Tab. 11	城跡一覧表（地検帳検討分）	95
Tab. 12	城跡一覧表（地検帳非検討分）	97
Tab. 13	鏡村及びその周辺の城跡比較概念表	99

写真図版

- 卷頭カラー 1 北方より高知市方面を望む
- 卷頭カラー 2 調査前全景（西より）・完掘状態（南より）
- 卷頭カラー 3 堀切 3（西より）・完掘状態（直上より）
- 卷頭カラー 4 小浜城跡 画像平面図

PL. 1	調査前全景	113
PL. 2	完掘状態、堅堀 2	114
PL. 3	曲輪 2 遺物出土状況／台状遺構 1 から北西方向、 北より（SD 1、SK 1 検出状態・SB 1・奥 台状遺構 1）	115
PL. 4	曲輪 2 遺物出土及び SD 1 検出状況／19グリッド付近、曲輪 1 より	116
PL. 5	曲輪 2／遺物出土及び SD 1 検出状況、根太状遺構完掘状態	117
PL. 6	SD 1 遺物出土状況（8Mグリッド）	118
PL. 7	堀切 2 遺物出土状況、堀切 1 南西斜面部セクション	119
PL. 8	堀切 3 縦断セクション、今井城跡	120
PL. 9	梅/木城跡	121
PL. 10	梅/木城跡／連続堀切、虎口石積	122
PL. 11	曲輪 1、2	123
PL. 12	堅堀、堀切、曲輪 3、集中、土坑	124
PL. 13	SD 1 出土皿・杯	125
PL. 14	SD 1 出土杯	126
PL. 15	SD 1 出土杯	127
PL. 16	SD 1 出土杯	128
PL. 17	SD 1、曲輪 2 出土杯（底部破孔）	129
PL. 18	SD 1、曲輪 2、堀切 2 出土遺物	130
PL. 19	堀・鉄製品	131
PL. 20	近世陶器	132

第1章 調査に至る過程と経過

第1節 調査に至る過程と契機

1983年度に高知県教育委員会が実施した中世城館跡分布調査の際、鏡村教育委員会は9箇所の城跡を確認した。本村では城跡以外の遺跡は確認されていない。1984年には村史編纂のための資料収集と城跡保存方策の基礎資料を得るために吉原城跡の発掘調査が行われた。今回は、2002年に開催される「よさこい高知国体」において本村が成年男子ソフトボール競技の会場地となり、城ノ平の所在する山丘が競技施設の建設を含めた運動公園整備事業の対象となった。本城跡は、そのほとんどが破壊されることとなったので、記録保存のための緊急発掘調査を実施する運びとなった。本村で2例目の発掘調査である。

第2節 調査組織及び経過

発掘調査は、1999年8月9日から2000年3月末までの約8ヶ月、8,000m²の範囲で現地調査を実施した。調査区外の工事も並行して行われた。引き続き2000年4月1日から2001年3月31日まで整理作業及び報告書刊行の行程で実施した。発掘調査は鏡村教育委員会が主体となり、(財)高知県埋蔵文化財センター協力のもとに実施した。調査体制は以下のとおりである。

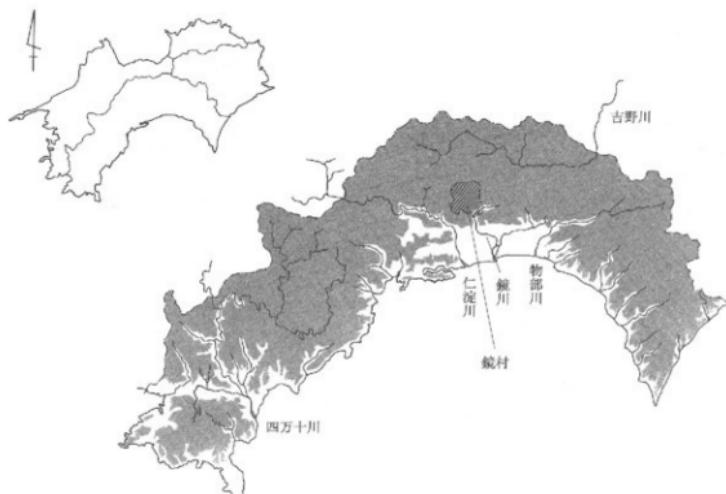


Fig. 1 鏡村位置図

調査主体・・・鏡村教育委員会
調査協力・・・(財)高知県埋蔵文化財センター
調査担当・・・(財)埋蔵文化財センター第5班長 松田直則・同主任調査員 池澤俊幸
鏡村教育委員会主事 弘瀬友也(兼事務担当)
鏡村役場農林建設課主任 横村浩一・同臨時職員 今城忠徳
発掘作業員・・・小野清一郎・小野美代子・和田 弘・宮本香世子・種田美佐子・西村信一郎・西
村里津子・岡林千代亜・田原美代・吉村政之・今村重臣・河野京子・筒井太士・
山中敬郎・吉川幸子・大崎純男・生永博純・森下 篤・山崎久美・山本徳美・杉
本三喜男・杉谷喜美恵・大崎しげを・川村敏雄・細木藤雄・尾崎定富・尾崎定子・
尾崎利通・西村美恵子・西村勝美・西村和江・尾崎くみ・杉本直助・高橋秀和・
森本晃司・瀧石能史・植田佐保子・山本 勇・三野一彦・和田幸男
整理作業員・・・川久保香

第3節 調査前の状況と試掘調査

小浜城の造構は詰、二の段、三の段、堀切2条が知られており、県教育委員会の分布調査では土師質土器1片が報告されていた(高知県中世城館跡分布調査報告書 高知県教育委員会 1984)。鏡村の中心部に位置する今井城の出城ではないかという見方もあり、城主などについては史料や伝承もなく不明であった。

Fig. 4は1/2500の地形図を利用し、試掘調査前に高知県埋蔵文化財センターが作成した概要図、Fig. 6は本調査前に作成した1/250の平板測量図に基づく図である。Fig. 5のTR9及びTR28でのみ城跡に伴うとみられる土師質土器が出土した。TR15以南や北尾根部のトレンチでは、当該期に属すとみられる造構が検出されなかった。なお、TR15及び付近は、昭和35~38年に据えられていた鏡川総合開発調査に伴う架線の基礎台による破壊がみられた。

本丘陵は、川の作用により東面は断崖となっており、西面はそれに比して概して緩やかで、川沿いには部分的に平坦地も存在している。曲輪3から曲輪5の下方は、比較的急な斜面となっている。調査前の本丘陵における土地利用の概況は、丘陵西側の広い範囲が植林や畠となっており、東斜面や北部は雑木林となっていた。調査区域内では、曲輪1、3、4、5は扇として利用、あるいは休耕中の状態であった。曲輪2を含むそれ以下の西及び北斜面は植林、東斜面や北尾根以北は雑木林となっていた。調査区内の主な小径はFig. 6のごとくであった。また、本調査区西及び南裾限界は、既存の幅約2mの未舗装路に沿って設定したものである。

第2章 地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境

鏡川は、高知市街からみて「北山」とも呼ばれる、四国山地南縁部より発する。小浜城跡は、鏡川が高知平野に流れ出る直前の山中に位置する。本城跡は蛇行する鏡川の侵食によって形成された半島状の山丘を利用しており、地形は半島付け根の括れ部に向かって一旦標高を減じたのち、背後の山地へとつながっている。鏡川に囲まれ、付近が良く見渡せるとともに、周囲からもよく目立つ立地である。

土佐郡鏡村は高知県のはば中央に位置し (Fig. 1)、小浜城跡から数百m上流側の村役場は高知市の北約11kmに所在する。村内を南北に県道高知伊予三島線が通過し、東西には南国伊野線が走り、これに土佐山村を経て土佐町に通ずる県道高知本山線が連絡している。行政区画は、南に高知市、東に土佐山村、北東に土佐町、北に吾北村、西に伊野町と接し、東西8km、南北11kmで面積は約60km²の山村である。地形は平坦地が極めて少なく、標高20~80mの山々からなり、15°~40°の急傾斜地が全体の95%以上を占め、耕地面積は少なく林野率は87%に及ぶ。林野面積のうち56%を人工林が占めており、そのほとんどが戦後から高度経済成長時までに植栽されている。小浜城跡周辺においても南西斜面を中心に植林が行われている。気候は、年平均気温は15°C前後、年間雨量は3,000mm前後と比較的温暖多雨で植物の育成には適している。主要な農産物として、ショウガ、ミョウガ、梅、柿、みかん、茶、野菜、山菜などが挙げられる。古くから街路市の里としても知られる村の農業は、高知市に隣り合う地の利を生かし、これら消費地向けの野菜や果樹の栽培がすすめられてきた。近年では、高冷地を生かした野菜や花卉栽培への取り組みや農産加工品づくりも盛んに行われているが、山間部で日照時間が短いため、主要農産物の収穫は低く、夏期には台風の被害を受けることが多い。

第2節 歴史的環境

村史に依拠して述べる。本村で周知されている遺跡は梅ノ木城、吉原城、大垣内城、小浜城、横矢城、狩山城、今井城、柿ノ又城、大利城で、城跡のみである。城跡のいくつかは、吉原城のある樅ヶ峰から流出する吉原川を谷間に見下ろす地にあり、小浜城と大垣内城はその川下に所在する。

1. 戦国期の村々

長宗我部検地

天正13年（1589）の春、長宗我部元親はようやく四国制覇を成し遂げたが、わずか3ヶ月ほどで豊臣秀吉の征討を受けてその軍門に降り、土佐一国の領有を許されて秀吉の統治に服すこととなつた。従つて土佐一国の検地—長宗我部検地も太閤検地の一環として実施されたもので、天正15年（1587）

からはじまり、前後12年の歳月を費やして天正18年（1590）にはほぼ完成したといわれる。検地の結果は『長宗我部地検帳』として残されている。太閤検地の検地帳とは異なり『長宗我部地検帳』には石高の記載がなく、地積の表示も歩、代（1代=6歩）、反（1反=50代）、町の単位を用いており、内容的にも長宗我部支配下の土佐の後進性を示すものとなっている。地積の表示は一筆毎になされ、各筆の右肩にその田・畠・屋敷の所在地を示すホノギが地積と並べて書かれ、地積の下に出地=打出の地積、田・畠・屋敷の等級が割書され、さらにその下段に各請人とその田・畠・屋敷の属する村名が肩書きされている。表示の仕方は地域によって異なる点が少くない。鏡村地域の検地は、天正17年（1589）の3月から4月にかけて実施され、その結果は『領家山地検帳』、『領家山切畠之地検帳』、『地頭分地検帳』、『地頭分高山切畠地検帳』の4冊にまとめられ、地検結果は村毎に記されている。

領家山と地頭分

村内を南東流する的瀬川と、的瀬川を合わせて鏡川を境として西から南に広がる地域は領家山、相対して北から東に広がる地域は地頭分と呼ばれる。両地域の地積は、下地中分推定図に示された如くほぼ均等である。両地域に含まれる村々を地検帳によって示せば次のとおりである。

（領家山）

行川名・行川之村中地・引地名・唐岩名・横名・小山之名・梅木名・中追名・増原名・横屋名・竹奈路名・去坂名・上里名・尾沙子名・針原名

（地頭分）

芝卷村・蓮台村・大垣内村・コハマノ村・ヲ・リノ村・中切名・穴川村・永野村・下村・永崎村・定永村・草宗名・白岩名・狩山名・吉原名・識山名・柿又名・的瀬名・福留村・柿ノ窪村・クモウノ村・ノセ村・東川村・杉谷村・太野村・ほとの窪村

領家のうち行川名・行川之村中地・引地名・唐岩名・上里名・尾沙子名・針原名は現在の高知市に属し、横名・中追村は吾川郡伊野町に属する。また地頭分のうち芝卷村・蓮台村は高知市に、中切名は土佐郡土佐山村にそれぞれ属する。領家山と地頭分の地積がほぼ均等であるところから、この両地域とその周辺部を含む莊園が鎌倉時代に成立しており、その莊園がいつのころからかは定かではないが下地中分されたものであろう。領家の領家は、在地の土豪が貴族・社寺など中央の権門勢家の「御勢を募らんがため」に、その所領を形式的に寄進し、名義上の土地の領有権を権門勢家に託し、自己の実質的な土地の支配権を保留しようとして、寄進契約した領主のことである。こうして当地域は莊園になったと考えられるが、鎌倉時代になって地頭が置かれることになる。地頭は莊園内で警察権・徵税権・土地の管理権を持ち、その職務の報酬として一定の得分が給与された。地頭はやがて莊園領主への年貢の納入を怠ったり、農民に不当な支配を行うようになり、莊園領主=領家との間に紛争が起こるようになった。そこで莊園領主と地頭が莊園を折半して、的瀬川・鏡川を境として下地中分が行われた結果、領家分・地頭分と呼ばれるようになったのである。やがて莊園そのものは崩壊したにもかかわらず、領家分は領家山として、地頭分はそのまま地名として残り現在に至ったとされる。

2. 近世の村々

間ヶ原の戦いの後、山内一豊は慶長6年（1601）1月に土佐に入国すると、4月から土佐7郷を回り領内視察を行った。そして蔵入地（直轄地）を設定し、次いで山内氏直属家臣団への知行割りを実施した。「長宗我部地検帳」の地高2万4千石の約半分を蔵入地とし、残り半分を知行地とした。一領具足（地侍）もほとんどの者は百姓として農民と共に田地付が行われた。こうして古い領有關係を一掃した土地に、新しい行政単位としての郷村を設定する「村きり」が行われた。村境を設定し、村役人が指名されて新しい体制固めがなされる。上佐藩では「元禄十二年郷村帳」によると1076の村が存在しており、村高も1000石を越すものから10石未満の村まで含まれていた。鏡村では江戸時代には地頭分郷、領家郷が存在した。他の山間部とともに郷制が施され、郷内に小村が置かれた。

3. 近代の村々

1869（明治2）年1月、薩・長・土・肥4藩の版（土地）籍（人民）が朝廷に奉還され、1871（明治4）年には全国の藩を廃止して、県府に統一された。高知藩では版籍が奉還された同年6月、藩主が知事となり種々の改革を断行するのであるが、翌1870年11月には人民平均の理が打ち出される。1870年5月、旧来の庄屋、名本制を廃止し、郷・坊制が敷かれ郷正・坊正を置く。その後郷生を改め郷長に、1871年6月には戸長とする。この時鏡村は地頭分郷と領家郷に分所属していた。両郷に分属した村は次のとおりである。

（地頭分郷：14村）

大河内村・蓮台村・尾立村・柴巻村・大利村・今井村・小浜村・的瀬村・草峰村・白岩村・狩山村・吉原村・柿ノ又村・敷ノ山村

（領家郷：16村）

行川村・上里村・針原村・去坂村・葛山村・横矢村・竹奈路村・領家村・唐岩村・増原村・梅ノ木村・中追村・宗安寺村・楨村・成山村・小山村

明治22年の町村施行により、地頭分郷のうち、大河内・小浜・大利・今井・草峰・白岩・狩山・吉原・的瀬・柿ノ又・敷ノ山の11か村を集合して「鏡村」が発足した。さらに、昭和3年、県の合併促進地域に指定され、16村（旧領家郷）から、横矢・竹奈路・去坂・増原・葛山・梅ノ木・小山の7地区を編入して現在に至る。

第3章 調査の概要

第1節 調査の方法

本調査に先立って平板測量と樹木等の伐採を行い、無線操作ヘリによって全容および周辺の撮影を行った。Fig. 4 及び試掘調査の結果をうけて設定した調査区は、Fig. 3 のごとくである。調査に使用する座標軸は地形に即して付図のごとく設定した J ラインを基本軸として展開し、4 m ピッチのグリッドを基準として調査を進めた。グリッド名には北西隅の交点を使用した。測量基準点の設置にあたっては、鏡村地籍調査の成果を使用した。四等三角点馬角（標石No. 05018）及び四等三角点針原（標石No. 050106）を与点に、Fig. 2 のごとく H' 1、H' 2、H' 3 と設置した新点のうち、H' 1、H' 2 の 2 点を使用し、調査グリッドの J ラインを中心に測量した。標高については県道高知伊予三島線小浜に設置してある

仮 B.M. ($H = 74.596$) を基準高とした。掘削は曲輪 1、曲輪 3、及び東斜面については人力で行い、その他では適宜重機を導入して表土あるいは表土の一部を掘削した。重機の搬入に際しては、遺構を破壊しないよう注意を払った。東斜面では作業に危険を伴わない範囲で、旧地形の確認に努めた。豎堀や堀切が存在する部分は、安全を確保した上で調査区を拡張した。検出されたピットや土坑、根太状遺構については、グリッドを基準とした 1/20 の図面を作成し、曲輪や堀、台状遺構、及び遺物出土状況については、1/30 ないし 1/60 の縮尺による平板測量図を作成した。基本層準や堀を含む遺構の土層については、1/20 の断面図を作成した。掘削の終了後、航空測量及び撮影を実施し、堀については 1/50、全体図は 1/200 の図面を作成した。各曲輪や堀の平面図は、原則として前記の平板測量図を基に、航空測量の成果を参照して作成した。



Fig. 2 測量原点選定図

第2節 調査成果の概要

調査前は、Fig. 4、6 のごとく曲輪 2 の下方に帶状の段が多数存在したが、本調査による知見や地山、覆土の土質や状態、或いは出土遺物からみて、城に伴う遺構として積極的に評価すべきものはこれらのうちに存在しなかった。北西斜面の土層は Fig. 10 に表れている。完掘後の曲輪 2 下の北

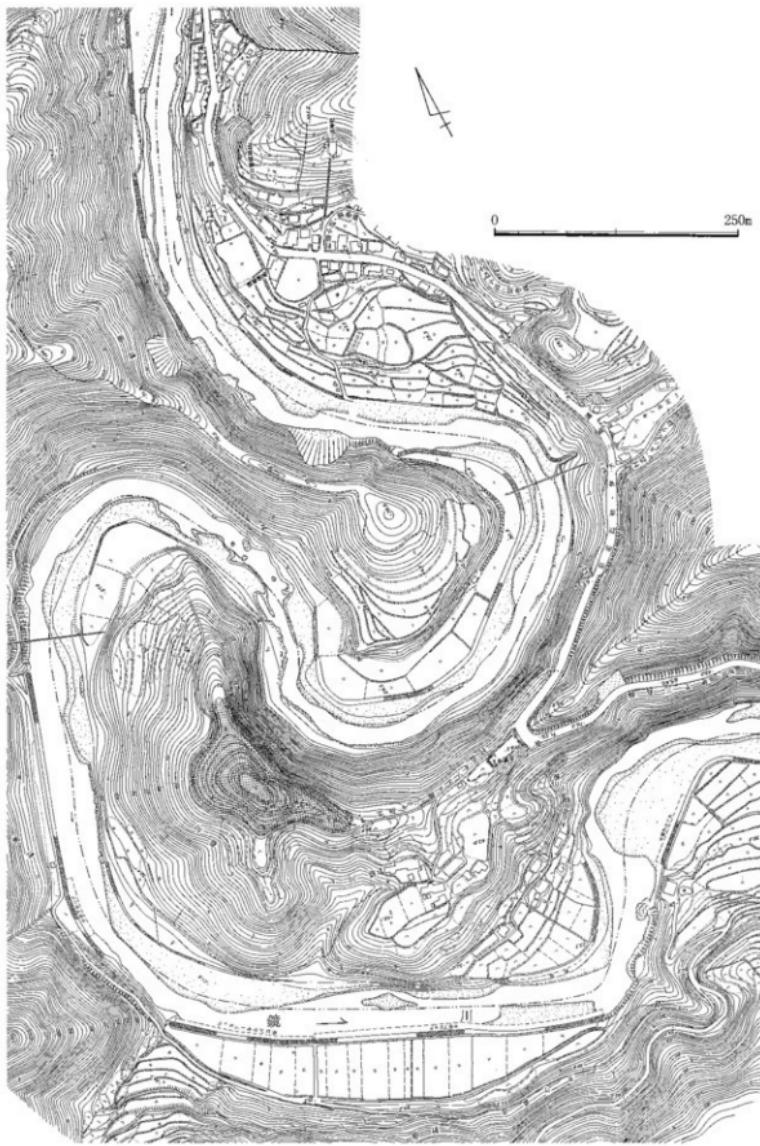


Fig. 3 調査区及び周辺図

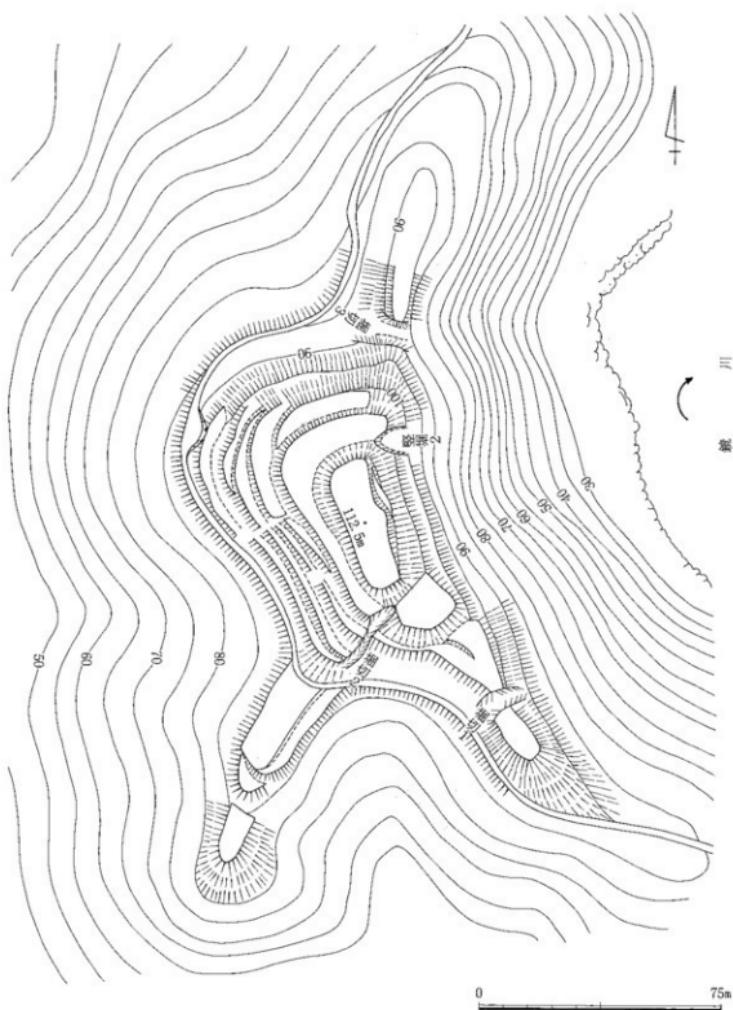


Fig. 4 小浜城跡概要図

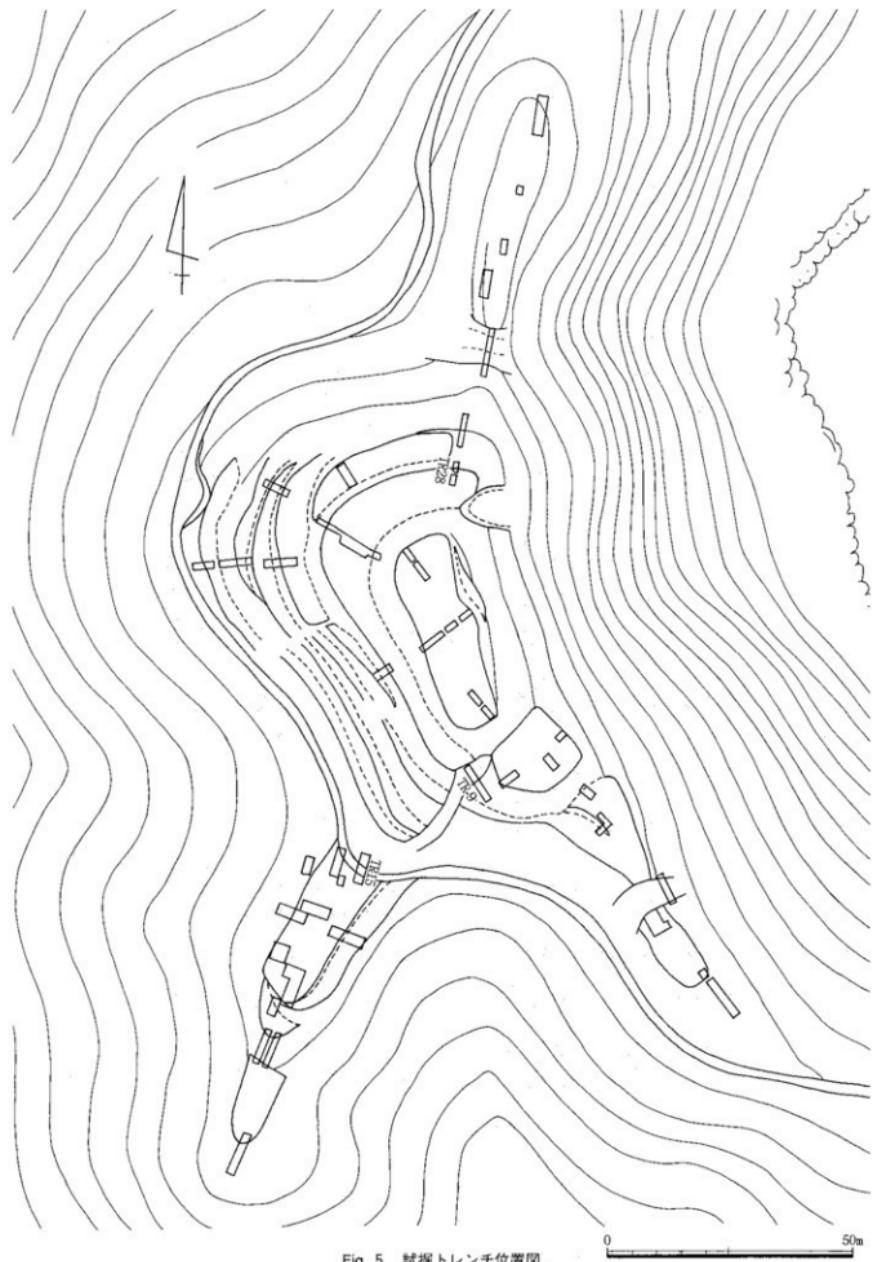


Fig. 5 試掘トレンチ位置図

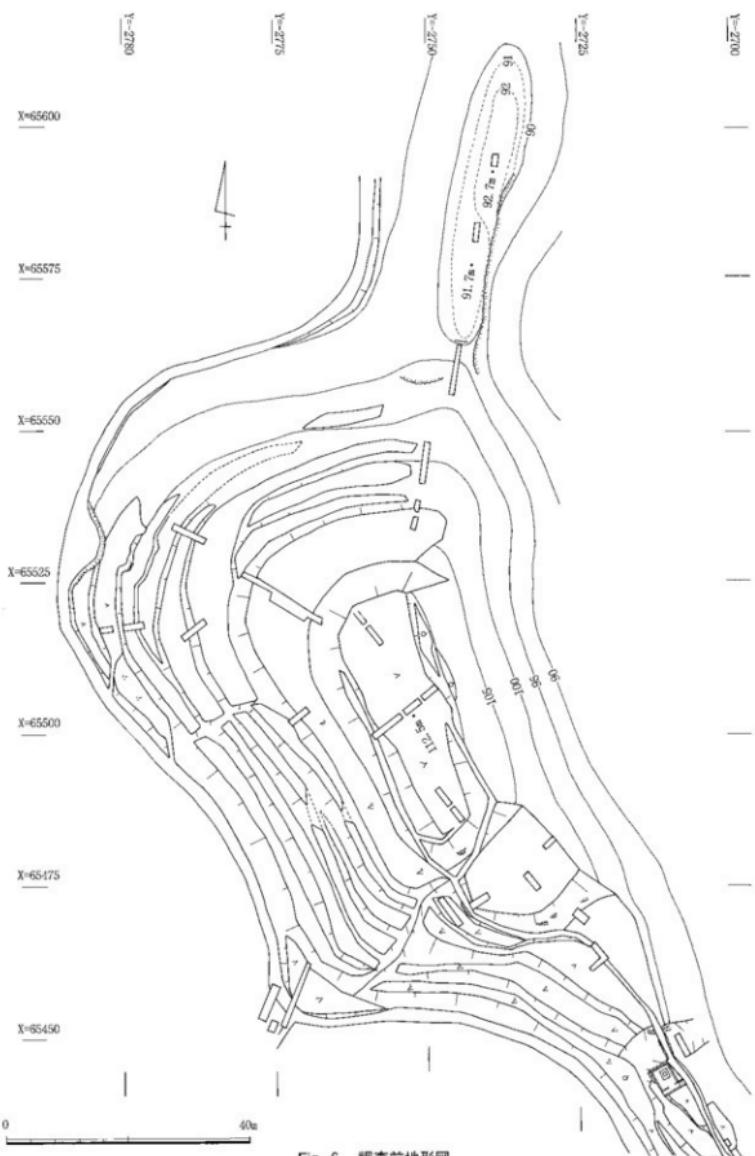


Fig. 6 調査前地形図

斜面から北尾根とその西斜面は、堀切3を境にしてL字型に屈曲しているが、周辺の地形からみて全くの自然地形とは考え難い。また当該斜面は非常に整った面をなしていることも併せて、少なくとも北斜面については広い範囲での整形が施されているものと考えられる。整形の及ぶ下限を堀切3西裾に相当する標高までと考えた場合、曲輪2からの比高差は28m強を測る。この北斜面から、西斜面にも整形が連続している可能性があるが、その場合の整形の下限標高は、調査区外へ延びる南西尾根の付根にあるたる堀切2西裾部の高さなどからみて、標高90m強の付近ではないかと考えられる。東斜面は既述のように自然の要害となっており、仮に普請がなされていても判断が難しい。そのような中で、曲輪4付近では切り立った岸の下が平場状になっている部分があり、掘削されている可能性が高い。そのようにみると東斜面の他の部分も、全てが自然地形であるとは断言できないことになろう。また盛土や土壘については、基本層準にも表れているように、一部で小規模な盛土の可能性をみとめるのみであった。なお、遺物が出土した区域や遺構は限られており、以下第4章においても、遺物について言及しない場合は原則的に出土遺物が存在しないものとする。

第3節 基本層準 (Fig. 7~11)

本城跡は岩盤を掘削して構築されており、覆土は全体に薄い。曲輪2の下方斜面を除く大半の部分では、厚さ10~30cm程度の表土しか認められない場合が多い。表土下の各堆積層を構成する小砾や土は、地山岩盤が崩壊・風化したものである。曲輪1や曲輪2下の斜面部では、そのような表土下の堆積層が観察できるが、出土遺物がほとんど存在しない上に堆積状態も不安定で、堆積の時期や原因を特定することができない。例外的に曲輪2の南半でのみ、比較的安定した遺物包含層が存在する。また、堀切3の西部とその周辺では、土壤化した土や粘土をベースとする土層が互層をなしているが (Fig. 23)、これには北側斜面であることを含む立地条件や斜面の斜度なども関係しているとみられる。岩盤は、風化の進んだ部分ではいわゆる「ダケ」となっている。その風化の度合と、それとも関係する硬度、或いは色調は、場所によってかなりの相違があった。

Fig. 7、8、10は各々全体の中軸、Fig. 9は曲輪1から曲輪2にかけての横断、Fig. 11は曲輪2北端から北尾根へかけての稜線に沿った土層を示す断面図である。

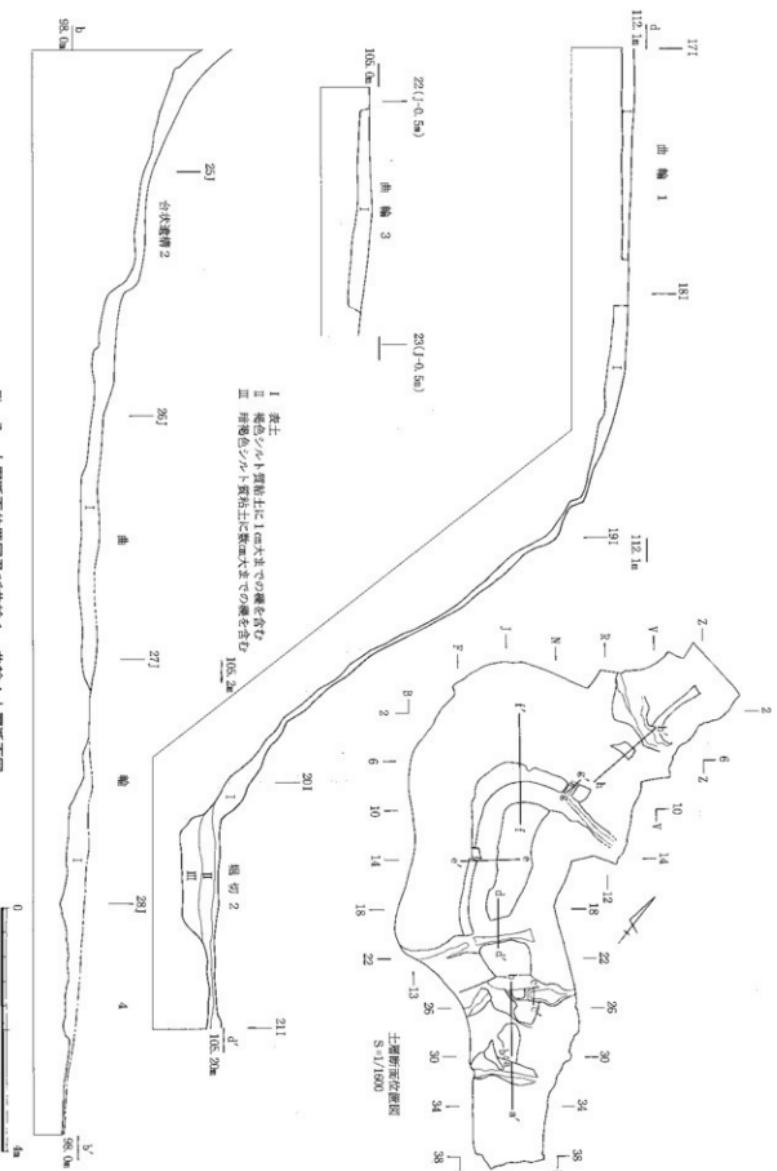


Fig. 7 土壠断面位置図及び曲輪1～曲輪4土壠断面図

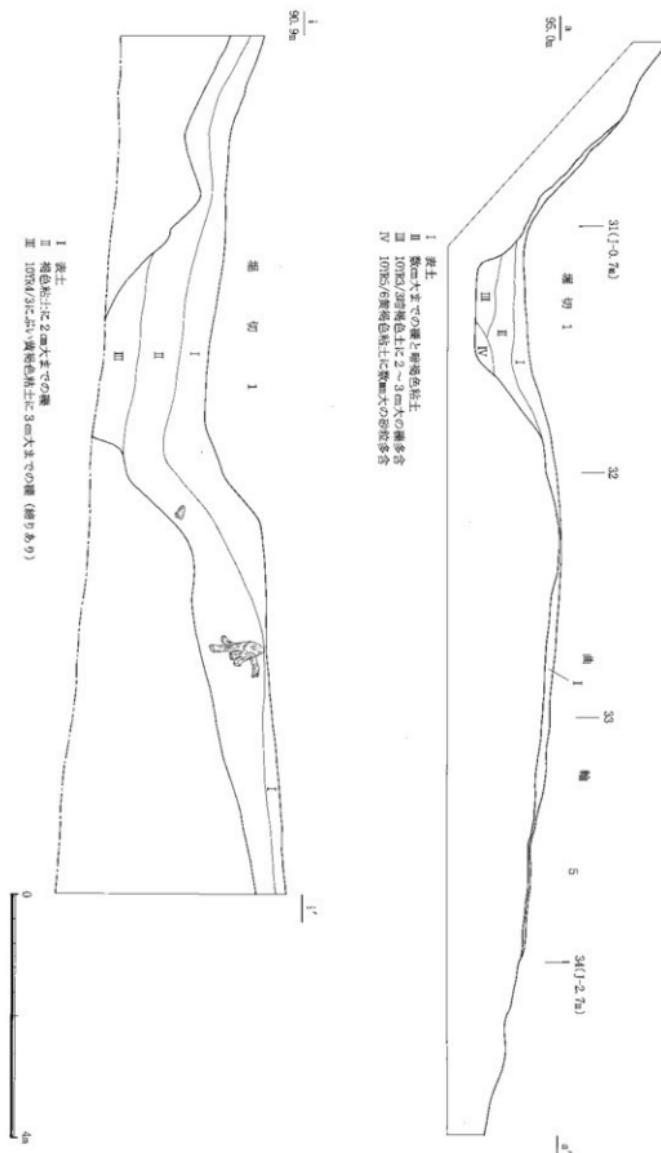


Fig. 8 掘切 1 及び曲輪 5 土層断面図

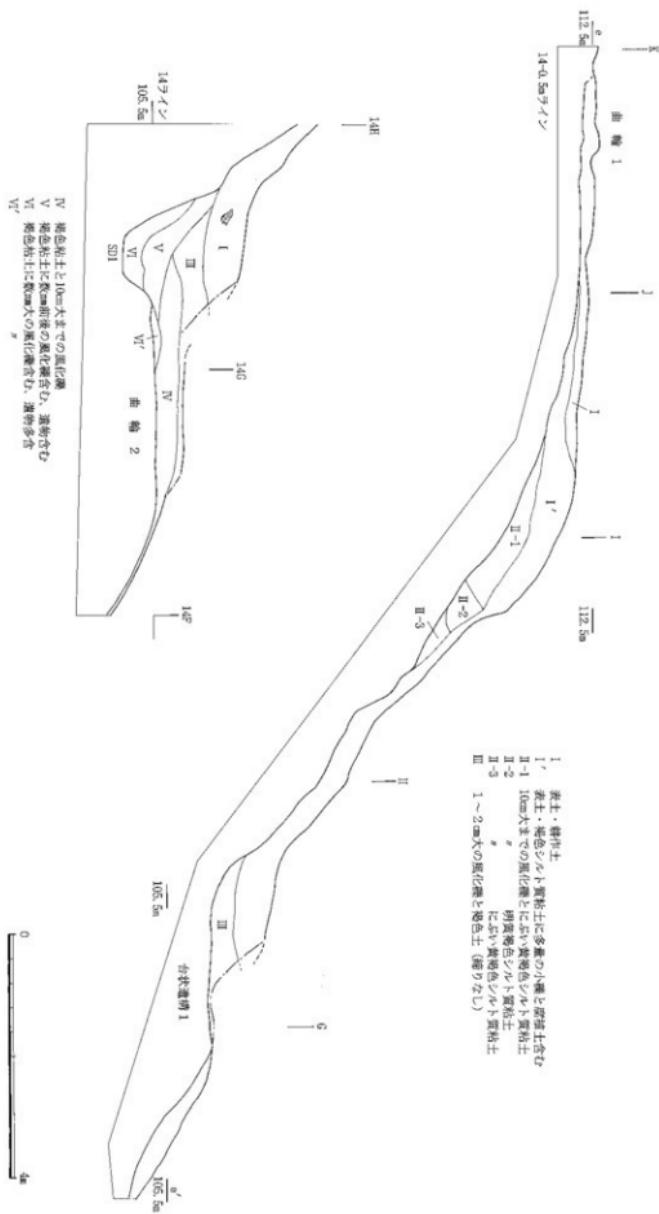


Fig. 9 曲輪1~2土層断面図 (θ-θ')

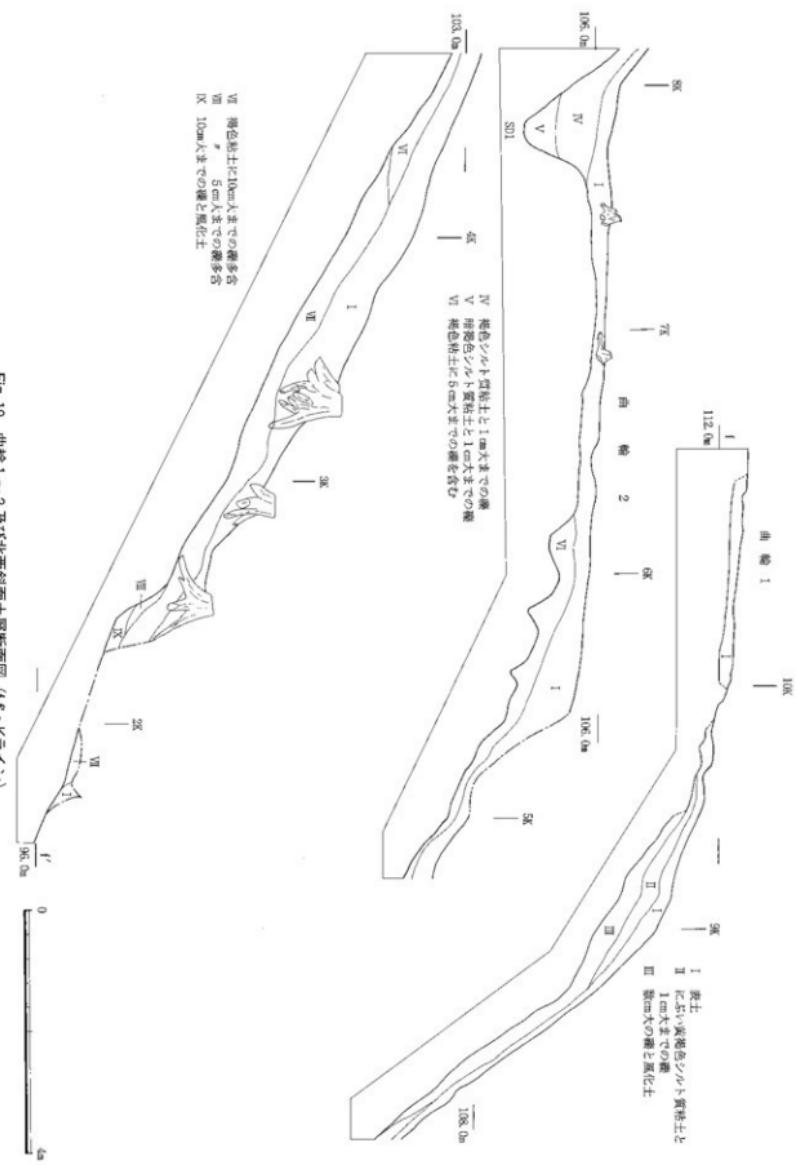
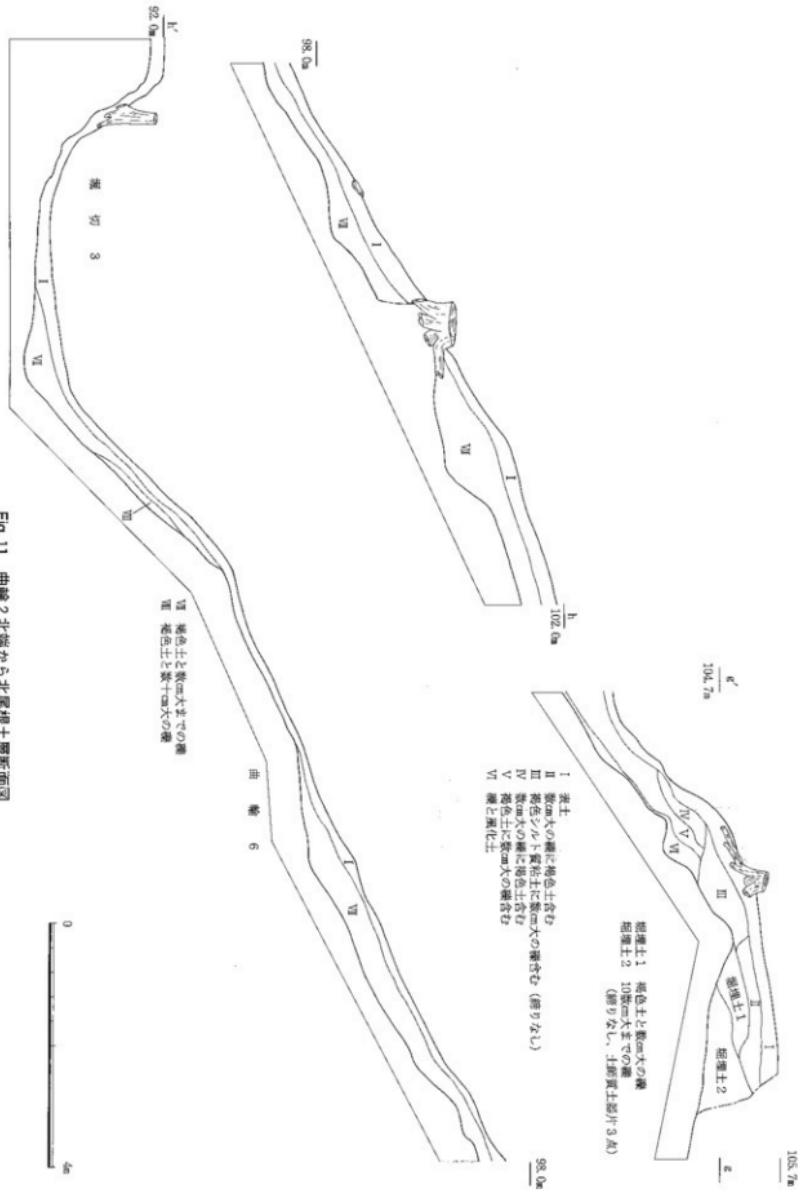


Fig. 10 曲線1～2及び北西縦面土層断面図 (I-I'・K-L'ライン)



第4章 調査の成果

第1節 中世の検出遺構と遺物

以下、特記しない遺構の埋土は単層で、数cmから数cm大の小礫を含んでいる。いずれも地山が崩壊・風化したもので、調査区各所でみられる表土を除く覆土と本来的には同類である。複層の埋土を持つ遺構には堀やSD1がある。当該期の出土遺物は土師質土器とツブテがそのほとんどを占め、陶器は皆無である。曲輪2を中心として出土しており、同曲輪に接する堀切2、堅堀2からも少量出土している。それ以外は曲輪1の細片を除くと皆無であり、以下特記しない場合は出土遺物が存在しないものとする。

1. 曲輪1

最高所に位置する曲輪で詰に相当し、曲輪2からの比高差7mを測る。城の全容からみて、少なくとも東側以外の全斜面が加工された切り岸であることが明らかで、西と北側も60°前後とそれより下方の切岸或いは自然斜面を凌駕する急角度の切岸によって防御されている。南端部の切岸はそのまま堀切2に続いており、面をなして切られている。北東部も同様に堅堀2と一体となっている。幅12m、長さ40mを測る平坦面では、ピット等の遺構は全く検出されなかった。西辺中央の肩部では、Fig. 9のごとくの土層がみられ、土質や締り方および周辺の状況から、盛土である可能性が高いと考えられた。遺物は、13Iグリッドより土器片が2点出土したのみである。土器片は胎土や器厚からみて、第5章第1節の土師質土器杯Mの可能性が高い。

2. 曲輪2及び検出遺構と出土遺物

曲輪1の掘取り巻く帯状の曲輪である。根太状遺構を検出した北西部が最も広く、幅約7mを測る。南部が狭く、台状遺構1の北側で幅約1.2mを測る。肩部に崩壊はみられるが、全面に整った平坦面を形成している。根太状遺構やピットは北西部でのみ検出された。根太状遺構およびSB1とSD1の間には、幅0.68~1.35mの帯状の空間が想定できる。台状遺構1の北側には、15cmの段差がある。

遺物出土状況からみれば、今次出土遺物のうち中世に属する遺物のほとんどは曲輪2及びその周辺から出土している。Fig. 12やTab. 3からわかるように堀切2や堅堀2からも出土しているが、曲輪2からの出土量は突出している。出土遺物のほとんどは土師質土器杯皿とツブテで占められ、これに僅かな土製煮炊具と鉄器が加わるものである。Fig. 12は細片と地山面から十数cm以上浮いたものを除いた遺物の出土状況図であるが（×印及び炭化物集中部の一部を除く）、その条件に合致しない遺物をあわせても同図の出土傾向と大きな齟齬はない。なお後掲のTab. 5に、器形が判る破片或いは個体を対象とした出土状況をまとめた。これらから出土傾向をみれば、まずG 9~13、F 14~18グリッドにかけては、台状遺構1を除く平坦面とSD1において集中的に出土しており、特に大型

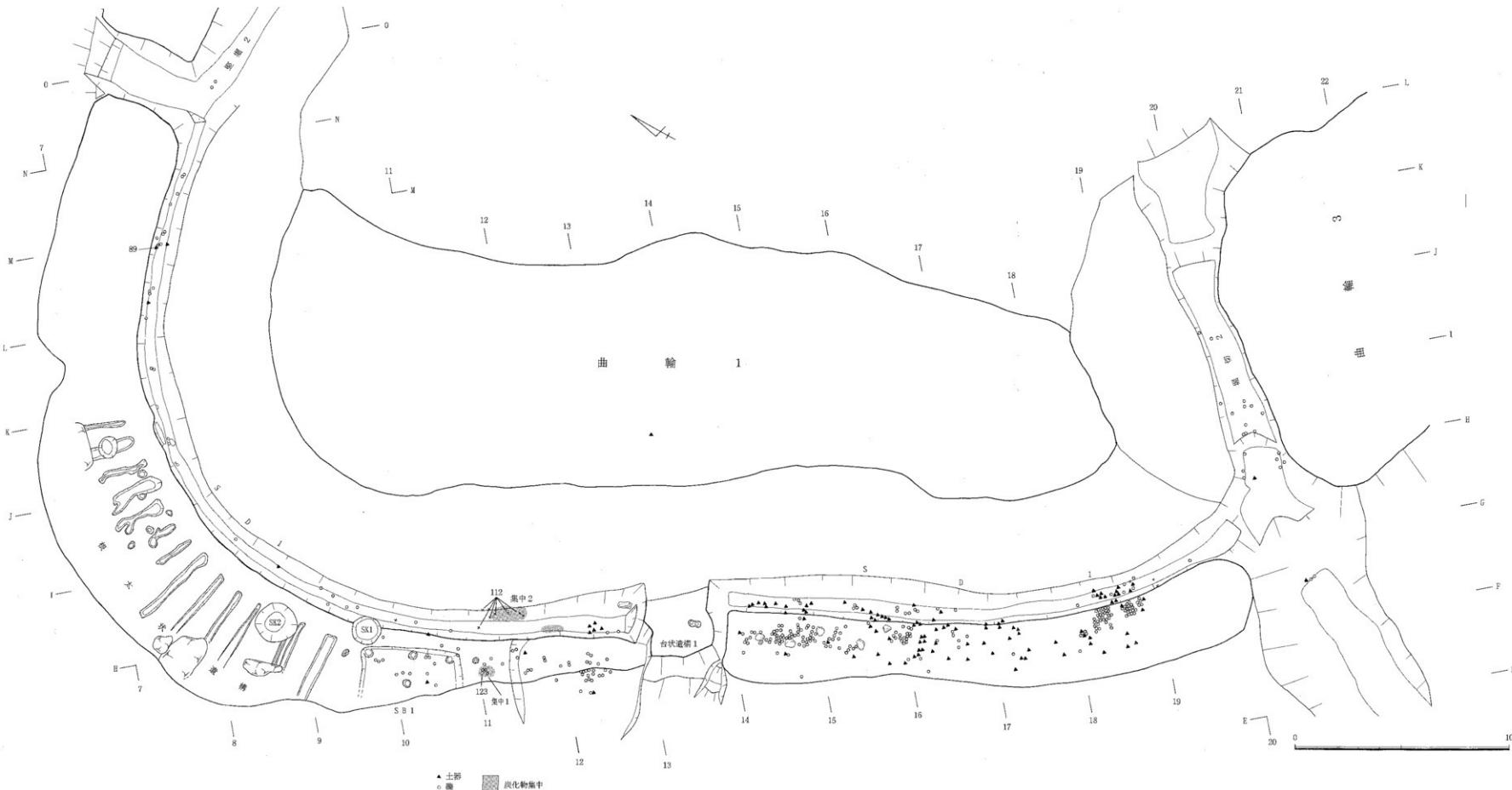


Fig. 12 曲輪2及び周辺遺物出土状況図

を含む円礫は同区域の平坦面に多い。SD 1 内では、M～N～7～8 グリッドでも集中がみられる。土器の形式や型式に注目して出土傾向をみると、まず杯では型式的な偏りが明確には認められない。皿はSD 1 内では 7 から 8 グリッドに偏在し、包含層では 12G 及び 16F グリッドで各 1 点が出土している。煮炊具はFig. 12 に示したように、地山面から浮いたものを含めて 3 個体が出土している。上記グリッドにおける曲輪 2 平坦面の覆土と SD 1 墓土の関係については、セクションで確定はできなかったが、土質や出土遺物からみて、大きな時間差を持たずに埋没したものと考えられる。

次に、ツブテについてみる。今次ツブテとして報告したものは原則として円礫の川原石で、片手で持てる程度の大きさのものである（場合により川原石に混ざっている手頃な角礫や、片手では持てないものをカウントしたケースもある）。言うまでもなく、本城跡の所在する山塊からは川原石は採取されない。総計 242 点の重量を Tab. 1 にまとめた。曲輪 2 の台状遺構 1 以北で 52 点、同曲輪同遺構以南で 170 点、堀切 2 で 20 点を計量したが、その平均値は順に 1.35kg、1.39kg、2.76kg である。

なお、Fig. 9 や 10 の SD 1 及び曲輪覆土の堆積状態や、地山面から 10cm 以上浮いて出土した遺物も稀ではないことなどからみて、遺物は原位置から移動している可能性もある。また、Fig. 9、16 及び Fig. 10 に表れているように、台状遺構 1 の両脇を中心で 9 から 18 グリッドにかけては遺物包含層が確認できたが、その他では他の曲輪と同じく表土のみであったり、表土と僅かな覆土しか存在しなかった。また斜面部ではほとんど遺物が出土していないなど、遺物分布について考察する充分な条件には恵まれていない。

SD 1

曲輪 2 の山側を取り巻く溝である。Fig. 12、付図 1 のごとく、山側では傾斜変化ラインを肩部とすることができ、幅 70～90cm を測る。深さは 40～110cm を測る。底面の標高は本遺構を分断する台状遺構 1 の両脇が最も高く、両端部に向かって徐々に低くなり、堀切 2、堅堀 2 への開口部では台状

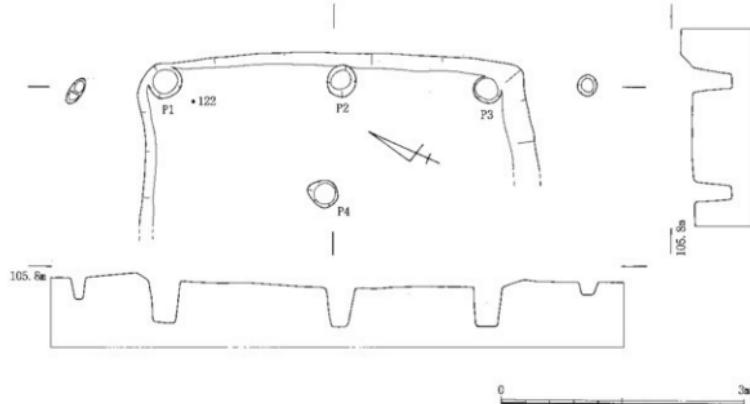
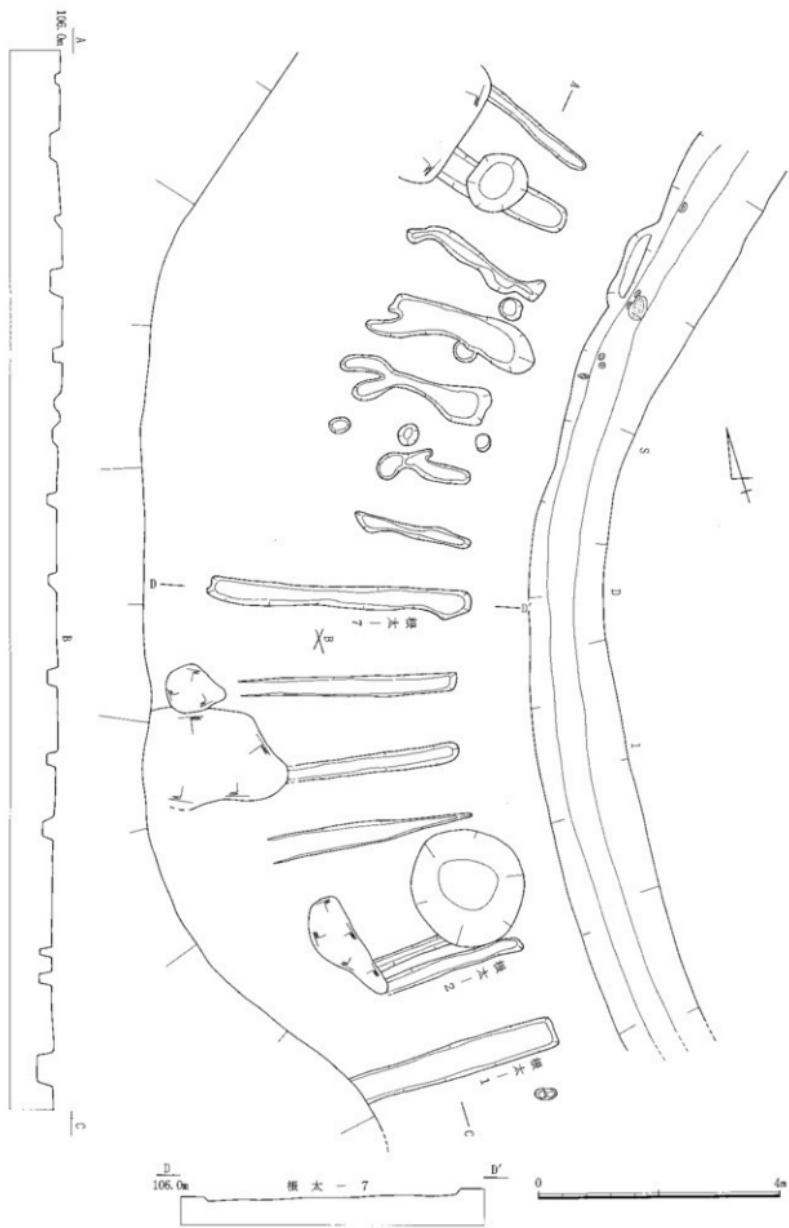


Fig. 13 SB 1 平面・エレベーション図

Fig. 14 横太状地盤平面・エレベーション図



遺構 1 の両脇から各々 10cm、64cm の標高差を測る。このことから SD 1 の機能の一つとして、排水機能が想定できる。堀切 2、堅堀 2 への開口部では、底面で各々 1.4m、0.25m の段差がある。埋土は図示したように 2 層に分層でき、上層は遺構外の埋土と区分できない (Fig. 9、10)。遺物は下層からより多く出土しているが、上層からも出土している。

SB 1

P 1 ~ 4 を方形プランの建物とみた場合、桁行 3.95m、梁間 1.4m 分を検出した。柱穴は径 35~37cm、深さ 45~50cm を測る。曲輪の西肩はいくらか崩壊しているとみられるものの、P 1 及び P 3 の対称位置に同規模の柱穴があれば検出されるべき状況であったにも関わらず、該当する遺構は検出できなかった。P 1 ~ 3 は、底面が平坦な深さ 10cm の方形の掘込みの縁に沿う。掘込みの南北両外側には各々長径 16cm、24cm、深さ 15cm、26cm と、一回り小規模なピットが位置する。各柱穴からの出土遺物は皆無であるが、上記の掘込み部から鉄製品 122 が出土している。

根太状遺構

曲輪 2 が最大幅となる部分で検出した 14 条の溝状遺構群で、深さは 9~28cm を測る。南半の 7 条のうち両端の 2 条が幅や深さ、残存長において最大で、南端の根太 - 1 は幅 56cm、深さ 28cm を測り、平面長方形、断面逆台形の明瞭な形状を呈するのが特徴的である。根太 - 7 は長さ 4.3m を測る。これらに比較して北半の 7 条は幅や形態が不揃いで、長さは 1.5~2.8m を測る。各溝の間隔は揃っており、SD 1 側で 1.0~1.8m、外側で 1.2~2.2m を測る。SK 2 に切られる他、搅乱や地山の風化・崩壊によって一部を破壊されている。遺物は根太 - 1 から 98、99、根太 - 2 から土師質土器細片 3 点が出土している。

SP 1 ~ 5

根太状遺構北半の間で検出したピット群である。SP 1 が直径 35cm・底径 28cm・深さ 9cm、SP 2 が直径 38cm・底径 28cm・深さ 14cm、SP 3 が直径 26cm・底径 18cm・深さ 10cm、SP 4 が直径 33cm・底径 15cm・深さ 13cm、SP 5 が直径 32cm・底径 25cm・深さ 14cm を測る。埋土はいずれも単層で、出土遺物は存在しない。SP 4 と SP 3、SP 5 の間隔はいずれも 1.2m である。

台状遺構 1

曲輪 2 の中央据部に位置する。岩盤を削り残して上面 2.8m × 3.0m の方形に造り出しておらず、高さは 0.7m を測る。やや南寄りに位置する SP 6 は径約 15cm のピットが 2 基つながった形状で、深さは 15cm を測る。本遺構の北辺にみられる小スロープ状の部分や、両据部の段については、これらが作為によるものか、岩目や風化・崩壊によるものかは確定できなかった。

集中 1 (Fig. 12)

SB 1 南側で検出した炭化物と礫の集中で、範囲は 0.6 × 0.78m を測る。123 をはじめとする礫の中には、強く被熱したものがある。炭化物には、数 cm 前後の比較的大きな炭も散見された。出土レベルは、地山直上のものから約 10cm 浮いているものまで存在する。123 は一端を埋めて立てた状態で被熱したものとみられ、火所での使用が考えられる。

集中 2 (Fig. 12)

集中 1 の東側で検出した炭化物と礫の集中で、範囲は 0.72 × 1.56m を測る。SD 1 上の山側に位置

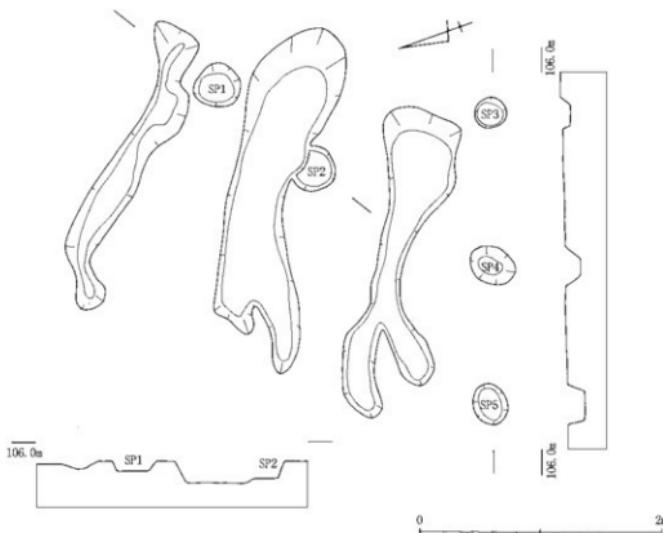


Fig. 15 SP 1 ~ 5 平面・エレベーション図

し、検出レベルは集中 1 に近いことから、Fig. 9 の V 層に属していた可能性が考えられる。土師器錫 112 の破片分布範囲は本集中に重なる部分が多いが、その出土レベルは東へと傾斜しており、炭化物集中と比較すれば西端部では 20 数 cm 高く、東端部ではほぼ同じである。

3. 曲輪 3 と検出遺構

曲輪 3 は曲輪 1 の南東側で、曲輪 1 との比高差 7.1m、曲輪 2 との比高差 0.6m を測る。岩盤が堅固な部分に該当するにもかかわらず、曲輪面は平坦に整えられている。切り岸も急峻で、特に南東面は整った立面に整形されており、曲輪の平面形も台形を指向していることが看取できる。堀切 2 以外での出土遺物は存在しない。

SA 1

曲輪 3 の南辺から西辺に沿う柱穴列で、柱穴の径は 27~34cm、深さ 26~63cm を測る。柱間距離は 1.3~4.0m である。埋土は単層で、出土遺物は存在しない。

4. 曲輪 4 と検出遺構

曲輪 3 の南東に位置し、平面形は綾長の二等辺三角形状である。曲輪 5 からの比高差は南端部で 2.2m を測る。中央を浅い凹部が横断するが、その深さは Fig. 7 の如く頂部で 20cm で、その他の部分も浅い。南半では中軸に約 10cm の段差があるが、これが城に関係するものか否かは明確でない。曲

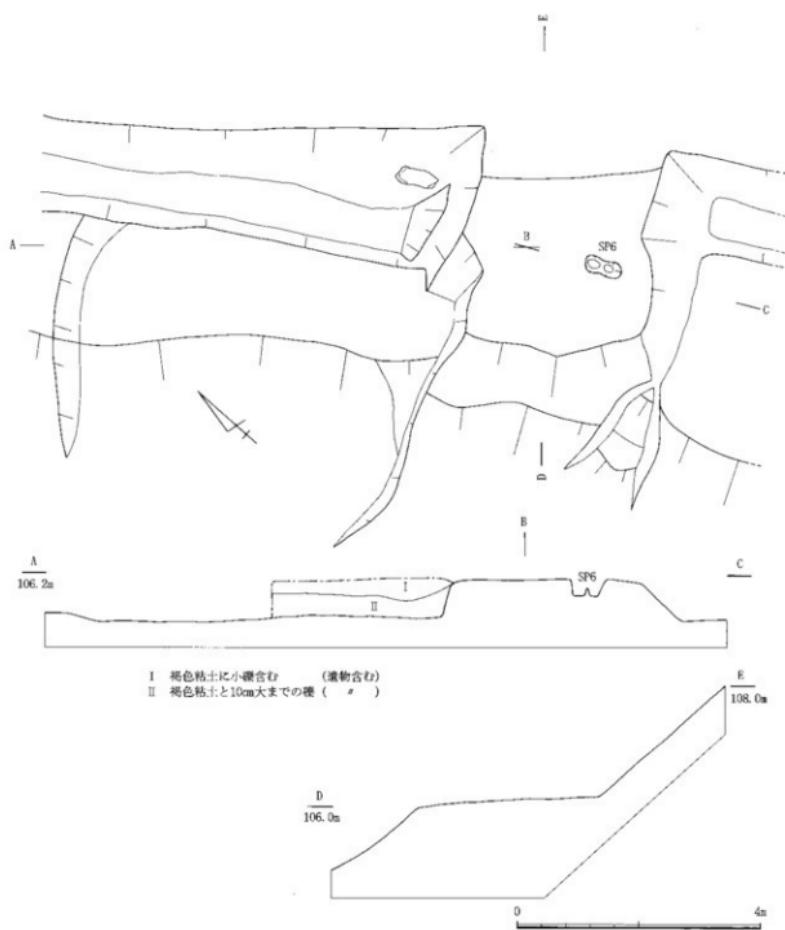


Fig. 16 台状遺構 1 平面・セクション・エレベーション図

輪4は整った平坦面ではなく小凹凸も認められ、曲輪1～3と比較すれば整形の丁寧さに明瞭な格差が認められる。中世に比定できる遺物は出土しておらず、118は近世に属す。

台状遺構2

曲輪4北詰めに位置する。台状遺構1に比して高さは50cmと低く (Fig. 7)、形状も不明瞭である。柱穴等は検出されなかった。付近は覆土も薄く、本遺構は発掘調査前から認識できた。

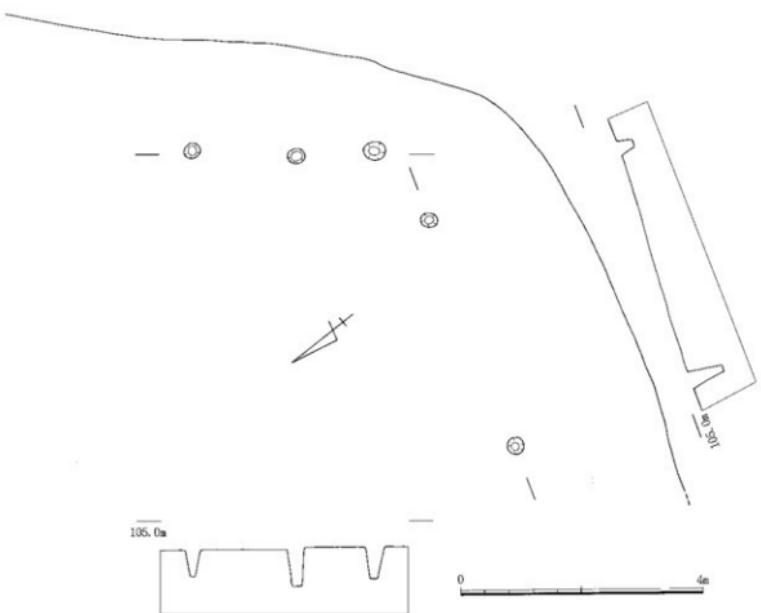


Fig. 17 曲輪3、SA1平面・エレベーション図

5. 曲輪5

南東端に位置し、整った平坦面は作出されていないものとみられる。

6. 曲輪6 (Fig. 11、付図1)

掘切3を挟んで北尾根を見下ろす小規模な平場である。肩部は不明瞭な部分があるが、約 2.0×5.0 mを測る。

7. 切尾根1

掘切3の北側では、直線的な尾根などに作為が看取され、より北側の自然地形とは異なる。周囲の状態をみても、特に西斜面は整形されており、断面三角形の尾根を作出したものと考えられる。東斜面は東側斜面の中でも特に急峻な絶壁で、調査の前・後を問わず人が素手で登ることはできなかった。なお、調査前の当該部以北は自然林で、植林や耕地としての利用はされていなかった。



Fig. 18 台状遺構 2 平面図

8. 堀切

堀切 1 (Fig. 8、19)

曲輪 4 と 5 の間に位置する。頂部底面の標高は 93.88m で、東側はそこから比高差 4.8m 下で消滅する。西側では同 6.4m 下まで確認し、さらに下方に延びる。頂部での曲輪 5 からの深さは 1.4m、曲輪 4 南東端からの深さは 3.9m である。西側斜面部は大きく抉られた切岸となっている。頂部での幅は 3.2m、断面逆台形の底部の幅は 0.8m を測る。

堀切 2 (Fig. 7、20、21)

曲輪 1 と 3 の間に位置する。堀切として報告するが、頂部は曲輪 3 からの深さ 0.4m と浅い。城内側の壁が、連続して大きな比高差とエッジを持たせて造り出されているのが特徴で、障壁となるラインを形成している。頂部での曲輪 1 から堀底までの比高差は 6.2m を測る。これに対して曲輪 3 か

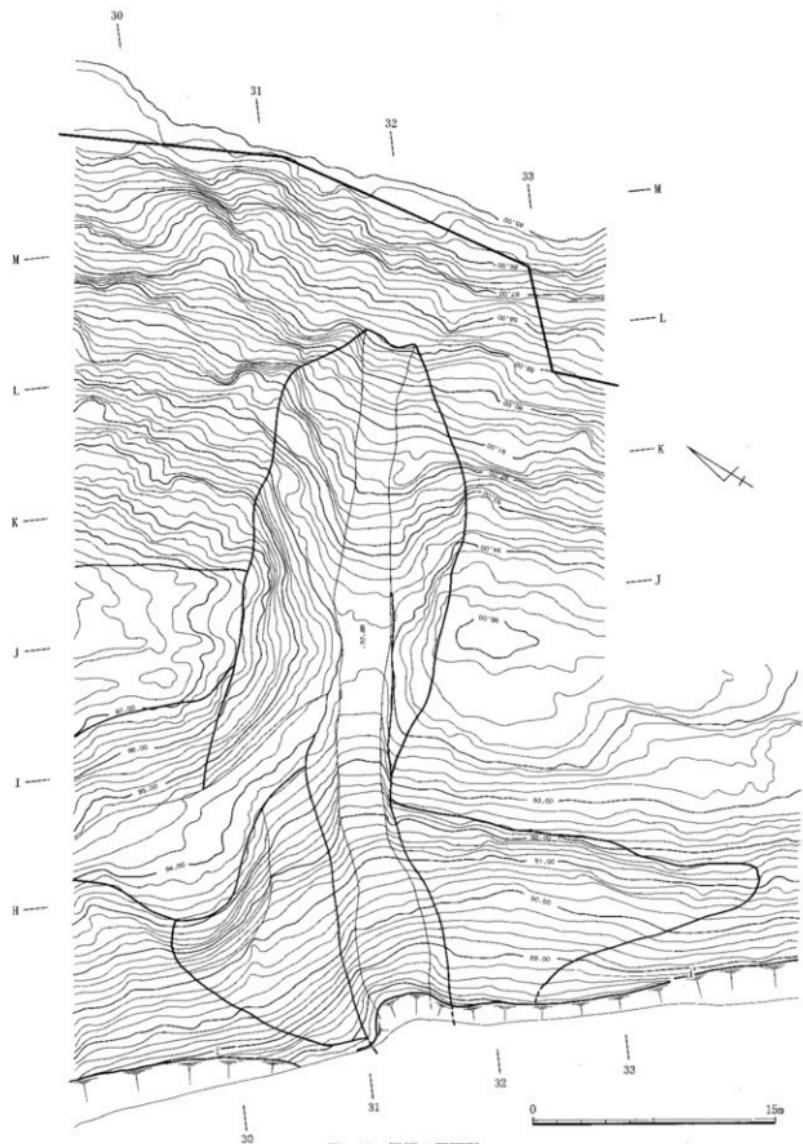


Fig.19 塌切1平面图

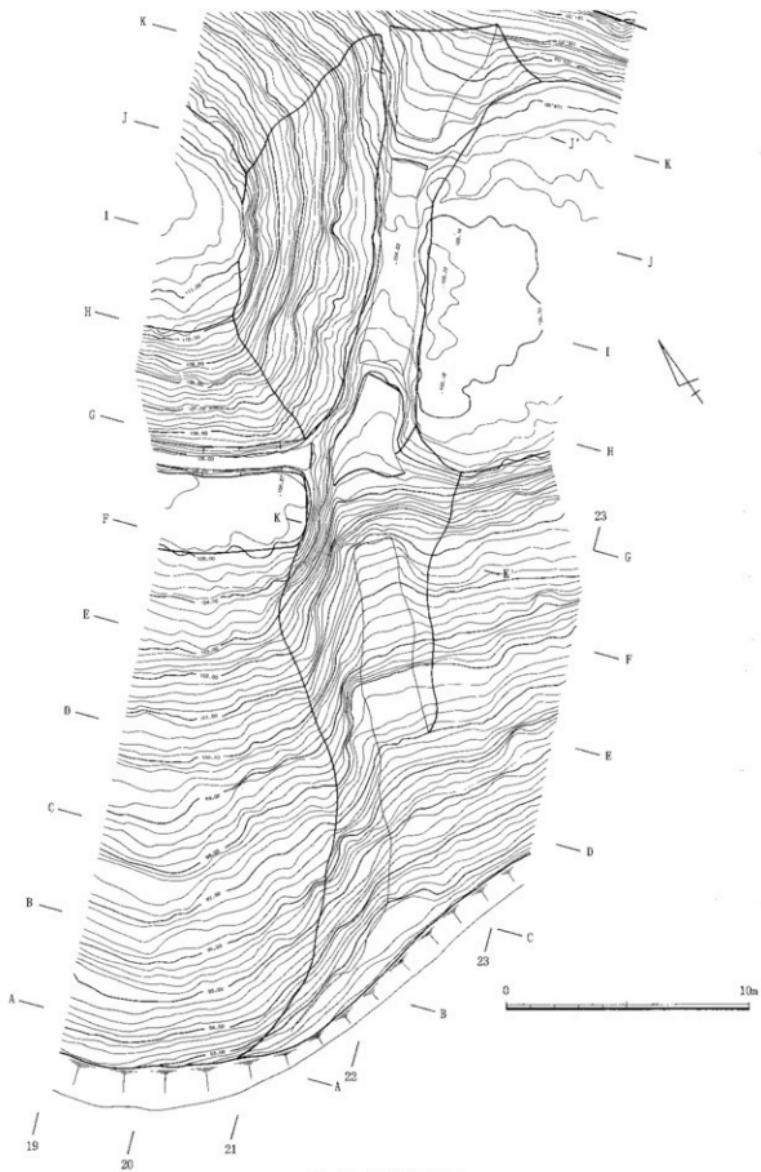
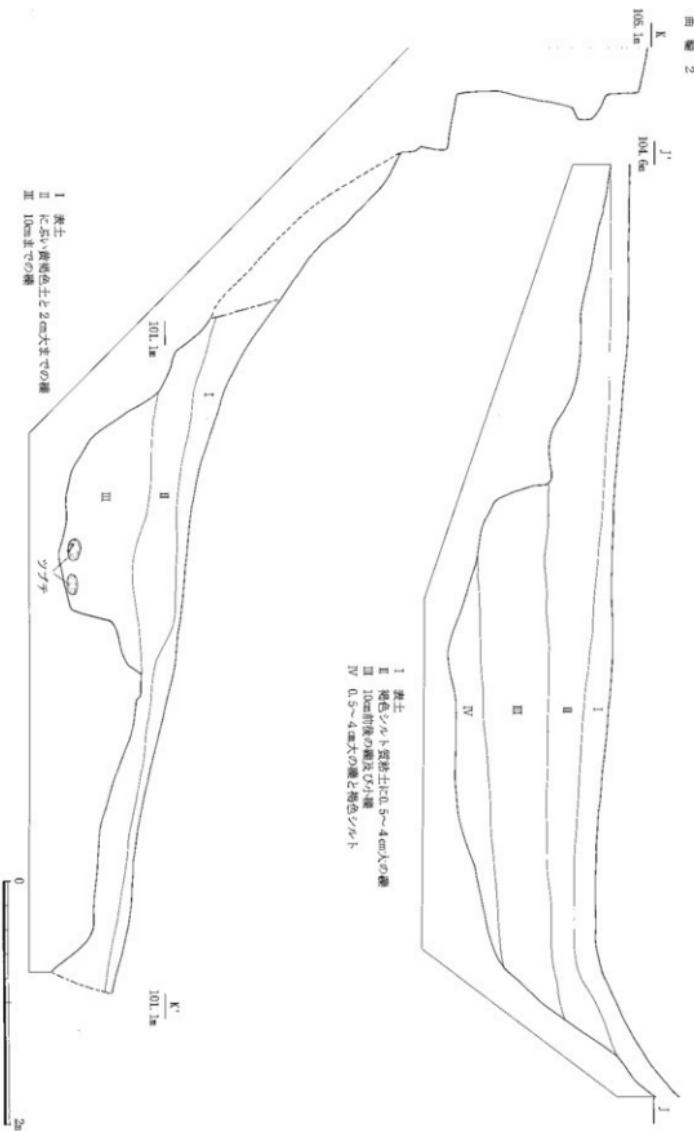


Fig. 20 堀切 2 平面図



らの深さは浅く、頂部ではそれのみでは防御効果を認め難い。頂部底面の標高は104.83mで、東側はそこから比高差3.2m下で消滅する。西側では同8.4m下で南肩が消滅し、北肩のみが落差を減じつつ標高93mまで続く。断面形は逆台形を呈し、頂部で底幅1.4mを測る。曲輪3の北詰にあたる頂部では傾斜が少なく、斜面部へは段差を持って落ちる。図示し得た遺物は90、124であるが、他にもFig.12のごとく底面近くから出土した。東部のJグリッド下層からも土師質土器細片が5点出土している。

堀切3 (Fig.11、22、23)

北部に位置する。頂部はFig.11のごとく北側尾根筋を掘り込んで深さ3.2mを測り、堀底の標高は89.7mである。北尾根からの深さは1.9mで、堀幅は8.0mを測る。西側斜面部の南肩は抉ったような状態である。下方は標高77.4mまで確認した。Fig.22及び23からわかるように、南肩の延長はさらに若干下方へ延びるとみられるが、豊堀としてはまもなく消滅するものとみられる。しかし付図からわかるように、当該部は北、西側両斜面が接するL字型の屈曲部を形成しており、これと堀切3を複合させているものと捉えられる。また、本堀切の東側は標高82m付近まで掘り込みがみられ、以下は絶壁となっている。出土遺物は存在しない。調査前の本堀切はFig.3のごとく頂部が認められるのみで、特に西側は付近の斜面部と共にFig.23のごとく厚い覆土におおわれていた。土質からわかるように下層は大小の地山風化礫からなるもので、城跡全域に普遍的なものであるが、上層には粘土の多い層や土壤化した層が認められる。このような土層が存在するのは、今次調査区内では当該部のみである。Ⅲ-2層とⅣ層は赤く見える土層で、Ⅳ層は礫の含有状態等、色調以外の要素はV層に近い。その上に土壤化のみられる黒褐色のⅢ-1層が堆積し、Ⅲ-3層はⅢ-2にⅢ-1層をブロック状に含む。これらの土層からは遺物が出土していないため、堆積時期に言及できないが、土質や土層断面からみて焼烟を含む耕作等との関係も考慮されよう。なお、当該部のみにこのような土質の覆土が存在する原因としては、斜面の傾度が東側に比して緩やかであること、城跡の斜面がL字型に屈曲し、堆積物が溜まり易いこと、北側斜面であるために有機質が残存しやすかったことなどが考えられる。

9. 壘

豊堀1 (付図1)

曲輪3と4の間に位置し、台状構造2の脇から東斜面に延びており、比高差11.6m下まで確認した。さらに調査区外へ延びるが、以下は絶壁で調査できなかった。堀切2と同じく、南肩からの深さは浅く (Fig.25)、防御機能としては、曲輪3側につくられた壁が重要である。曲輪3南東隅から下る角部が明瞭なエッジとなっており、豊堀1はこの障壁を効果的に作出するためにできたものと捉えるべきであろう。出土遺物は存在しない。

豊堀2

曲輪2の北東端に取り付く豊堀があるが、調査前はFig.3のごとく頂部が疊み状に認められるのみであった。曲輪1から堀頂部底までの比高差は6.8mを測る。曲輪2を横断する部分がL字状に連結している。同部と豊堀との切合の有無などは確認できなかったが、同部下層に堆積するFig.11

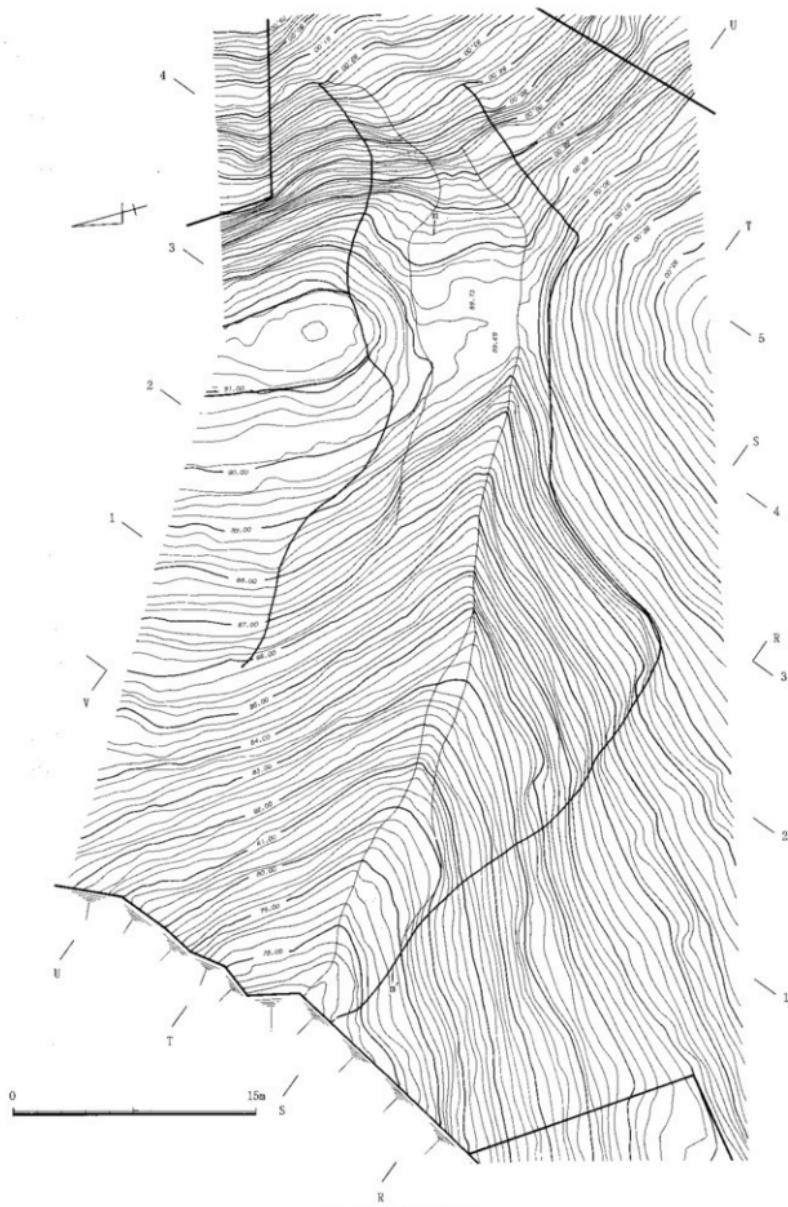


Fig.22 塚切3平面图

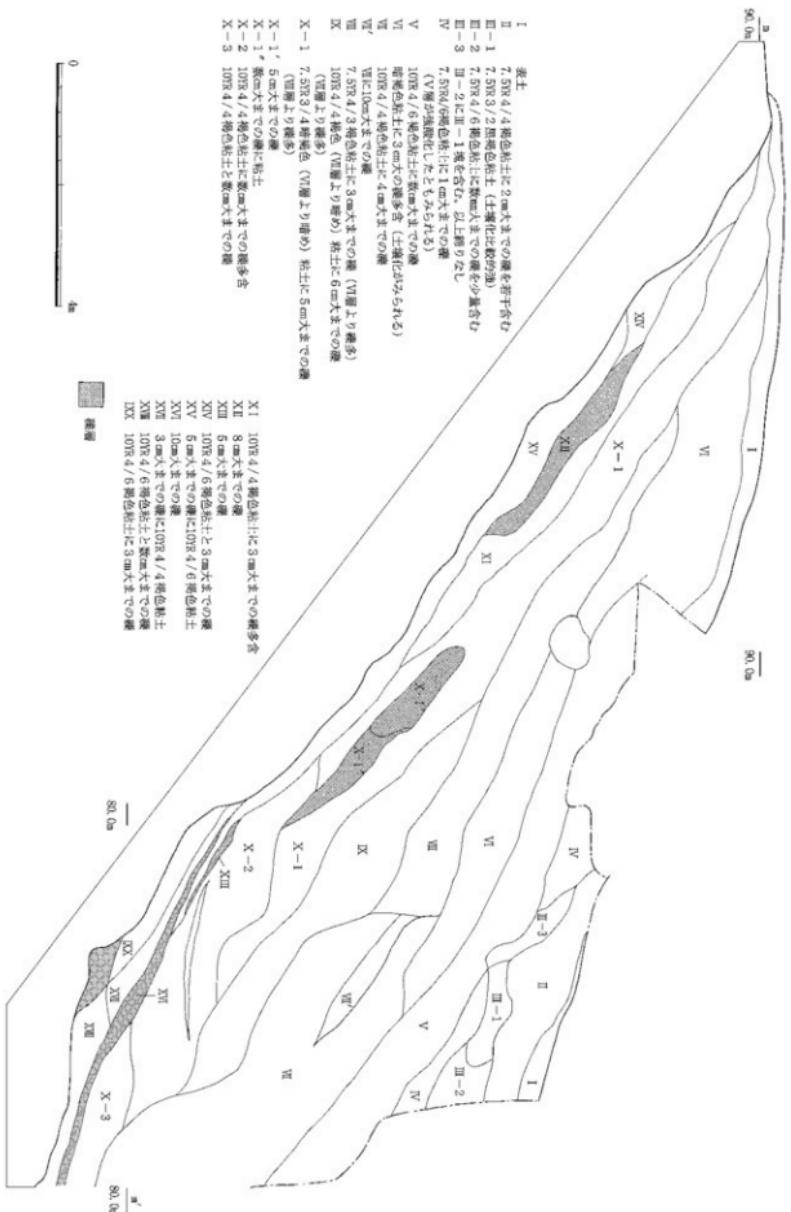


Fig. 23 縦切3線断セクション図

の堀埋土2はSD1には存在せず、豊堀には類似する層があるものの、同層と認定できるものはなかった(Fig.25)。堀埋土2は比較的大型の地山崩壊礫のみで占められ、繋りがなく、礫間に隙間のある部分も認められ、投げ込まれたようにもみえる。同部底面は、図示したように北斜面側に高まりがあり、豊堀側に向かって傾斜する。幅方向(東西方向)では水平に近く、整った面となっている。なお、SD1と豊堀との間では土質の変化や土層の切合いで看取できなかった。両遺構間の底面には、25cmの段差がある。本豊堀は他の堀と比較して直線的で、城外側(北側)でも深さを持っており、逆台形の断面形を比較的維持して掘り下ろされている。本豊堀は比高差で13m強を調査することができ、以下は絶壁となっている。調査区限界付近では掘込みは浅くなり、形状も乱れる。遺物は91、92を含む土師質土器杯片9点が豊堀頂部最下層から、同3点が上記のL字状屈曲部の最下層から出土している。円礫も出土している(Fig.12参照)。また斜面部の下半からも93~97が出土している。

豊堀3(付図1)

豊堀1の南西側対面に位置する。豊堀1をさらに浅くしたようなやや不明瞭な遺構で、曲輪3の隅から下る角部も本遺構側では鈍い。出土遺物は存在しない。

第2節 近世以降の検出遺構

曲輪2で2基の土坑状遺構を検出した。いずれも出土遺物は僅かな土師質土器細片のみで、時期を決定することは困難であるが、SK1の類例が小籠遺跡などにみられることや¹¹⁾、城に関連するとみられる遺構を切ることから、近世以降の所産と考えられる。

SK1

径1.34mの円形プランで深さは0.54mを測る。壁面には灰白色粘土のハンダがみられたが、残存部で厚さ数cmで、残存しない部分もあった。

SK2

径2.04mの円形プランで深さは0.74mを測る。壁面にハンダはみられない。

註

- (1) ハンダの色調が黄色であるという相違はある。「18世紀後半~19世紀代」の出土遺物が報告されている。
『小籠遺跡IIIーあけぼの道路建設工事に伴う発掘調査報告書ー』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
1997年



Fig. 24 竪堀 2 及び周辺平面図

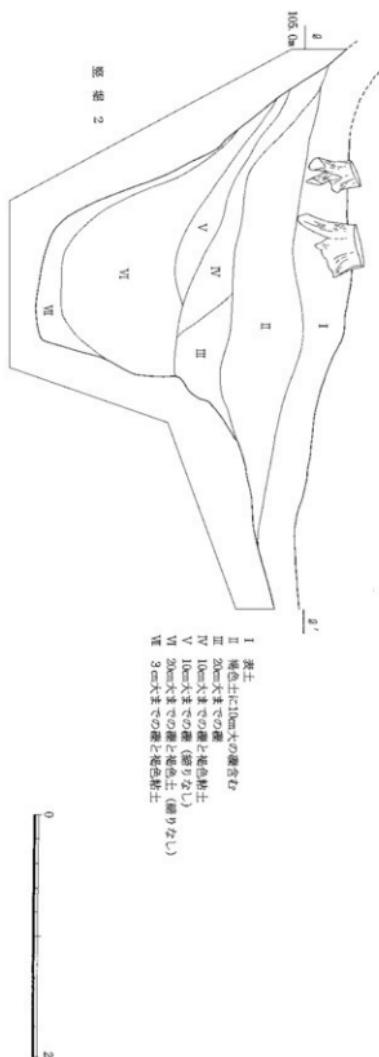
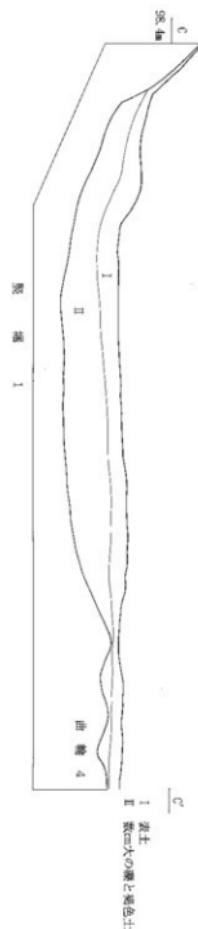


Fig. 25 縦断1、2セクション図

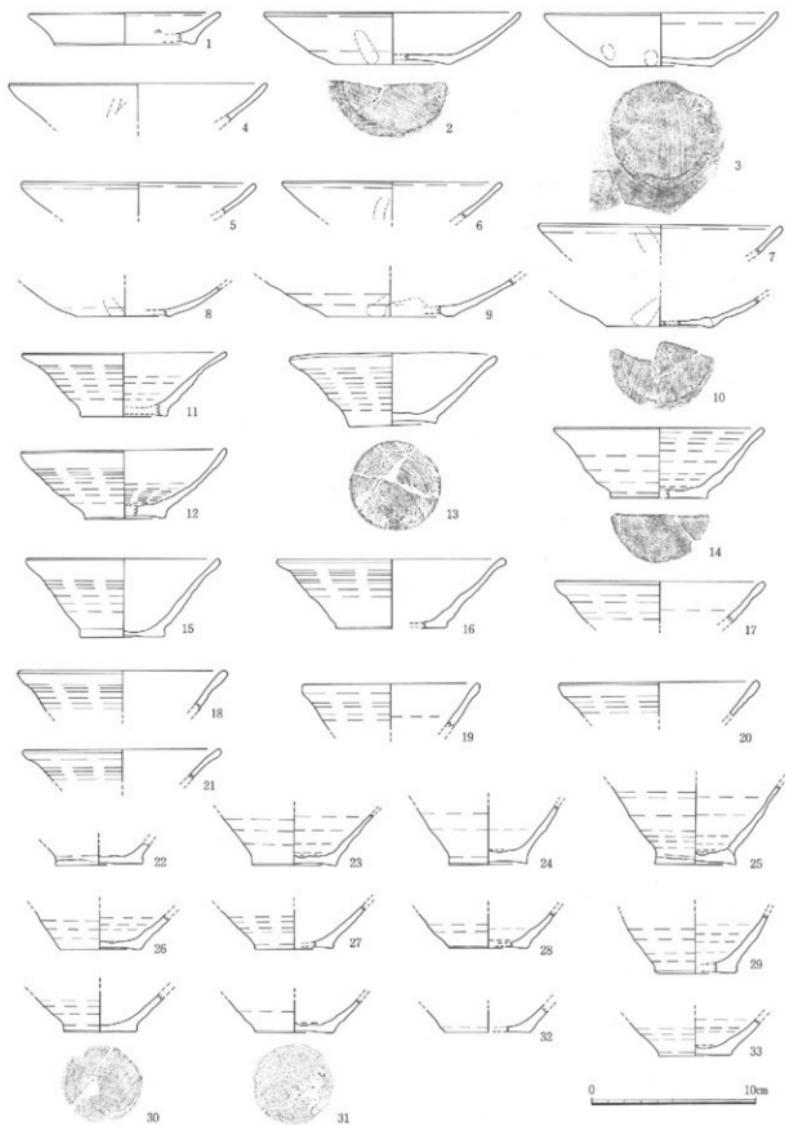


Fig. 26 SD 1 出土土器実測図 1

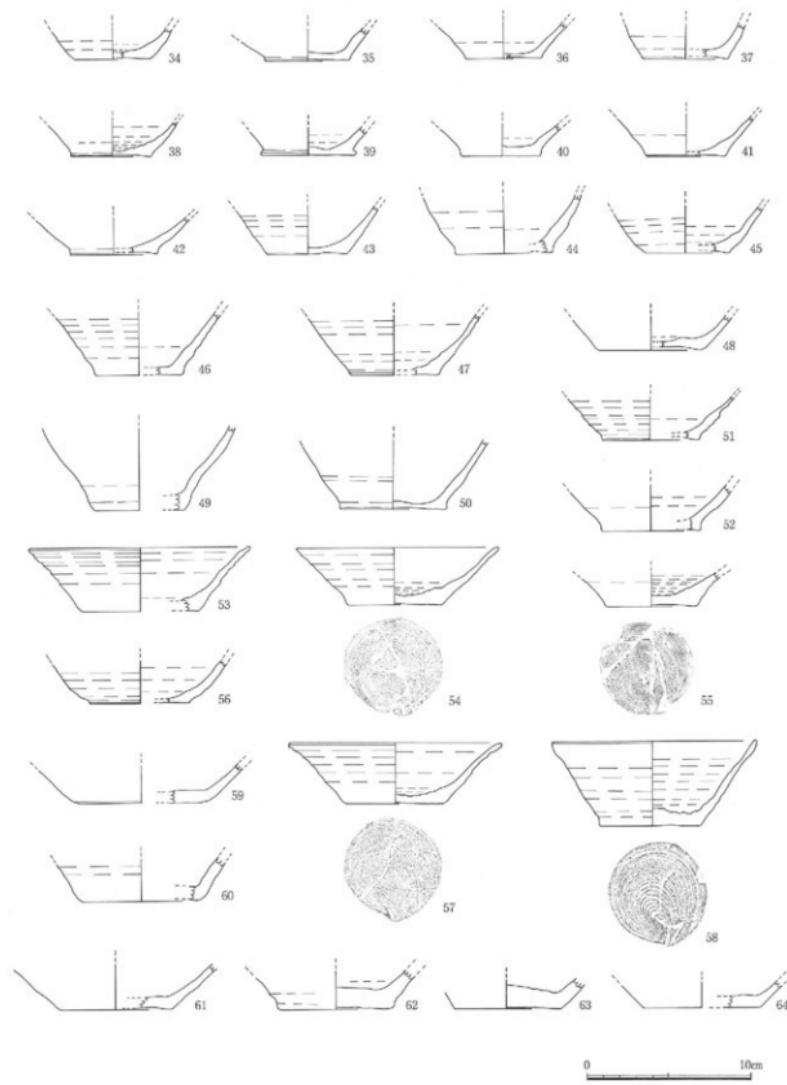


Fig. 27 SD 1 出土土器実測図 2

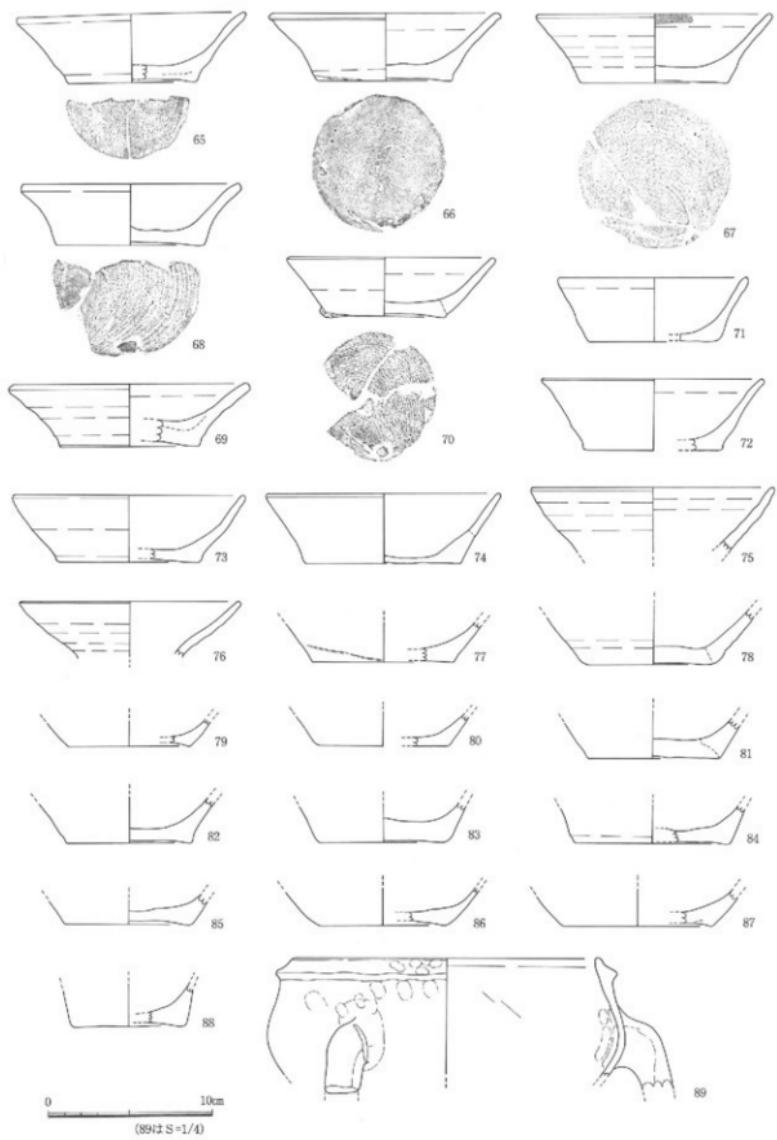


Fig. 28 SD 1 出土土器実測図 3

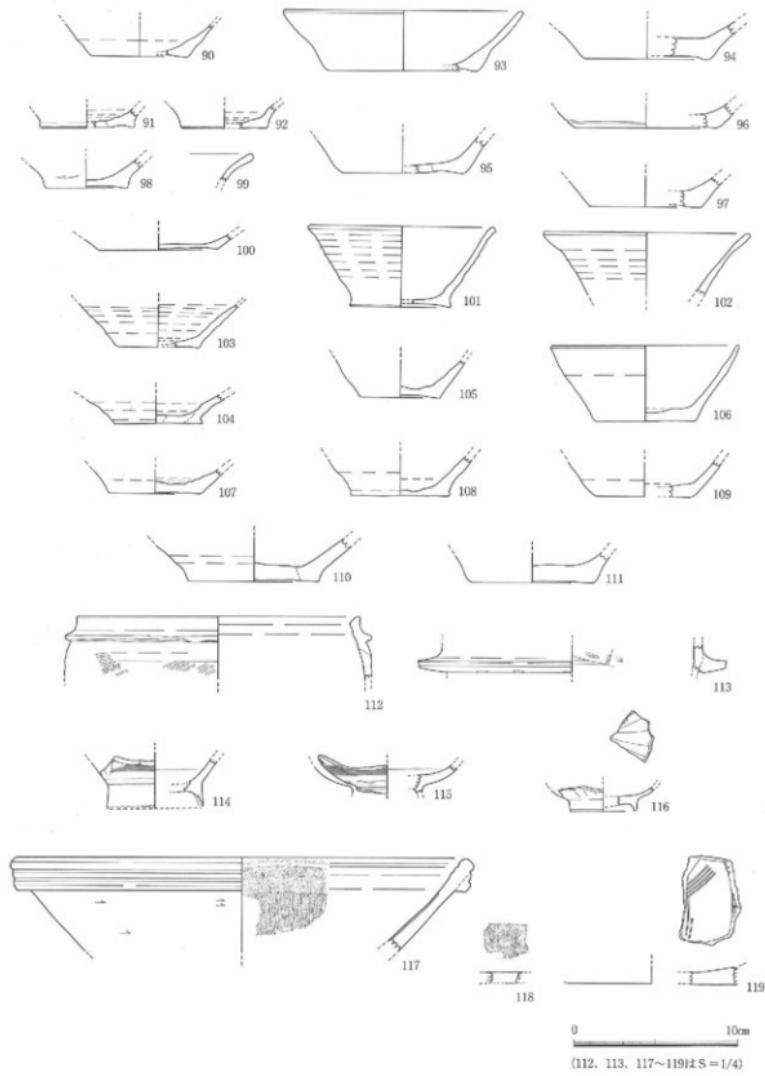


Fig. 29 塚、根太状遺構、包含層出土遺物実測図

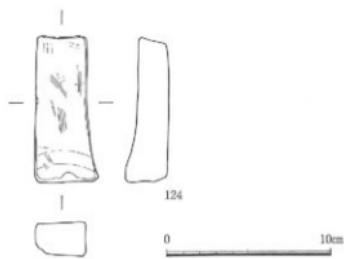
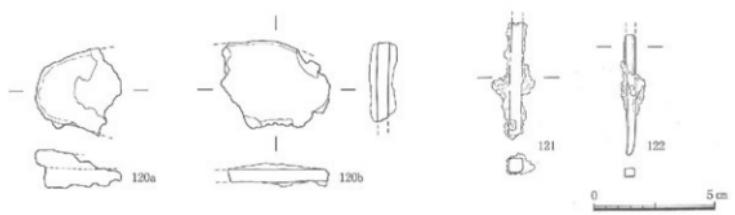


Fig. 30 鉄器、石器実測図

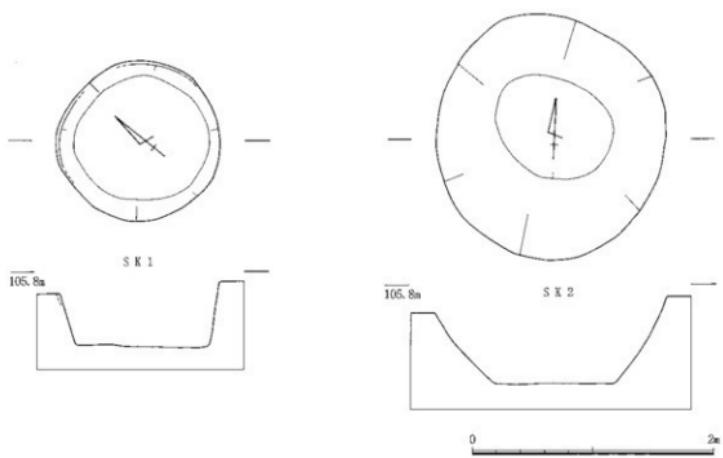


Fig.31 SK1、2平面・エレベーション図

Tab. 1 ツブテ計量表

	重量(kg)	重量(kg)	重量(kg)	重量(kg)
1	0.2	63	0.8	125
2	0.3	64	0.8	126
3	0.3	65	0.8	127
4	0.3	66	0.8	128
5	0.3	67	0.8	129
6	0.3	68	0.8	130
7	0.3	69	0.8	131
8	0.4	70	0.8	132
9	0.4	71	0.8	133
10	0.4	72	0.8	134
11	0.4	73	0.8	135
12	0.4	74	0.8	136
13	0.4	75	0.8	137
14	0.4	76	0.8	138
15	0.5	77	0.8	139
16	0.5	78	0.8	140
17	0.5	79	0.8	141
18	0.5	80	0.8	142
19	0.5	81	0.8	143
20	0.5	82	0.8	144
21	0.5	83	0.8	145
22	0.5	84	0.8	146
23	0.5	85	0.8	147
24	0.5	86	0.8	148
25	0.5	87	0.9	149
26	0.5	88	0.9	150
27	0.5	89	0.9	151
28	0.5	90	0.9	152
29	0.5	91	0.9	153
30	0.5	92	0.9	154
31	0.5	93	0.9	155
32	0.5	94	0.9	156
33	0.5	95	0.9	157
34	0.6	96	0.9	158
35	0.6	97	0.9	159
36	0.6	98	0.9	160
37	0.6	99	0.9	161
38	0.6	100	0.9	162
39	0.6	101	0.9	163
40	0.6	102	0.9	164
41	0.6	103	1.0	165
42	0.6	104	1.0	166
43	0.6	105	1.0	167
44	0.6	106	1.0	168
45	0.6	107	1.0	169
46	0.6	108	1.0	170
47	0.6	109	1.0	171
48	0.6	110	1.0	172
49	0.6	111	1.0	173
50	0.7	112	1.0	174
51	0.7	113	1.0	175
52	0.7	114	1.0	176
53	0.7	115	1.0	177
54	0.7	116	1.0	178
55	0.7	117	1.0	179
56	0.7	118	1.0	180
57	0.7	119	1.0	181
58	0.7	120	1.0	182
59	0.7	121	1.0	183
60	0.7	122	1.0	184
61	0.7	123	1.0	185
62	0.7	124	1.0	186



Tab. 2 ツブテ重量グラフ

辨認 No.	出土位置	層位	グリッド	器種	器形	材 分類	法 景(cm)			特 徴／その 他	残存率
							口徑	器高	底径		
1	SD 1	下層	9H	土師質 土器	小皿		11.8	12.0	8.5	内面凹。内底板ナデ状痕。	1/4
2	*	—	7~8M	*	皿		15.8	3.2	7.0	内底、外周ナデ。	1/2
3	*	下層	*	*	*		14.4	3.3	6.4	内底ラセンナデ	底1/1
4	*	上層	*	*	*		15.9			外面ナデ状痕	1/10
5	*	—	7M	*	*		14.4				1/5
6	*	上層	7~8M	*	*		13.4			口縁端部はシャープな角を持ち断面台形。外面にナデ状痕。	1/11
7	*	V層	7K	*	*		14.8			外面ナデ状痕	1/11
8	*	上層	*	*	*			5.9		外面ナデ状痕	1/5
9	*	*	*	*	*			7.8		外面ナデ状、内底ラセン状ナデ痕。	1/4
10	*	*	7~8M	*	*			6.5		外底周縁部が輪状に僅かに突出。	約1/2
11	*	*	7K	*	杯	LII	12.5	3.9	5.3	摩。底部欠損。	2/3
12	*	上層・下層	7~8M	*	*	*	12.6	4.2	5.0	底部破孔	1/2
13	*	VI層・検面	17F	*	*	*	12.6	4.5	5.5	底部小破孔	準完
14	*	上層	7K	*	*	*	12.8	4.3	5.9		底1/2 口1/4
15	*	上層・V層	12G	*	*	*	11.8	4.9	5.2	底部が薄い。	底1/2
16	*	下層	7J~L	*	*	*	14.0	4.2	6.5		約1/2
17	*	*	7~8M	*	*	*	12.8				1/8
18	*	上層	7K	*	*	*	12.8				1/8
19	*	下層	7~8M	*	*	*	10.8				1/6
20	*	VI層	15G	*	*	*	12.2			摩	約1/12
21	*	包含層	18P-K	*	*	*	12.1				1/6
22	*	VI層	14G	*	*	*		5.4			1/2
23	*	*	15G	*	*	*		5.2			1/1
24	*	*	17F	*	*	*		4.8	摩		1/1
25	*	*	15G	*	*	*		4.9			1/1
26	*	下層	7L	*	*	*		5.0	底部破孔		1/1

Tab. 3-1 遺物観察表

辨認 No.	出土位置	層位	グリッド	器種	器形	杯 分類	法量(cm)			特徴／その他	残存率
							口径	器高	底径		
27	SD 1	上層	7K	土質 土器	杯	L II			4.7	摩	約1/3
28	*	下層	7C- 7~8M	*	*	*			4.8	摩。底部破損。	2/3
29	*	上層	7K	*	*	*			4.7		1/4
30	*	*	7~8H	*	*	*			4.4	摩。底部破孔。	1/1
31	*	下層	7L	*	*	*			5.0		1/1
32	*	VI層	14G	*	*	*			5.6	摩	1/3
33	*	下層	7~8M	*	*	*			4.4		1/1
34	*	VI層	14G	*	*	*			4.7	底部破損	4/5
35	*	*	16G	*	*	*			5.2	摩	2/3
36	*	*	15G	*	*	*			4.7	摩	1/2
37	*	上層	7K	*	*	*			5.2	摩	1/2
38	*	*	12G	*	*	*			4.9		1/1
39	*	*	8I	*	*	*			5.8		1/2
40	*	*	7K	*	*	*			4.9		3/4
41	*	-	7J~L	*	*	*			5.0	底部破孔。内底黒斑。	1/1
42	*	VI層	14G	*	*	*			5.3	摩	1/2
43	*	上層	8N	*	*	*			4.9	摩	約1/2
44	*	*	7K	*	*	*			6.0		1/4
45	*	-	9~10I	*	*	*			5.1	摩。底部破孔。	1/1
46	*	上層・下層	7~8M	*	*	*			5.3	やや軟質	2/3
47	*	VI層・上層 ・下層	*	*	*	*			5.2	底部破孔	1/1
48	*	VI層	15G	*	*	*			6.4	摩。底部欠損。	7/8
49	*	*	16G	*	*	*			5.5	内面滑。杯Mと同様。	1/4
50	*	上層・下層	7~8M	*	*	*			6.3		1/1
51	*	上層	8N	*	*	*			5.9	焼成良好。内面滑。	約1/3
52	*	*	7~8M	*	*	*			6.0		1/4

Tab. 3-2 遺物観察表

探査 No.	出土位置	層位	グリッド	器種	器形	杯 分類	法 量(cm)			特 徴／そ の 他	残存率
							口徑	器高	底径		
53	SD 1	下層	8L	土師質 土器	杯	L I		7.2			底1/4
54	*	上層	7~8M	*	*	L I+L II	12.2	3.5	5.8		底1/1
55	*	下層	7L	*	*	L		5.7			1/1
56	*	VII層	16~17G	*	*	L II		6.0		底部破孔有	1/2
57	*	上層	8N	*	*	L I	13.0	3.7	7.0	黑色物質付着	底1/1
58	*	下層	8M	*	*	*	12.5	5.2	6.1		底1/1
59	*	VII層	17F	*	*	*		9.3			約1/2
60	*	上層	7K	*	*	*		7.6			1/4
61	*	VII層	14G	*	*	*		7.6		底部破損	3/4
62	*	上層	8N	*	*	*		6.7			約1/2
63	*	*	7~8M	*	*	*		6.5			1/1
64	*	VII層	17F	*	*	*		7.1			1/6
65	*	上層・下層 7K~8M		*	*	M	14.1	4.2	8.0		1/2
66	*	上層	7L	*	*	*	14.0	4.2	8.3		底1/1
67	*	中層	7K	*	*	*	14.4	4.2	9.2	口縁内面に黒色物質	1/1
68	*	上層・中層	*	*	*	*	13.5	3.8	9.0		約2/3
69	*	下層	7M	*	*	*	14.6	3.9	8.6		約1/3
70	*	VII層	16~17F	*	*	*	12.6	3.7	7.3		4/5
71	*	*	14G	*	*	*	11.6	4.0	8.0	擦。底部にラセン状粘土縫接合痕。	3/4
72	*	*	16G	*	*	*	13.6	4.4	8.0		1/4
73	*	下層	7~8M	*	*	*	14.0	4.1	8.7		1/2
74	*	*	7J~L	*	*	*	14.3	4.3	9.5		1/1
75	*	上層	8N	*	*	Mか	15.0			内面滑。杯Mと同胎土。	1/8
76	*	-	8K	*	*	*	13.5				1/5
77	*	VII層	17F	*	*	M		8.8			1/2
78	*	*	*	*	*	*		8.1			1/1

Tab. 3-3 遺物観察表

埠區 No.	出土位置	層位	グリッド	器種	器形	杯 分類	法量(cm)			特徵／その他	残存率
							口径	器高	底径		
79	SD 1	IV層	15G・16G -17F	土縫質 土器	杯	M		7.6		底部欠損	1/2
80	*	*	16G	*	*	*		7.9		摩	1/3
81	*	VI層・ 包含層	17F・15G -16K	*	*	*		8.0			2/3
82	*	-	9H	*	*	*		7.6		内面摩	1/1
83	*	-	16F	*	*	*		7.8			1/3
84	*	上層・下層	7~8M	*	*	*		9.4			約1/3
85	*	-	11~12H	*	*	*		7.9		摩	約1/2
86	*	上層	7~8M	*	不可			7.8		内面滑。摩。	約1/5
87	*	*	8N	*	杯	*		9.2		摩。杯Mと同胎土。	約1/4
88	*	中層	7L	*	*	*		7.0		胎土分類不可。	1/5
89	*	下層	8M	*	脚付 鍋		25.0			内面指痕痕とナゲ痕。内面全面黒色膜付着。外面スケ。脚に切り込み。石英、長石の大角粒多含。	口1/10
90	堅切2 西底	-	20G	*	杯	L		6.0		序	1/5
91	堅板2 上層	最下層	8O	*	*	L II		5.9			1/4
92	*	*	*	*	*	*		5.3			約1/4
93	堅板2 面部下半	-	-	*	*	M	14.4	3.7	9.6		1/5
94	*	-	-	*	*	*		7.8			約1/2
95	*	-	-	*	-	-		7.5		摩	1/4
96	*	-	-	*	-	-		8.8			1/7
97	*	-	-	*	杯	不明		7.0		摩	約1/4
98	根太1	埋土	9G~H	*	*	L II		5.0		摩	約1/4
99	*	*	*	*	*	L				摩	破片
100	曲輪2	-	16F	*	皿			7.4			約1/4
101	*	包含層	14G	*	杯	L II	11.5	4.9	6.8	摩	底1/2
102	*	*	14F	*	*	*	12.7			摩	1/6
103	*	*	11G	*	*	*		5.0		底部破孔	1/3
104	*	*	-	*	*	*		5.4			約3/4

Tab. 3-4 遺物観察表

拂団 No.	出土位置	層位	グリッド	器種	器形	杯 分類	法量(cm)			特徴／その他の	残存率
							口径	器高	底径		
105	曲輪2	包含層	7K	土師質土器	杯	LII		5.0	厚		1/4
106	*	*	8K	*	*	LIIか		6.3	厚		底1/4
107	*		14G	*	*	L		5.7			3/4
108	*	*	15G	*	*	*		6.0			1/1
109	*		16K	*	*	Lか		5.9			約1/4
110	*	*	15~16F	*	*	M		8.1			1/4
111	*	*	16F	*	*	*		7.5	厚		1/3
112	*	*	11G	*	壺		23.0			内面ナデ仕上げ、体部外側タタキ痕。内面黒色物質付着、外表面スケベテ。石英繊維多含。長石、赤色風化繊維含む。	1/5
113	*	*	18F	瓦質土器	羽釜		25.3			青・上面2段のヨコナデ痕、下面、列状の工具当り痕、内面黒い条痕を波ナデ条痕が切る。石英、長石繊維含む。同一個体とみられる体部寸が底より出土・外側ケズリ、内面ナデ。	
114	西斜面	表採	18C	乗付	碗			6.0	広東型。淡褐色の外貌。18C.末~19C.。		1/5
115	曲輪2	包含層	8N	*	*					薄い棘頭。濃い発色の外貌。19C.。	1/6
116	-	表採	-	白磁						内外面釉花。貫入あり。	1/5
117	曲輪3 下敷斜面 曲輪4	表採	低密度と高 密度(=30J) が接合		擂鉢		36.7			口縁内面は撚り目を切る2段のヨコナデ。沈線。 体部外側横位のケズリ。石英繊維多含。破。	1/6
118	曲輪4	包含層 下層	27I		*					内部底摩耗。石英多含。	
119	-	採取	-	*						内外底摩耗。内底縁には、撚り目下端が深く残 存。石英、長石繊維多含。	
120-a	SD1	中層	刀	武器						厚0.6cm、18.7g	
120-b	-	-	-	*						- 近のみ残存。本体厚さ5mm。20.7g。120-aと本來 同一個体とみられる。	
121	SD1	上層	8K	*						幅0.6cm	
122	SB1	包含層	9G	*						幅0.4cm	
123	曲輪2 集中1	-	-				長 26.6	幅 18.3	厚 12.9	砂岩。被熱部分にヒビ割れ。スケベテ。	
124	堀切2車	埋土	-	礫石			長 9.0	幅 3.9	厚 2.1	泥岩。3面使用。	

Tab. 3-5 遺物観察表

凡例

「應」は季耗。

「滑」は滑らか。

「外底」は底部外側、「内底」は底部内面。

「繊維」は根ね0.4mm以下。

残存率は復元周に対する残存率。底径或いはLII径などのうち、残存度の良い部位を採用した。

第5章　まとめと考察

第1節 小浜城跡出土土器について

本節では、第1に本城跡の使用時期について知見を得るために、出土土器の検討を試みる。しかし、土佐における当該期の土器資料は充実しておらず、精緻な編年観等は導き出すことができないことを断つておく。

1. 分類

小皿 1点を確認したのみである。

皿 I 型式のみが出土している。薄い器厚、整った器面、精良な胎土、良好な焼成と白っぽい発色が特徴的で、他の器形とは一線を画す。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部は外反せず、端部は狭い面を持たせるなどしてシャープに仕上げる。切離しは静止糸切りで、外底はやや持ち上がり、周縁部が僅かに高台状に突出するものもある。表面に回転成形時の

擦痕が僅かに残るが、繊細なタッチで凹凸は残らない。外面には指の痕跡が残るものが多いが、成形に伴う圧痕と言えるものではない。内面もナデられているものがあり、その痕跡が「の」の字状を呈するものもある。なお、本器形は他と一線を画す特徴を有するため、破片でも確認しやすく、Tab. 4 の点数についてもその影響が若干考えられる。

杯 L 回転ナデ痕が残り、特に体部外表面は顯著である。今次出土のものには、口縁部が外反し、体部下位は僅かに膨らみ、立上りは若干の段をなすものが多い。切離しは回転糸切りである。胎土は砂粒をほとんど含まない密なものであるが、上記の皿のような硬質感はない。発色は橙色ないし黄褐色系を中心とする。径高指数は28から42と幅が大きいが、他の属性では類似性が高く、今次は一括する。法量の大きなものを L I 、小さいものを L II とした。なお、径高指数の差などが時期差に起因するものか否かについては、後述のごとく現段階では不明である。

杯 M 径高指数は27から34程度と、比較的揃っている。厚い底部と内面の滑らかさが特徴的で、杯 L とは好対照をなす。体部も比較的厚く、外面の回転ナデ痕も杯 L ほどに顯著ではない。胎土には2 mmまでの砂粒や微気孔が皿や杯 L に比して目立ち、ザラッとした感触がある。発色は浅黄橙や淡い橙を中心とする。

煮炊具 まず足付鍋がある。類例は田村遺跡群等に求められる^⑪。次に112については、「播磨型」との呼称もあり、西日本各地での出土例が伝えられる。時期は15世紀中頃から16世紀中頃を中心とする見方がある^⑫。瓦質土器羽釜113は鋤部の破片で判断が難しい^⑬。112及び113の胎土中に含まれる鉱物自体は在地の土器とも共通するが、石英や長石の揃った粒や焼成の状態には違和感もある。

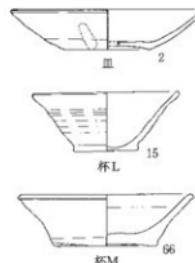


Fig. 32 杯・皿類型図

	小皿	皿	杯LII	杯LI	杯M
上層		8	34	6	13
下層	1	1	39	13	15
不明		1	1	1	12

*不明には中層のものも含む。
複合したものをはじめ胎土・焼成や出土位置から同一個体とみられるものは、1点として数えた。

Tab.4 SD 1層位/型式別出土点数

グリッド	皿	杯LII	杯LI	杯M	その他
18		11		2	羽釜1
17				1	
16	1	4	2	4	
15		2	1	5	
14		3		3	
12	1	10	1	1	
11		5			鍋1
10		4		1	
G8					不明2
K8		1		2	
J7					不明1

*複合したものをはじめ胎土・焼成や出土位置から同一個体とみられるものは、1点として数えた。

Tab.5 曲輪2グリッド/型式別出土点数

2. 出土状況

Tab. 4、5は出土遺物のほとんどを占めるSD 1と曲輪2包含層において、上記の分類に基づく出土傾向を、各々層準とグリッド単位で集計したものである。まず概要を述べれば、形式・型式による明らかな偏りは指摘できない。あえて探せば、SD 1で上層に皿が多い傾向、包含層では杯Mが15グリッドを中心とする傾向や杯L IIが12、18グリッドに多い傾向を指摘することもできる。11、18グリッドからは各々煮炊具が1点づつ出土しており、興味深い。しかし、このような所見に対する例外も少なくなく、中世に属する今次出土遺物については時期差を前提とせずに記述を進める。

3. 土佐での位置付け

今次出土土器群に関連する時期及びその前後の土佐における供膳具の概要を通観し、位置付けを行いたい。当該期の土器について整理を進めてこられた松田直則氏の成果に導かれて土佐での比較資料を検討すると⁴⁴、まず十万遺跡SD 1に杯L 級該当品が存在する⁴⁵。僅かに腰が張る形態は今次出土土器中にも類似するものがあり、IV類とみられる青磁碗や備前焼鉢が伴っている⁴⁶。次に、田村遺跡群Loc. 42⁴⁷や芳原城跡SK 2⁴⁸にも杯L 級譜のものが認められるが、それらには体部の外傾が増したものや、開き方が直線的ないしやや外反気味のものが多くなっている。芳原城跡SK 2では、口径は10から15cmで13cm付近に分布の中心があり、青磁碗や備前焼鉢が共伴している。以上、資料が充分とは言えない現状で敢えて年代観に言及すれば、今次出土の杯L 級は14世紀から15世紀末頃までの間のある時期に属するものと考えられる。これに既述の煮炊具の年代観を加え、16世紀前半までを視野に入れられた時間幅の中に、今次出土遺物群の帰属時期が求められると考える。引用した煮炊具の年代観は、各地での検証が一定進んだものであるが、杯皿については上記の時期幅をさらに絞り込めるほどには土佐の当該期資料が充実していない。言うまでもなく本城跡の使用時期に関わる問題であり、今後綱年の研究の進展を待って検討すべき課題である。

4. 静止糸切りの皿

今次出土の皿は、土佐では類例のなかったものである。切離しが静止糸切りである点が特に特徴的で、形態にも特徴がある。白っぽい色調、薄い器厚、丁寧な仕上げ、硬質の焼成も注意される。

土佐では古代後期に切離しがヘラ切りから回転糸切りへと移行し、その後中世後期の一部を除いて回転糸切りが圧倒的多数を占める。静止糸切りは全期を通じて例外的で、これまでの高知平野周辺や土佐西南部の中世遺跡における報告例はない。中世後期には田村遺跡群や岡豊城跡、芳原城跡で「手づくね」の皿が皿器形の主体を占める時期があることが報告されているが^⑨、このような様相は土佐の土師質土器製作手法及び土器様相において特異なものである。上記の諸遺跡はいずれも高知平野における当該期の撻点的遺跡と位置付けられる。それらの遺跡で出土している手づくね及び回転合成形の皿には、今次の皿と法量が近似するものも存在するが、上記の諸属性に合致するものはみられない。ただ、手づくねの皿の中には白っぽい色調のものがあり、今次の皿と一部共通する属性を求めた可能性がある。静止糸切りの皿についてさらに視野を広げて探せば、吉野川流域や讃岐では15世紀から16世紀にかけて静止糸切りの皿が存在するが、橙色や褐色系のもの、底部の厚いもの、回転ナデ痕が明瞭なもの、口縁部が外反するものが主流を占めており、法量にもバリエーションが認められる^⑩。つまり、切離し方以外では今次出土の皿とは異なる属性を示すものが多い^⑪。以上のように、小浜城跡の皿はこれまでの土佐における平野部およびその近辺の遺跡とは異なる型式であり、切離し方においては吉野川流域や讃岐と共通するものであるが、比較検討する上では既述のような在地土器編年の問題が横たわっており、今後の課題は多い。

註

- (1) 松田直則「土佐の古代末から中世の煮沸具について」「第3回四国中世土器研究会 発表資料」四国中世土器研究会 1991年
- (2) 長谷川真「兵庫県の在地土器－西播磨を中心として」第7回中世土器研究集会 1988年、土山健史「堺環濠都市遺跡における、15・16世紀の在地土器」「中近世土器の基礎研究V」日本中世土器研究会1989年
- (3) 森島康雄「中河内の羽釜」「中近世土器の基礎研究VI」日本中世土器研究会 1990年
- (4) 松田直則「土佐に於ける15・16世紀の土器様相」「第6回四国中世土器研究会 15・16世紀の土器様相」四国中世土器研究会 1994年、松田直則「高知県における中世土器の様相－15・16世紀を中心にして－」「中近世土器の基礎研究III」日本中世土器研究会 1987年
- (5) 「十万遺跡発掘調査報告書」香我美町教育委員会 1988年
- (6) 山本信夫「中世前期の貿易陶磁器」「概説 中世の土器・陶磁器」中世土器研究会編 真陽社1995年
- (7) 「田村遺跡群第10分冊 高知空港拡張整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」高知県教育委員会 1986年
- (8) 「高知県春野町 芳原城跡Ⅱ－第2～4次発掘調査報告書－」春野町教育委員会 1993年
- (9) 註4
- (10) 「天霧城跡発掘調査概報－香川県善通寺市・多度津・三野町所在の中世山城の調査－」一市二町天霧城跡保存会 1997年
『四国嶽賀自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告7 上喜来鉢子～中佐古遺跡』徳島県教育委員会／(財) 徳島県埋蔵文化財センター／日本道路公団 1994年
『空港跡地遺跡IV』香川県教育委員会／(財) 香川県埋蔵文化財調査センター／香川県土地開発公社 2000年。また、久保謙美朗氏、片桐孝浩氏にご教示いただいた。
- (11) 「丸山遺跡」「徳島県 埋蔵文化財センター年報Vol. 7」1996年

第2節 小浜城跡について

1. はじめに

本節では、第4章の諸事項より本城跡の特性について検討する。初めに要点を確認すれば、次のようになる。

- 1) 詰が瞬時に判断できる求心的な全体プランで、各曲輪には一定の機能分化が想定できる。
- 2) 切岸が防御の中心を担う。連続堀切や畠状堅堀、際立って深い堀等は存在しない。

2. 留意される諸事象

堀切・堅堀 堀切・堅堀とした諸遺構はいずれも城外側からの深さが不十分で、堅堀2を除き、切岸の効果増強を主目的とした方が理解しやすい。つまり、本城跡の主な防御機能は切岸が担っており、その効果を高めた結果、堀切や堅堀状の部分が作出されているものと捉えられる。堀切1については、城内側の切岸の比高差も大きくはない。また堀切2などについては、排水機能も想定することが可能である。これらの遺構については、木塚城跡の例が参考となろう^⑪。同城跡では、2つのピークに構築された2つの曲輪の間に堀切が検出されているが、それらは幅4m強、外側の深さ0.6~1mで底面は平坦で広く、それ自体での防御性は低い。同城跡の時期は南北朝期から15世紀前半とみられているが、小浜城跡の堅堀、堀切の特徴は、木塚城跡のような例との何らかの関連を示唆しているのではないだろうか。

SD1 底面の状況とともに、根太状遺構やSB1との位置関係も、SD1に排水機能を想定する場合の蓋然性を高める。しかし、例えば本遺構によって少しでも切岸の効果が増大するであろう事等、上記以外の機能を否定できるものではなく、木塚城跡で検出されている溝状遺構群との関係も検討しなければならないであろう。このような遺構を「横溝状遺構」と仮称すれば、類例は近年他地域において徐々に蓄積されてきており、まず岡山県の苦田ダム建設予定地で発掘調査された城崎城跡、河内城跡が挙げられる。城崎城跡では、幅1.8~3.2mの「犬走り」状の段部の城内側に幅1.5m、深さ0.6mの溝が伴い、「溝の縁には川原石が並べられて」いる。河内城跡では幅2m、長さ47mの段部に溝が伴う。前者は「鎌倉～室町時代」、後者は「南北朝～室町時代初期」とされる^⑫。また伊勢の立野城跡でも類似遺構が報告されており、発掘調査で15世紀前半の遺物が出土しているという^⑬。このように現時点での報告例をみると、横溝状遺構は15世紀代或いはそれ以前の使用が想定される城跡で検出される場合が多い。この種の遺構はその規模と位置から、地表観察では確認困難な場合が多いと考えられ、今後発掘調査を中心に事例が蓄積されるものと思われる。

出入口 本城跡では虎口はもちろん、各曲輪への通路や土橋、橋脚等も確認できなかった。これと関連して留意されるのが、2カ所の台状遺構である。台状遺構1では上面でピットも検出され、このような場所に櫓子などをかけたことも考えられる。

根太状造構 今次検出された根太状造構に簡便な建物を想定した。SB1も規模は大きくはない。このような建物の内容と奢侈品や陶磁器が存在しない出土遺物の内容との符合をみる事もでき、本城跡の使われ方が窺われる。つまり、恒常的な居住空間ではなく、必要に応じて必要な人員が駐在する様相が想定できる。なお、今次検出の根太状造構は、その規模や形状からみて南半と北半に分けられる可能性がある。やや放射状となる配置は、下記の例などと比較して特徴的である。また隣接するSB1が同時期に存在したとすれば、機能による構造差も指摘できよう。さて、根太造構自体は古代から例があるというが¹⁰、城跡での類例は僅少である。その中で福島県猪久保城跡の1号掘立柱建物跡は、規模などにおいて今次検出の造構に比較的近い点があり、時期は「14世紀後半から15世紀前半」とされている¹¹。同建物跡は斜面部に設けられた平場で検出されている。

遺物出土状況 第4章第1節及び本章第1節で述べた。造構配置と遺物出土状況を併せて考えると、出土遺物の多くが曲輪2で使用されたとするのが理解しやすいが、それらに曲輪1で使用されたものが含まれている可能性を全く否定することはできない。曲輪2下の斜面でも当該期の遺物はほぼ皆無であった。しかし、遺物の出土が曲輪2付近にほぼ限られており、しかもその南部を中心としていることは、SD1や各堀の埋土からの出土量からみても認識しておくべきであろう。ツブテの出土状況も土器と同じで、土器とツブテは一緒に出土した。今次出土のツブテはTab. 1のごとく2kg以下のものが多いが、8kg前後のものまで漸減的に出土しており、手投げと落石用などの用途の違いも想定できる。これらのツブテの出土位置が戦闘を意識した集積状態を示しているとすれば、本城においてどのように防御線が意識されていたかの傍証となる。また、山中城跡では1~4kgのツブテが主流となっており¹²、これに比べると小浜城跡では小さい方へ量的なピークがずれていることになる。なお、11グリッドでは地山からやや浮いたレベルで出土する土器の集中部もあり、面としては捉えられなかつたが、曲輪2の一部或いは全部がある程度埋没した時点でも遺物の廃棄があつた可能性を否定できない。次に遺物自体に関しては、貿易陶磁器が出土していないことが注意される。土佐における当該期以降の城郭では、貿易陶磁も一定量出土する例が稀ではなく¹³、城の性格や立地との関係について考える上で有効な比較資料となろう。

立地 地勢から読み取れるように、鏡川との洞川が合流する川口地区は、鏡村及びその付近における水陸交通の要衝であり、山間部地域と高知平野、また土佐山村方面と梅ノ木から伊野・仁淀川方面の通行上重要な位置を占める地点の一つである。現在同地区には村役場が置かれ、明治年間の繁栄の記録もある¹⁴。長宗我部地検帳での様相については次節で詳説するが、同地区付近には屋敷が多く、周辺の検地も同地区が基点となっている。また本城跡南側では道が城の下に引き込まれるように通っていた可能性があり、水陸交通をおさえるに適し、地域の要衝たる川口地区をも監視下に置くことのできる立地といえよう。また本城跡は、周囲を川に囲まれ天然の要害となった山丘上に位置するが、このような立地は、他の拠点とのネットワークを持たない場合には、包囲される危険性も高い。この点については、次節で他城跡と比較して検討する。

伝承 次節で述べるように、付近の城跡には城主、あるいはその居所や墓についての伝承が残っている例が少なくない中にあって、本城跡に関するそのような伝承はない。ただ次のような伝承が残っており、地元でも微妙にニュアンスを変えながらも語り継がれている。「寿永4年、小浜には悪党と多くの手下どもが堅固な城を築いてのさばっていた。人々に慕われていた針原の長者は、水が枯れて鏡川も渡れるようになる秋を待って、遂に悪党を倒すため立ち上がった。川原では死闘が繰り広げられたが、そこへ今井兼光という僧が通りがかり、針原村から強弓で対岸の小浜城を射て、悪党を一掃した。兼光は木曾義仲の四天王の一人、今井兼平の兄であった。その後兼光は里人に慕われ、針原で幸せに暮らした。」⁹⁾ 伝承はあくまでも伝承であることは言うまでもないが、次節で述べる他村やその城跡に関する伝承や墓所との間に大きな差異が指摘できる。また長宗我部地帳帳では、当地域で本城跡のみが「フルシロ」と記されている(Tab.11)。以上から、地域における本城跡への認識が、近隣の「村の城」とは異なっていた可能性が考えられる。

3. 繩張りや防御施設の総合的特徴

曲輪の機能と構成 詰の裾を腰曲輪がとり巻き、順次階段上に曲輪が構築されており、瞬時に詰が判定できる求心的なプランである。曲輪1では造構が全く検出されず、出土遺物も土師質土器小片1点のみであった。曲輪2では造構・遺物が集中的に検出された。既述のSD1類似の溝を持つ河内城跡と比較した場合、小浜城跡の曲輪2は幅を広げた部分に簡易な構築物を設けている。また既述のツブテの出土状況から、曲輪2が詰である曲輪1を防衛する重要な攻防線として意識されていたことが考えられ、曲輪2に駐屯と防衛の機能を想定できる。曲輪3は丁寧に整形されており、南縁にピット群が検出された。曲輪4は、曲輪1~3と比較して明らかに整形が粗雑で、堀切1との比高差や切岸などからみた防御性も低い。曲輪5は全く或いは一部を除いて加工されていないものとみられ、いわゆる捨て曲輪と捉えることもできよう。このような諸要素から、まず各曲輪が機能分化した構成を本城跡の全体的な特徴と捉えることができる。ところで、本城跡の全体プランを考える場合、南西に延びる尾根部が問題となろう。各図より明らかなように、本城跡の所在する山丘の西斜面は比較的緩やかな部分が多いことも考え併せれば、同尾根部の防衛の必要性は殊更に高い。にもかかわらず前章で述べたように、同尾根部で堀切や急峻な切岸等の明瞭な防衛施設が検出されなかった点については、様々な解釈の余地があろう。平坦面で造構が検出されないことや地表観察で切岸が明瞭でないこと、遺物が出土しないことをもって該当部が繩張り外であるとは断定できず、本城跡の南西尾根部についても、何らかの機能を想定することはもちろん、造構が後世破壊されている可能性も否定できない。これは今次調査での遺物出土状況や、曲輪4の状態などをみても首肯できるであろうし、他地域でも同様の報告・分析が多くなされている。

防衛施設 本城跡の堀切・堅堀には、際立って大規模なものや複数条を重ねたものは存在しない。切岸の裾と一体化した堀切・堅堀は、当然ながら城内側には大きな比高差を持つが、城外側では0.4m~1.9mと比較的浅い。また曲輪数は多くはなく、虎口も存在しない。これらのことから、本城跡においては切岸が主たる防衛機能を果たしているといえる。前章で記したとおり、堀切2・堅堀1

では切岸と堀が一体化した城内側の段差が斜面部にまで及んでおり、一連の「障壁」¹⁰ ラインを形成しているものと解釈できる。堀切3も、その頂部における城外側の比高差は大きくなく、その西側部分は、城の北斜面の防御効果を高めた帰結と捉えられる。また、曲輪1の周りの切岸の全て及び曲輪3の東・南各切岸は特に急峻で、発掘調査完了時も登行が極めて困難あるいは不可能な部分が多くあった。北側の曲輪2以下の斜面は整った斜面となっており、斜度こそ曲輪1のそれに若干劣るもの、下から見るとピラミッド状の大きな壁が立ちはだかっているようにみえた。さらに、各曲輪への出入口も確認できること等、調査成果からは建物や出入口よりも、まず防御性の高さが注目される。これらの普請は曲輪3や城の北斜面部の状態等から推して相当の作業量を要しており、そのような労力を費やすて防御性を求めた山城として解釈できるのではないだろうか。

4. 小結

以上の事象をまとめれば、本城跡の縄張りは求心的で、各曲輪には一定の機能分化が想定できる。鏡川を外縁の防御線ともみることができ、周辺からもよく日立つ立地である。時期的には、前節で述べたように15世紀後半から16世紀前半頃の使用が考えられるが、先行期の使用も現段階では否定できない。運くとも長宗我部氏による検地時には廃されており、村落との関連の強さが看取される周辺の山城群とは異なる認識がされていた可能性もある。他城跡との比較は次節に譲るが、Tab.13他から、本城跡は当地域では最大級の規模と一定の防御性を持つ部類に属する一方、長宗我部期頃に出現するといわれる新相の遺構群は持たないことに特徴が求められる。本城跡を営んだ勢力について明言することは難しいが、このような諸事象からみれば、土豪層を上回る勢力が関わった戦略的な山城であった可能性が考えられよう。また、注意されるのは土師質土器皿である。前節で述べたように、今後土佐においてこの種の土器の有無あるいはその在り方に關する資料の充実が望まれるが、その系譜や分布は本城跡を営んだ勢力や、その背景にも関わる問題となってくる。今後の慎重な検討が必要である。

註

- (1) 徳平品「木塚城跡発掘調査成果報告」『第18回全国城郭研究者セミナー「本拠における城郭体制」』第18回全国城郭研究者セミナー実行委員会／中世城郭研究会 2001年
- (2) 「城跡現地見学会資料」岡山県古代吉備文化財センター 1997年・「発掘された久田の文化財I—よみがえる久田の歴史—」国土交通省苦田ダム工事事務所／岡山県古代吉備文化財センター 1997年
- (3) 山本浩之「南伊勢の山城—迷断系技術の展開を中心に—」『中世城郭研究第14号』中世城郭研究会 2000年
- (4) 山中敏史氏にご教示頂いた。
- (5) 「東北横断自動車道遺跡調査報告28 猪俣保城」福島県教育委員会／(財)福島県文化センター／日本道路公団 1994年
- (6) 高島勝「山中城跡「つぶて石」の考察」「山中城跡II」三島市教育委員会 1994年
- (7) 松田直則「四万十川流域出土の貿易陶磁」「貿易陶磁研究No.16」日本貿易陶磁研究会 1996年・吉成承三「土佐の城郭出土の貿易陶磁—同豊城跡・姫野々城跡を中心に—」『城館出土の貿易陶磁器—織田前夜の西国大名と貿易』日本貿易陶磁研究会 2000年
- (8) 「鏡村史」鏡村教育委員会 1989年
- (9) JA高知市「グリーンひろば」2000年2月号掲載文を要約した。
- (10) 中井邦氏にご教示頂いた。

第3節 山間部の村落と城郭 一長宗我部地検帳を利用して一

長宗我部地検帳を利用した歴史地理学的研究では、小林健太郎氏、島田豊寿氏らの著名な成果がある¹¹。また、松田直則氏らによって城郭研究や考古学的成果を取り入れた研究も進められている¹²。本節ではこれら諸先学に導かれつつ、鏡村を中心に高知平野北縁部も加えた地域の様相について、「長宗我部地検帳 土佐郡 上・下」¹³の内容を概観し、まず村落の景観復元と内部構造についての考察を試みる。後半では城郭の分布と繩張の特徴にふれる。本節で中心となる地域は、四国山地の南縁にあたり、地勢は険しい山地となっている。しかし、高知平野へも程近く、高低差は大きいが山道を利用すれば徒歩で數十分～数時間程度の地域がほとんどである。その関係の緊密さ故に、当該地域は平野部から見て「北山」と呼ばれてきた。このような地理的環境については第2章でも触れており、付図2等からも理解できる。このような特性は、山地が海岸に迫る南四国の地勢によるもので、高知平野も広くはなく、当該地域は山間部でありながら、平野部のみならず海とも隔絶的ではない。当該地域について理解するには、このような地理的条件に対する認識が必要である。

I. 主に長宗我部地検帳からみた鏡村及び周辺の様相

対象は同帳中「土左山九名」、「地頭分地検帳」、「領家山地検帳」に記載される地域とするが、紙幅の関係上、梅木名から桑尾村にかけての地域を中心検討することとし、その他は適宜取り上げることとする。高知平野部については後に触れる。さて、上記3帳はいずれも天正17年の記録である。以下、各帳に記載された地域を各々土左山九名、地頭分、領家山と呼称することとする。領域はいずれも高知平野の北から北西側にかけての山間部に該当し、四国山地へと連なる地勢である。各村・名の概要を示す諸項目や集計結果については、Tab. 6～10にまとめ、文中では全てを列挙しないこととする。地名や村・名の位置等についてはFig. 42及びFig. 43を参照されたい。上記3地域は鏡川とそれに合流する諸河川の流域でもあり、東川、的瀬川が概ねの境界となっている。なお、特に「鏡村史」¹⁴は多岐にわたって参考しており、出典を特記しない場合は原則として同村史からの引用である¹⁵。

1. 土左山九名

鏡川上流部及び周辺の山地を領域とする。高知平野から望める「北山」に展開し、西方の地頭分とは東川、東方の長岡郡とは分水嶺を各々境界の目安にできる。検地は南東部から始められ、宝蔵、三谷、津々見、永谷、日浦、梶谷、呂蒲、西川、梶谷、永谷、梶谷、高川、桑尾、久万川、東川、広瀬の順であり、概ね南部を西進した後、鏡川の南側を東進し、さらにその北側を西進している。日付は天正17年4月8日である。上記各領域は全て「村」の表記である。西川村と松尾分以外では、寺社分などの例外を除いて全域が「御直分」（長宗我部氏直轄地）であり、その中の割名請が「名本分」、「名本扣」、「名本分ふ」等となっている筆が相当数存在する。この「名本扣」が相当の比率を占める点が、地頭分や領家山との相違の一つである。また、小計として「合」を末尾に記す村と、

それを記さず、他村と連続的に扱われる村がある。広瀬村は途中で一旦合算される。他村分を内包する村も多い。「松尾分也三谷村」では、4者の主名請と御直分が存在する点が本節で扱う3地域では異例で、平野部に似る様相である。以上を要略すれば、Tab. 10にも表れているように村の分限が一部錯綜している点が地頭分や領家山とは大きく異なる。その他の特徴として、まず寺社分の筆が目立つことが挙げられる。地目は、三谷村と宝蔵村を除いて切畠の比率が非常に高く、耕地面積の多くを切畠が占めている村もある。出田の比率は他の2地域に比して低い。なお、検地役人の中に大黒備前守がみえる。Fig. 33には桑尾村から広瀬村にかけてと、地頭分の中切名の概要を示した。

三谷村・三谷村分宝蔵村

土左山の南縁部で、高知市街を見下ろす位置にある。宝蔵村は比較的谷が浅い地形で、本節で扱う山村中最もまとまった緩傾斜地を有し、田畠の面積も大きい。扣・作職人は、両村に扣・作地を持つ四郎左衛門、与十郎が各々1町2反46代4分勾、1町4反36代2分勾、宝蔵村の三郎衛門が4反40代5分、三谷村の与左が9代と、中に破格の地積を有する者があり、平均値も非常に高い。名本分・名本扣は、合計すると5割に近い。宝蔵村ではヤシキの比率が極端に少なく、切畠は土左山としては異例に記載がない。このような様相は、後述する公事分^⑩と名本分の混在地区における公事分の傾向に反する。出田は、宝蔵村で全地積の42%を占める。「トイ」や寺社関連の記述は三谷村本村にのみ所在する。以上の諸事象から三谷村・宝蔵村は、御直分でありながら小農民は僅かしか記載されず、後述する「公事分型」の構成にも合致しない。

津々見村

広瀬村の南半に接し、平坦部は少ない。ヤシキ集中地区で「トイ・名本分も」「観音堂床」「寺ヤシキ」が近接する。扣・作職人当たりの平均地積は比較的大きく、出田は8反9代1分を数える。西川村

小規模な村であるが、「中島甚助給」である点が土左山九名において異例である。彼の扣・作地は切畠2筆のみで、田・畠・ヤシキはない。切畠に囲まれた「トイ」は「甚五郎も」で、中島甚助の居所はない。なお、宝蔵村には「前西川分・下々・中島甚助給」が1筆みえる。

高川村

桟谷村に統いて検地される。図示しないが、「城」と「トイ」のホノギが近接して所在する。切畠も含めて扣・作職人の数比は高く、特に田畠では、広くない地積の割に多くの人数が記載されている。名本分・名本扣の田畠における比率は6割を超える。「土佐国齋簡集」では名主高河氏の長宗我部臣従を示す史料があるといい^⑪、御直分化された村の名主層の一例と捉えられる。

桑尾村 (Fig. 33)

高川村と広瀬村に挟まれる。検地は「トイ」付近から始まって、城跡の所在する山丘を一周するかたちで進み、「西ノ森」から西進して久万川村へ向かう。「トイ・名本分も」に近接して「下々山島ヤシキ・庵屋敷・滝宮神田」や、「宮ノ脇・切畠荒」がみえ、現在付近には仁井田神社が所在する。「堂ノ本・地蔵寺免」も存在する。切畠は、Tab. 9 中で広瀬村に次ぐ地積を有す。切畠も含めて名本分・名本扣が相当の比率を占め、田畠では8割超と高い。宝蔵村の他、広瀬村にも若干の筆がある。領主として永野若狭守の伝承があり、広瀬村の弘瀬氏との争いも伝えられ、西/森城跡の裾に若

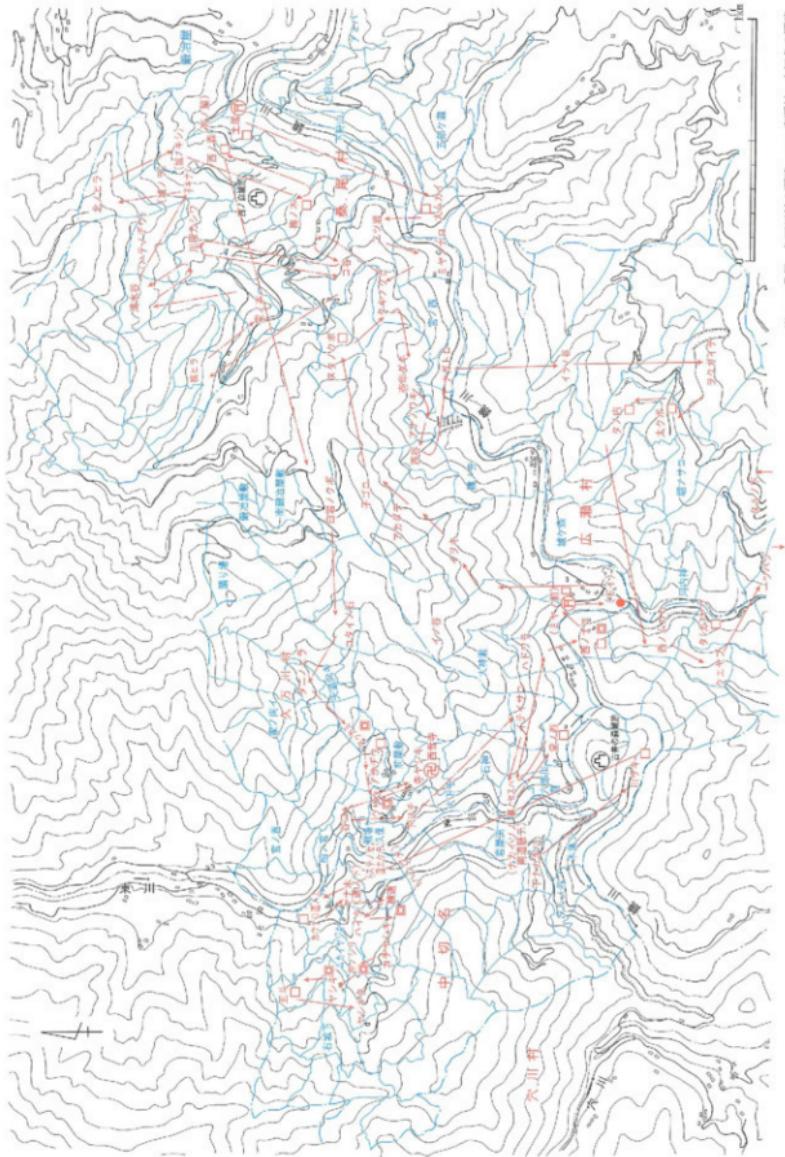


Fig. 33 土左山九名北東部及び中切名検地輪路及び概要図

※ 一案地へ矢印万川村の輪路 ■——赤線付、中切名の輪路
※ 以下の図については注(50)参照

狹守のものといわれる墓がある。

久万川村 (Fig. 33)・東川村

桑尾村から連続的に検地され、小計も桑尾村と合わせて記される。東川村は久万川村に接し、規模はごく小さい。いずれにも土居のホノギや名本の居所はみられない。久万川村に「西音寺」が存在する。

広瀬村 (Fig. 33)

領域は鏡川の南北にまたがる。他村・名の総地積に数倍するような破格の切畠地積を有す。検地は岡のごとく、久万川村最後のホノギと同じ「堂ノ西」の「久戸川堺詰テ」より始めて鏡川北岸を進んで「西ノタニ」で一旦集計し、南岸に移る。北岸では「イヲキ」の手前まではヤシキが比較的多く、屋敷地と切畠が交互に現れ、特に「ミヤノ前」「トイ石枕引テ」周辺は上ヤシキが複数存在する。「トイ石枕引テ」も上ヤシキで、Tab. 6では破格の地積であるが、「善介ゐ」である。上記の「堂ノ西」からは、地頭分との境である川沿いに「堂」があったことが知れ、対岸の中切名の様相と併せて要所をなしている。南半では切畠の中に下々山畠ヤシキが散在する状況で、南端には「カチガナロ」(1反28代1分勾・下・太郎五郎控)がみえる。また付近には現小字名「カワラケウネ」も存在する。扣・作職人及びヤシキ数は多いが、切畠を含めた地積に対する比率でみれば格別の突出は指摘できない。また、居ヤシキが少ない点は隣の久万川村とも共通する特徴である。

2. 地頭分

東川以西、的瀧川及び鏡川以東を概ねの領域とする。「村」と表記される地城は、蓮台村を除き全て一村給地であり、「名」は白岩名を除いて公事分と名本分に分かれる。公事分のみで占められる村・名は存在しない。蓮台村は蓮台分、白岩名は久万権介の給地である。検地の日付は天正17年4月10日で、芝卷村、蓮台村、大垣内村、コハマノ村、太利村、中切名、穴川村、永野村、永崎村、下村、定永村、草宗名、白岩名、狩山名、吉原名、識山名、柿又名、的瀧名の順に記載される。南部の鏡川東岸から遡って西岸に移り、的瀧川合流部の「川口」まで下ってから山地方向に入り、再び川口方面に戻る順となる。なお、切畠は「地頭分高山切畠地検帳」として別に記される。

芝卷村

蓮台村、円行寺村に接する。全て芝卷平兵衛に給されており、「主居」も存在する。内部構成では、Tab. 10に示した「主作」など名本の手作地（以下、主作地）が9割を超える点が最大の特徴で、他の扣・作職人は極僅かな地積しか記載されておらず、彼らが主作地の耕作を担っていたことが考えられるし、さらに記載されない小農民の存在をも示唆する。Tab. 9の平均値も、このような構造に大きく影響されている。

蓮台村

全て「蓮台分」で「非有齋持」である。「主居」、「主作」、「名本分」の記載はない。扣・作職人当たりの平均地積は比較的小さい。また各筆が小さく、1反を超える筆は3筆のみで、1反28代を上限とする。「蓮台寺」の系譜については、平安時代にまで遡る見方が鏡村史他にあるが、地検帳ではTab. 7のごとくかつての繁栄を伝えるホノギがあり、寺床や坊分も残っている。しかし、かなりの

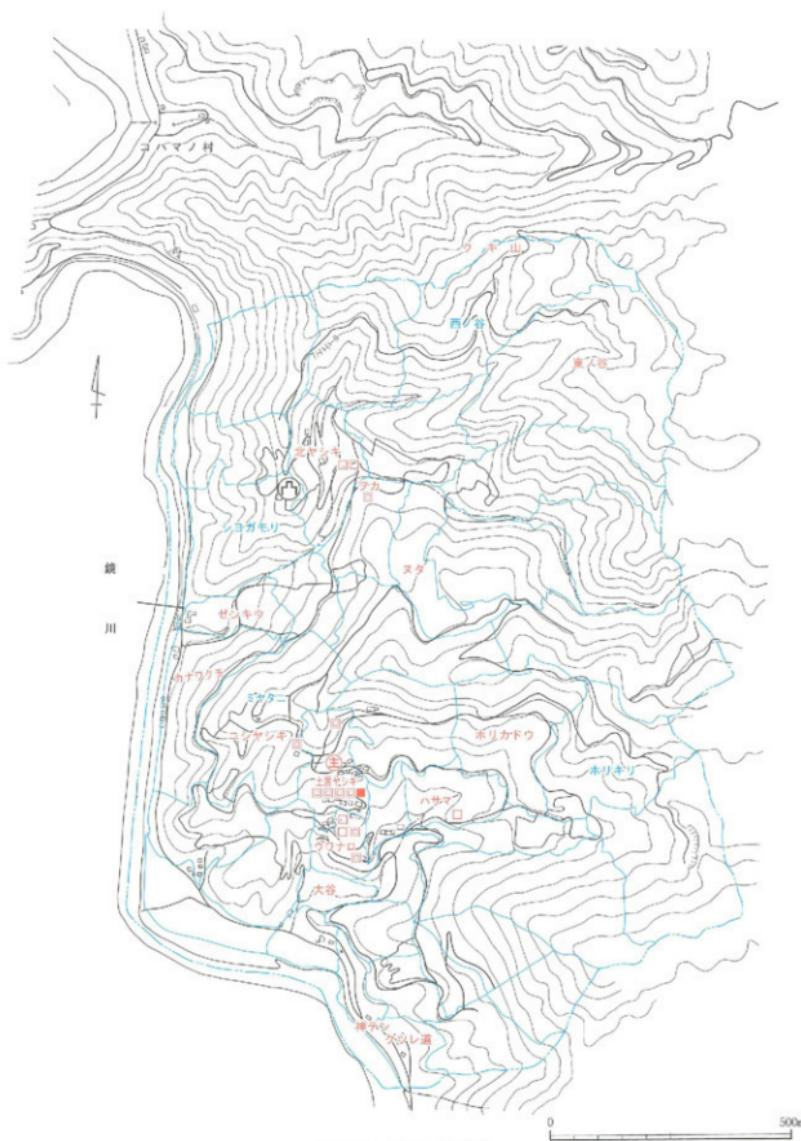


Fig. 34 大垣内村概要図

筆が扣・作職人の「ゐ」となっている。以上のような諸事象と、出田の比率が地頭分及び土左山九名では例のない高さを示すことから考えて、本村では長宗我部氏の把握が進んでいるものと解釈できるのではないだろうか。また地検帳では「道」の記載が多く、芝卷村から本村を通って南下する道が復元でき、神/森城跡の裾を通って鏡川沿いの尾立村へと続く道が存在したものと考えられる。尾立村では地検帳に「舟付」のホノギがあり、現字名から鏡川東岸に比定できるが、同地点に所在する尾立遺跡からは縄織陶器をはじめとする平安時代の遺物等が出土していることから³⁹、長宗我部期以前から「川津」・道・蓮台寺が関連を持っていたことが考えられる。なお、非有齋は滝本寺の僧侶であるが、長宗我部氏支配下で当主の権限の一部を代行する場合もあったといわれ、神/森城も彼に委ねられたとの見方もある⁴⁰。

大垣内村

鏡川の東岸最下流に位置する。「吉松筑前」の一村給地である。検地は谷奥の「ホリカトウ」から始められ、谷を下りて「クツレ道」、「カナワクチ」の川沿いに進み、「北ヤシキ」、「東ノ谷」の山林をまわって、本村の中核部である「上居ヤシキ」周辺に至る。切畠分でも検地は「ハサマ」より始められ、北部の「クキ山」で終わる。ヤシキの集中する地区は、緩斜面となっている。大垣内城跡は現小字名「ショガモリ」に所在する。現在、城跡の所在する尾根の鞍部を村道が越えるが、この道は付図2のように村の中核部へと通じており、住民によると以前は主な往来の1つであったという。さて本村については1562年、大垣内城に撃たれた伊達入道を長宗我部氏配下の吉松氏が滅ぼしたとの文献がある⁴¹。「土居ヤシキ」には吉松筑前守を記す墓所が現存する。吉松氏は本山氏などの配下であったと言われるが、朝倉合戦に先立つ1559年には長宗我部氏に臣従する者が一族にあったことを示す史料があるといい⁴²、その後長宗我部政権下でも有力な一族となっている。

小浜村

地検帳では「コハマノ村」等と記載され、「小浜次郎兵衛」の一村給地である。大垣内村と太利村に挟まれる。好条件の平坦地は少ない。検地は小浜城跡裾部の「スチカイ」から始められ、「カウチ神」周辺のヤシキ集中地区、「クキ」、「下クキ」の山林を経て、北部の「川クチ」、「ニカ木」で終わる。切畠では「タキ山大垣内サカイ」より始まり、「フルシロ」、「クキノタニ」を経て「マツノモリ」周辺で終わる。ヤシキ集中地区は現在も人家が集中する所で、付図2のごとく芝巻・蓮台方面への道が接する部分にもある。また、太利村との境界が川に接する地点の太利側は「セキノ本」で、小浜側は現在も「川口」と呼ばれ、付図2のごとく道路の重要な結節点であり、現役場も所在する。以下、同地点付近を川口と呼称することとする。さて、「主居」のヤシキは「名本ヤシキ」そのものか、或いは隣接しており、周辺にはカウチ神、カチヤシキ（下ヤシキ・神五郎ゐ）などがみえる。村内の構成は他の一村給地の村・名と大差なく、扣・作職人あたりの地積平均と主作地の割合が、どちらも若干高い程度である。出田の比率は周辺の中では高い。小浜氏に関する同時代史料や伝承は管見がない。次に小浜城跡の立地について検討すれば、まず現在の県道は徐々に上って城跡の所在する半島状の山丘の付根を越えるが、以前は付図2にあるように川沿いを通過して同城跡の下から折り返して山丘を越える道が使用されており⁴³、該当地区には現在「筋川（スチカイ）」「クミチ」「ウマザコ」「ヲソゴエ」の小字が存在する。地検帳では同地点に「スチカイ（筋達）」「カウチ

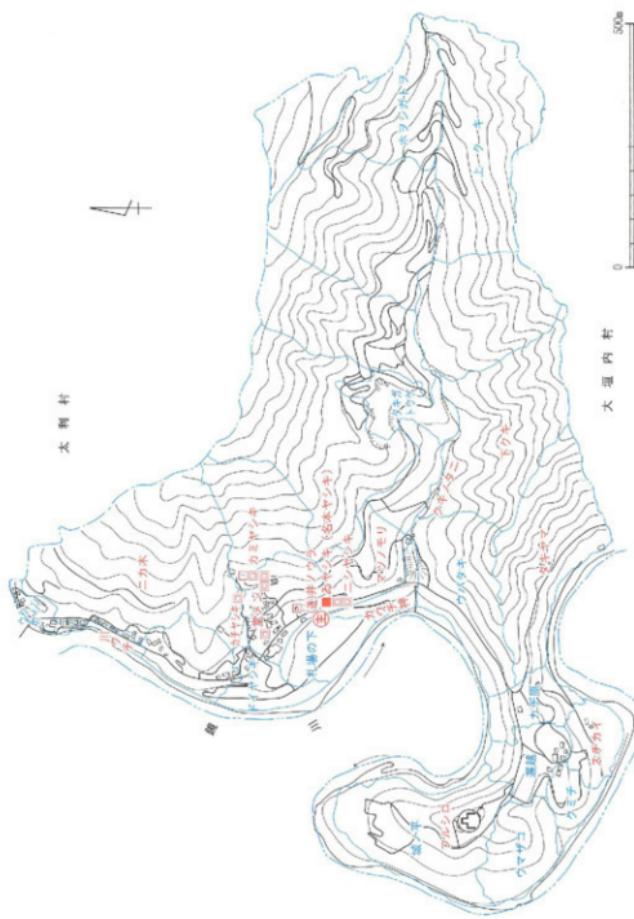
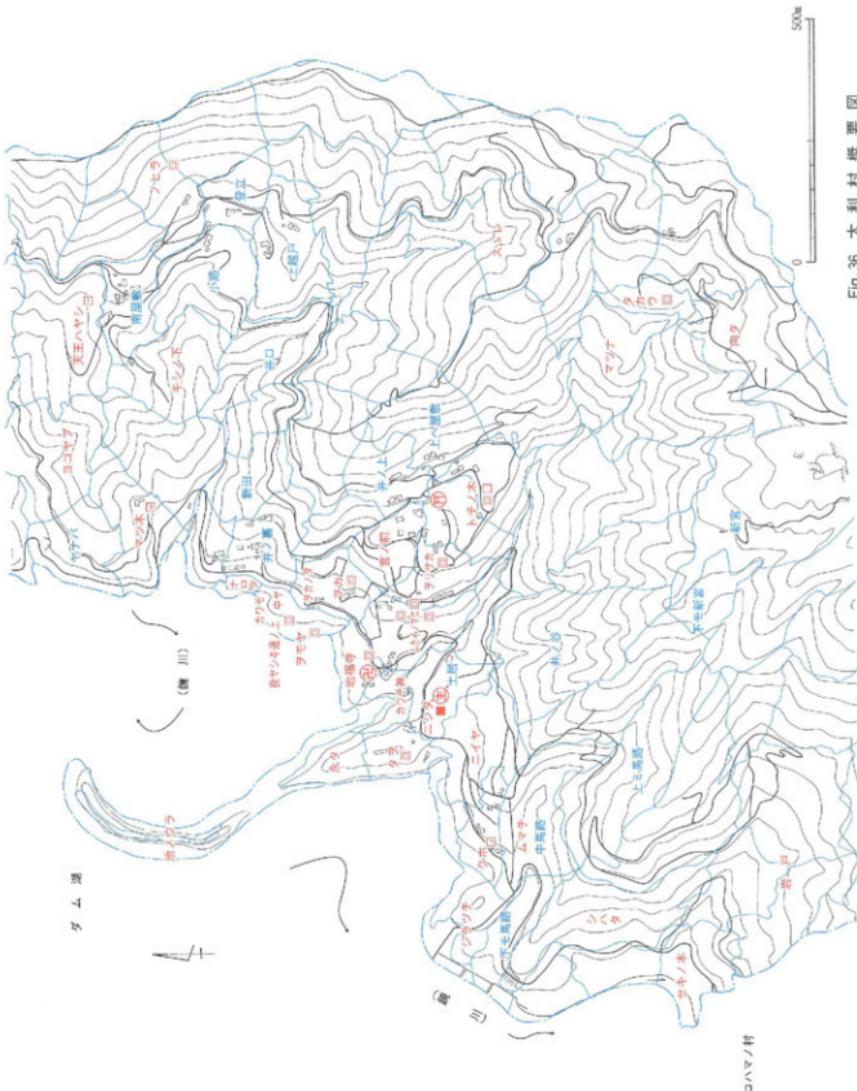


Fig. 35 コハマノ村概要図

Fig. 36 太利村概要圖



神道ノ下」のホノギがみえ、このような道が検地時にも存在した可能性がある。また現在、「筋川」の川原には若干の小型の川舟が繋がれている。以上のことから、同城跡の立地は水陸交通をおさえに適し、地域の要衝たる川口地区をも監視下に置くことのできる立地といえよう。

太利村

地検帳では「ヲ・リノ村」等と記載され、土左山九名に接する。中核部は比較的開けた立地である。「太利民部」の一村給地で、検地は南村境で川沿いの「セキノ本」から始められ、「岩戸」「シハタ」「ムマチ」「シラツチ」「クホ」「ニイヤ」と現在も道路が通る川沿いに進み、「主居」である「ニシタ」より「ヲリサカ」「宮の前」「トチノ木」「マツナ」「タカウ」「向タ」と谷に入つて、「上ヲ・リ」(位置不明)からノヒラへと跳び、「天王ハヤシ」「ヨコヤブ」「マツ木」「ナロタ」「タヲ」「永タ」「池ノウラ」「カウチ神」と再び川沿いを検地して、「地福寺之中」「ムカイノマエ」「ヲカノタ」「ヲカタ」「ヲカ」「中ヤ」「役ヤシキ」「ヲモヤ」といったヤシキ集中地で終わる。切畠分も「イワト」から始まるが、「ノヒラ」「キシノ下」「タヲ」「ヲカノタ」「ス・レ」「大カケヒロセノオウサカイ」と断続的に進む。検地時「主居」で現小字名「土居」の地点は、視界や日当たりが良好な段丘上の立地であるが、同地点にはヤシキが集中せず、むしろ谷の反対側に多いのは現在にも共通している。大利城跡が「永タ」等のホノギがある半島状の山丘に所在したといわれるが、現在は消滅している³⁹。ダムによる水没前の同山丘は大きく蛇行する鏡川に狹まれていた。屋敷集中地区には地検帳で「地福寺」もある。また、「宮ノ前」に接して現在新宮神社が所在し、下記の「新宮人明神」の棟札が伝世している。付図2のごとく、当村を通つて芝巻や円行寺経由で高知平野へ通じる道が明治期には存在し、地検帳でも道の記述が複数みえる。沿道に「マツ木」も存在し、「セキノ本」とともに通行の要所であった可能性がある。太利氏については、民部の墓と伝えられる五輪塔が存在し、発掘調査も行われたことがあるが出土遺物はなく、詳細は不明であった⁴⁰。新宮神社や天王社(非現存)の棟札には1512(永正9)年・福島氏宗次、1570年・福島氏民部助、1580年・福島氏民部助があり、太利氏の本姓は福島氏と考えられる⁴¹。

中切名 (Fig. 33)

東川を挟んで土左山九名に接する。現在は土佐山村に属するが、地検帳では地頭分である。検地はFig. 33のごとくで、切畠も概ね同様である。切畠地検帳に「中切右京兵衛抱」の記述がある。「名本ヤシキ」周辺にヤシキが集中する。「ナガイソノ南」から「カウナロ」にかけては「道」の記載が続く。「横道」から「名本ヤシキ」にかけても「道」の記載があり、川沿いの道に集落中心部からの道がT字状に接しているものと想定できる。南東部の半島状の山丘に古井の森城跡が所在するが、地検帳では闇通する記述がない。名内は名本分と公事分に分けられ、名本分は「名本ヤシキ」「堂メン」付近に集中する。一方古井の森城跡を含む南部と、「道」の記述が連なる東川沿いは公事分が占めている。また地積の総計は公事分が凌駕し、切畠では特に公事分が多い。また、扣・作職人当たりの平均地積は比較的小さい。これらから、内部構造については大略後述の公事分・名本分並存名の様相に合致するものであったと考えられる。なお住民の談によれば、鏡ダム構築以前は古井の森城跡の西側の下中切の湖が舟溜まりで、この地点までは確実に川舟が通っていたとのことで、東側対岸の広瀬村の様相とも併せて、東川が鏡川に合流する付近に道、舟溜まり、城、堂が集中する様



Fig. 37 下村付近（今井氏給地中核地区）概要図

相も想定できる。また、同地点には「木落シ」の小字が見え、時期は不明であるが、当地域の経済基盤の一端が窺える。

穴川村、永野村、永崎村、下村、定永村

5村は全て「今井左近給」であり、小計もまとめて記される。一主名請分としては、土左山九名及び地頭分において破格の規模で、領家山を合わせても大黒与七兵衛の行川名に次ぐ規模である。江戸期以降現在まで今井村、今井と呼ばれてきた³⁹。Fig. 37には、地検帳で中枢的様相を呈する下村と、永崎村を中心とした地区を示した。下村は現在本村と呼ばれる地区に開けた緩斜面・平坦地を有し、その規模は本節対象地域内の山間部では最大級で、地理的にも要所の一つとなっている。同村は切畠が少なく、耕地のはとんどが田畠となっている。検地は北部の穴川村で中切名との境から始めて永野村へと南下するが、その途中では川フチ、ハシツメ、イタハシ、道などの記述が見られる。Fig. 37内では永野村南端部の「カウチ神」から下村の「フルイ」、「ムカイ」を経て「川トコ」へ下った後、対岸の永崎村「二反タ」へ移り、「ナカサキ南キシノ下」、「マツノ本」、「大リセ」と進んで下村の「川トコ」へ移る。その後「ヤナセ」のホノギが続くことから、ダム湖水没部付近を南下するものと思われ、南部の「サウシリ」、「川口」を経た後、中核部周辺を「シイノ木ノサコ」、「カトイシ」、「南サワ」、「クリノオカ」、「ツハ木ノ本」と等高線に沿って進み、段丘上のヤシキ集中地区に至る。続いて西側の吉原川に臨む定永村に進み、今井左近給地の検地を終える。下村の川沿いには「ヤナセ」のホノギが続いているが、本節中の他村ではこのような例をみることができず、このように優勢な村落の土豪層によって漁業権が掌握されていた可能性がある。また、穴川村には「ロクロタニ」のホノギもあるが、切畠で位置も特定できない。「土居ヤシキ」等は、上記の本村地区に所在し、今井氏給地の中核部であることは明らかである。最も広い平坦地付近に現小字「番ヶ森」があり、通称番屋が森とも呼ばれ、近くに「今井城主大和守勘解由則正墓」の石碑も立つ。現状は「久保」周辺が主に水田、「東」が畑、「番ヶ森」が田畠と林で、民家が散在する。Fig. 37、42のごとく平坦地の南側は斜面で、東へもごく緩やかに傾斜する。図からもわかるように、最大の平坦地の縁部に名本の「土居ヤシキ」や寺が位置し、それを中心にヤシキ群が集まり、さらに背後には山城が存在する景観が復元できる。各々の詳細な構築時期や存続期間については不明な点が多いが、戦国期の山村の一景観を示す好例と言えよう。また付図2のように、下村は各方面への道の結節点にあり、今村氏はそのような地点に居所と城を築いたものと考えられる。今井氏については、いわゆる朝倉合戦⁴⁰前年の1561（永禄4）年に長宗我部氏による所領安堵及び定永村の加給を伝える史料がある⁴¹。さて、Tab. 9で検地時の状態をみれば、下村と他の4村では扣・作職人当たりの平均地積が大きく異なり、今井氏の本拠以外では小農民までの把握が進んでいるとの見方もできる。

草宗名

梅ノ本川との淵川の合流部に位置する。Tab. 10のごとく公事分と名本分に分かれる。Tab. 9には表れないが、切畠のみを耕作する扣・作職人が多くの人数を占め、そのうち居ヤシキを構える者は全て公事分に居する。このような切畠耕作及び小農民のヤシキの在り方は、他の公事分・名本分混在の名でもみられ、傾向の一つと考えられる⁴²。「カチヤ」は「ドヤシキで新三郎が居する。現存する新田神社では五輪塔が存在し、天日茶碗の破片も採集されている。棟札は1629年以降のものが現

存し、「地頭分風土記差出扣」にも「仁井田大明神」とある³⁰。

白岩名

吉原川沿いで平地に乏しい地形である。Tab. 8のごとく小規模で、切畠が過半を占める。全て久万権介の給地であるが、彼の主作地並びに名本の居所は存在しない。「堂ノ本」「堂ノ下」のホノギがある。久万氏は高知平野北縁部の久万村を本拠としていた一族である。扣・作職人当たりの平均地積は小さく、計15人中切畠のみの者が6人記載されている。ヤシキ数の比率も高い。このような傾向は、公事分・名本分混在の名にみる公事分のそれに類する。給人の本宗の地ではなく、しかも主作地が存在しないことも併せて考えれば、各層の農民がかなり把握されている名と理解でき、名内の構成の実態が一定表れているものとみられる。但し本名では、切畠などの開墾は長宗我部期以前より進められていたとの指摘が村史にある。以上の諸事項は、長宗我部氏有力家臣給地の一例となろう。なお、領主として吉原名主などと争った種田岩右衛門を伝える文献があり、白岩城跡が所在するが、詳細は不明である。

狩山名

吉原川を遡った位置に所在する。公事分と名本分に分かれる。名本分の田畠は少ないが、そこでは全てが主作地である。「主居」の他、「マトハヤシキ」もみられる。Tab. 10で公事分と名本分の比率と在り方をみれば、公事分が凌駕し、しかも互いに区分されていることがわかる。村史で、名本は自らの居所周辺に耕地を持ち、公事分ではヤシキを記載された作職人によって切畠も重視した耕作が行われていたことが想定されている。既述のような公事分に特徴的な様相を、以下「公事分型」の構造あるいは経営と仮称することにする。

吉原名

狩山名に隣接する。公事分と名本分に分かれる。名本の居所、寺社ともに存在しない。総地積における公事分の比率が高く、しかも一定の拡がりを持っており (Tab. 10)、長宗我部氏の把握が進んだ名と解釈できる。しかし、切畠のみの作人は僅かで田畠を耕作している者が高率であることが村史で指摘されており、この点が他の山間部の名と比較して特異である。扣・作人数に対するヤシキ数の比率が高いが、居ヤシキは少ないことも特徴である。ホノギに「リヤウシノナロ」があり、山間地域の生業の一端が窺える。領主として川村兵庫介を伝える文献があり、北部に吉原城跡が所在する。

識山名 (Fig. 38)

的漏川を遡ったところで、吉原名などに隣接する。小規模で、立地上Tab. 8のごとく切畠が高率を占める。Fig. 38に示した本村³¹ 該当地区より柿又名を挟んで約2キロ西方の現坂口にあたる、「サカクチ」地区も当名に属するが、本村が全て名本分、サカクチが全て公事分となっている。図示したごとく、名本の居所や堂床、城跡は全て本村にある。これらから考えて、サカクチでは長宗我部氏によって本村と分離的な経営が進められていることは明らかで、小農民による切畠耕作中心の開拓が想定されており³²、既にみた公事分型の経営に準ずるものと解釈することができる。なお、位置を比定できるホノギは少なく、Tab. 9との比較からわかるように、位置を特定できないヤシキがある。現在では当地区は交通不便な山村であり、地検帳でも上記のごとく小規模であるが、付図2を

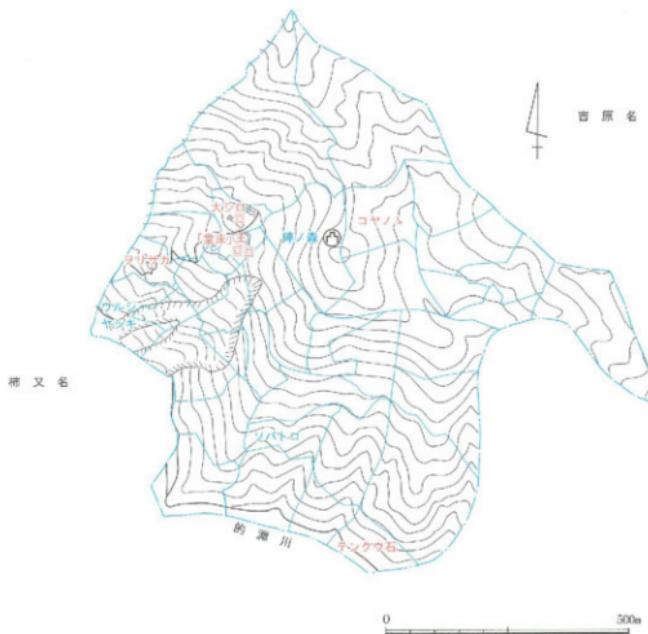


Fig. 38 識山名（本村）概要図

みれば北方の吉野川上流域との交通の要所に近いことがわかり、敷山城の存在意義もそれに関係している可能性が考えられる。同城跡については、地検帳ではホノギ以外に関連する記述はない。

柿又名

先述のごとく識山名に接する。Tab. 8のごとく小村級の総地積で、領域も狭いものとみられる。名内は名本分と公事分に分かれ、名本分の田畠ではほとんどが「主作」である。居ヤシキを持つ4人の扣・作職人のうち3人は公事分に居し、公事分の田畠、切畑、及び名本分の切畑を耕作しており、既述の公事分型の構造である。しかし、小さい総地積に対する扣・作職人数、ヤシキ数の多さが特徴的で、このような状況は、近世段階でも指摘されている^④。ホノギ等については、「名本ヤシキ・主居」がある。「宮ノワキ」「宮ノ東ノ上」は公事分に属す。さて、村史では1743年の記録として、30戸がさらに山奥側も含めて展開していることが記され、15丁と高い獵銃の所持率にも言及されており、吉原名の「リヤウシノナロ」と併せて、近世以前の山間部における経済基盤の一端に示

唆を与えるものと考えられる。道の結節点となっている地点に柿の又城跡が所在したとされるが、現在は消滅している。川沿いの立地からみて館的なものが考えられる。

的源名

草宗名に隣接する。公事分と名本分は、空間的にも名内の上手と下手には分離している。内容的には、まず両分に名前がみられる扣・作職人は1人のみである。名本分での耕作は山畠が主体で居ヤシキを記す扣・作職人も過半に及ぶが、公事分では切畑耕作のみの小作人が半数を超え、しかも彼らはヤシキを記されない⁹⁰。このように両分は分離した構造となっており、ヤシキを記す扣・作職人は、その居所を置く分内のみを耕作していた。公事分では切畑の耕作が、切畑のみを担う作人によって行われていた。以上から公事分については、既述の公事分型の構造として理解することができるが、ヤシキを記載しない作人の多さが特徴的である。「名本ヤシキ」は「役ヤシキノ東・薬師堂口・下々ヤシキ・坊主扣・名本分」に隣接している。同地は現在の熊野神社の西隣に比定でき、薬師堂が現存する。

3. 領家山

鏡川及び的瀬川以西を概ねの領域とする。針原名に属す「小山之村」や名内の小村を除き、全て「名」の表記である。Tab. 8掲載地域中では比較的大規模な名をいくつか擁し、特に大黒氏、片岡氏の給地の規模が目立つ。長宗我部直轄地は存在せず、給地と名地で構成され、主名請は名ごとにほぼまとまっている。またTab. 8のごとく、土左山九名や地頭分と比較して出田が目立って多く、本田と同等或いはそれを超える名もある。検地の日付は天正17年4月14日で、行川名、引地名、唐岩名、横名、小山之村、梅木名、中追名、増原名、横屋名、竹奈路名、去坂名、上里名、尾沙子名、針原名と、やはり鏡川沿いから始めて川口方面に遷る順で記載される。

行川名

Tab. 8中再大規模を有す。寺社分など僅かな例外を除き、「大黒与七兵衛給」である。長宗我部配下の有力一族である大黒氏については、梅木名の項で述べる。検地は柱谷の地名がみえる鏡川沿いから始められ、谷奥へと続く。谷をやや入り、現集落が所在する付近に「名本ヤシキ」や「主居」の記述を認めるが、Tab. 6のごとくの内容で、大黒与七兵衛が居住したとは思われない。彼の手作地の比率も高いとはいはず、これらは大黒氏の給地であることと関連する様相と捉えられようか。なお、「宝積院」は上記の集落中核部にある。次に、扣・作職人当たりの平均地積は比較的大きいが、ヤシキ数は扣・作職人の数に対する低率さが目立ち、さらに居ヤシキの割合も低い。これらの事象の解釈としては、近在する唐岩名の例などを参考にすれば、ヤシキを持たないか或いは記載されない扣・作職人にまで把握が進んだものと考えられる。あるいはTab. 8において破格の水田面積を持つ本名の生産力の高さを示すものであろうか。以上から、長宗我部配下の有力一族大黒氏の給地の様相を窺うことができよう。また、行川城跡との関係も問題であり、後述する。

唐岩名

行川名の西方に位置し、全て「唐岩分」である。まず、「某作・名本分」が相当数存在することが領家山及び地頭分の中では特徴的であり、名本分の扣・作職人まで把握が進んでいるものと捉えら

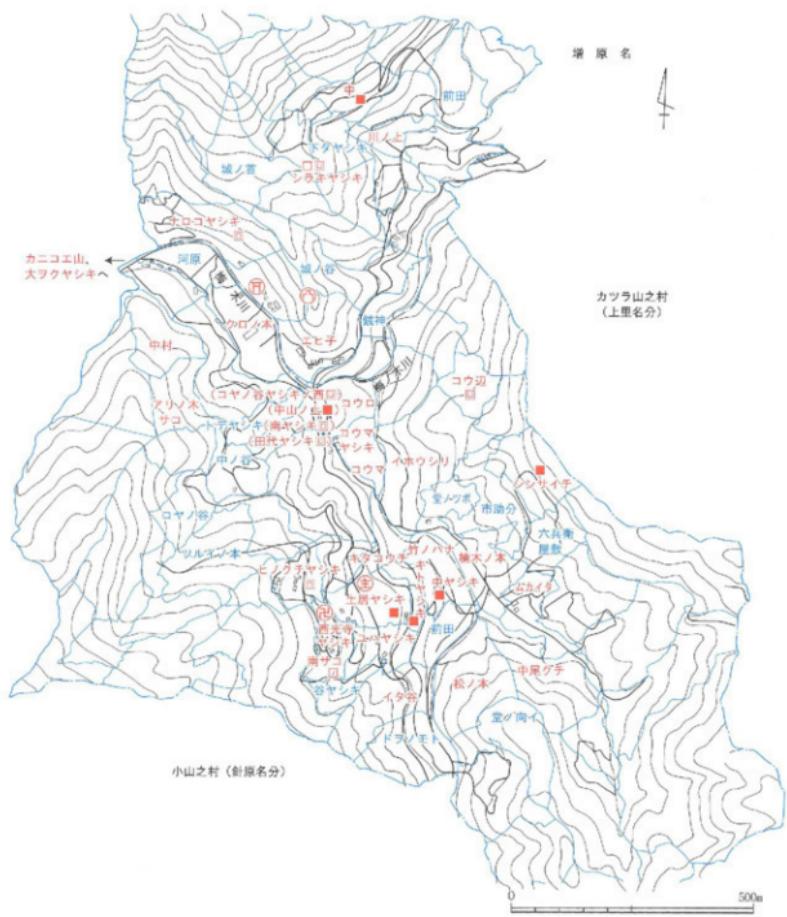


Fig. 39 梅木名中心部概要図

れる。扣・作職人当たりの平均地積は比較的大きいが、本田の1.5倍にも及ぶ出田からみても、厳密な検地を想定できよう。第2の特徴としては、名の規模からみたヤシキ数の少なさが挙げられ、田畠に比してヤシキの占める地積が少ない。居ヤシキはさらに少なく、把握された扣・作職人の多くはヤシキを持たないか記載されることになる。名本の居所については「名本ヤシキ・主居」があり、別に「土居ノ下」のホノギもある。地蔵堂や「川内神」は耕地や一部「荒」となっており、上記と併せて長宗我部氏による支配の浸透と、名的機能の変容或いは衰退が看取できる。

横名

全て名地である。総地積は行川名や今井左近給地に次ぐクラスであるが、Tab. 9と10の比較からもわかるように、ヤシキの数及び地積が大きく、しかも居ヤシキの比率が高い。このような特徴は、平野部を望み、また唐岩、梅木方面へ向かう谷筋を占める立地とも関係があろうか。他の項目は領家山の他名と大差がない。出田の地積は本田に匹敵する。名本は30代の上ヤシキに居する。「テコウ寺」、「大モン」もみえ、これらと離れて所在する「弥勒寺」の地積は、実際の寺ヤシキとしてはTab. 7中では大きい。

梅木名 (Fig. 39)

谷や川筋が交わる地形で、中核部は名内南部の緩傾斜地にある。全て「大黒備前守」に給されている。検地は南から行われたとみられ、「石神ノモト」(位置不明)、「イタ谷」、「前田」から「土居ヤシキ」周辺の中心部を検地して一旦集計が行われる。続いて「松ノ本」から「新在家付」へ入って「イホウシリ」へ進み、「コウマ」へと谷川を渡り、「コウロ」からさらに谷川を渡って「コウ辺谷」へ至った後、「コヤノ谷付」のヤシキ群等へ移る。次いで谷川を渡って「エヒ子」、戻って「アリノ木サコ」から比定不能のホノギが5筆続き、「中村」、「ナロコヤシキ」、「シラキヤシキ」、「中」、西へ入る谷筋でFig. 39外の「大オクヤシキ」、最後は谷奥で中追、勝賀瀬方面への山越え道が通る「カニコエ山」(付図2)で終わる。梅木名に続いているはこの跡を越えた中追名が記載される。切畠も大略上記の順で記される。「土居ヤシキ」は主居ではなく「土居」と記される点が注意される。また「土居ヤシキ」に近接して、「キトヤシキ」「西光寺」も存在する。本名については前述の朝倉合戦前年の1561年、長宗我部氏から大黒氏への安堵を伝える史料がある。前述の今井氏の場合と同時期で、長宗我部氏が当地域の掌握を始めた時期を示唆する。また梅ノ木城跡の裾に現存する八坂神社に関して、「奉造立棟上天王神社丁時天正5丁丑・・大權那大黒備前守」の史料^④があり、胸の高さで直径2m余り、樹高「38m」の杉の巨木が立つ。「土居ヤシキ」比定地の天神宮には1692年の棟札があり、合殿の若宮神社には、大黒備前守が死後崇ったためにそれを祀ったという^⑤。大黒氏は長宗我部氏の一族ともいわれ、本山氏に帰属した後長宗我部氏の配下となり、そのもとで有力な一族として活躍する。地検帳では土佐郡杓田村を本領として確保している。なお、梅ノ木城跡も重要なが、城跡については後述する。また「クロノ本」から北西へ入る谷は、近年では1975年にも大水害を被っており、検地時の屋敷分布の一因が推察できる。Tab. 8~10では、領家山中では突出した項目はない。扣・作職人は、扣・ムヤシキ共に持たない13人を含む38人が記載されている。

引地名・中追名

両名は離れているが、「片岡大炊助給」で、大黒氏の梅木名、行川名とは交互に配属されている。

引地名に6筆の唐岩分が記される。片岡氏は、高知市街より約20km西の仁淀川中流沿いの黒岩を本拠とし、長宗我部氏のもとで周辺にも勢力を拡大した一統である。両名にはTab. 8のごとく地積差があるが、中追名の方に「土居ヤシキ・主居」がみえ、「淨中庵」が隣接する。引地名には「名本ヤシキ・主作」がみえる。また「主作」地の比率は中追名の方が高い。このように、西方の中追名の方がより大炊助の本拠的様相を呈している。しかし、「土居ヤシキ」の地目、地積は総計14町を超える給人の居所としては必ずしも十分ではないともいえよう。また、中追名では扣・作職人当たりの平均地積が小さく、既述した久万権介給の白岩名に近い値を示す。扣ヤシキの多さも目立つ。

増原名

横屋名と梅木名に挟まれる。全て名本分である。梅木名寄りの川沿いに「名本ヤシキ・名本居」、「火天神ノモト」がある。本名では、その総地積に対する扣・作職人数が少なく、小農民の把握が進んでいないものと評価できる。個別にみても、作地の地積計が1反未満の者は2名のみである。出田は本田を上回る。

横屋名 (Fig. 40)

梅ノ木川沿いで、竹奈路名と増原名に挟まれる。全て名地である。検地は南東部川沿いの「カワホリタ」から始められ、「イチイ木」「宮ノマエ」「カチヤ屋敷」「土居ノマエ」「モンシュヤシキ」「櫻ノ木ノクホ」「中西」「宮ノ下」「桑サコ」とヤシキが集まる緩傾斜地を進む。続いて「ウ子タ」「カミヨコヤ」の後、位置不明の6つのホノギで切畠以外の検地が終わる。切畠は増原名との境の「サカイノウ子」から「潤ノヤフ谷」「神田畠」「アリノ木カ本ウ子」「同じ東道ノ下」を経て「ヒラコウチ」に至る。次いで「中西タキ山」「ハ□□□」から「竹ノナル（竹奈路）堺」方面へ向かい、「ヒウラコウチ」で終わる。「名本分」はあるが名本の居所の記載はない。「大サコ」と「モンシュ山」が「サリサコ坊主扣」である (Tab. 7)。現在の八社河内神社について、永正十（1513）年・願主横野氏の棟札の存在を伝える史料があるが²⁰、地検帳では横野氏の名前はみられず、名本の居所も記載がない。また同神社の棟札に、後述の西川氏の1576年の定着を示す史料もある。地検帳では、後述の上里名が「西河惣左衛門給」である。またFig. 40のごとく「カチヤ屋敷」比定地に所在する同神社は、明治元年まで八社河内大明神と称した。これらから同神社は、ホノギ「宮ノマエ」に関連する可能性がある。次にTab. 10をみると、「主作」地は存在せず、「某作名本分」或いは「某扣名本分」が一定存在する点が領家山及び地頭分の中では特徴的である。本名におけるこの表記の意味については筆者は明言できないが、既述の唐岩名を参考にできよう。扣・作職人当たりの地積平均が唐岩名よりも少ないとや、出田が本田を上回る地積であることとも、より積極的な検地によって名内が把握されていることを補強するものと理解できる。このような状況と、上でみた名本の居所の不在等に関連をみることもできよう。なお横矢城跡は、幾つかのヤシキが所在する「桑サコ」に近い尾根に所在する。

竹奈路名

的瀬川と梅ノ木川の合流部より的瀬川沿いに占地するが、中間で横屋名によって分断され、下流側が「本村」である。全て名地である。「名本ヤシキノ上」「宮ハエノカキ」が本村に所在する。扣・作職人当たりの地積平均がTab. 9中最大級の数値を示すことからは、小農民の把握が進んでいない。

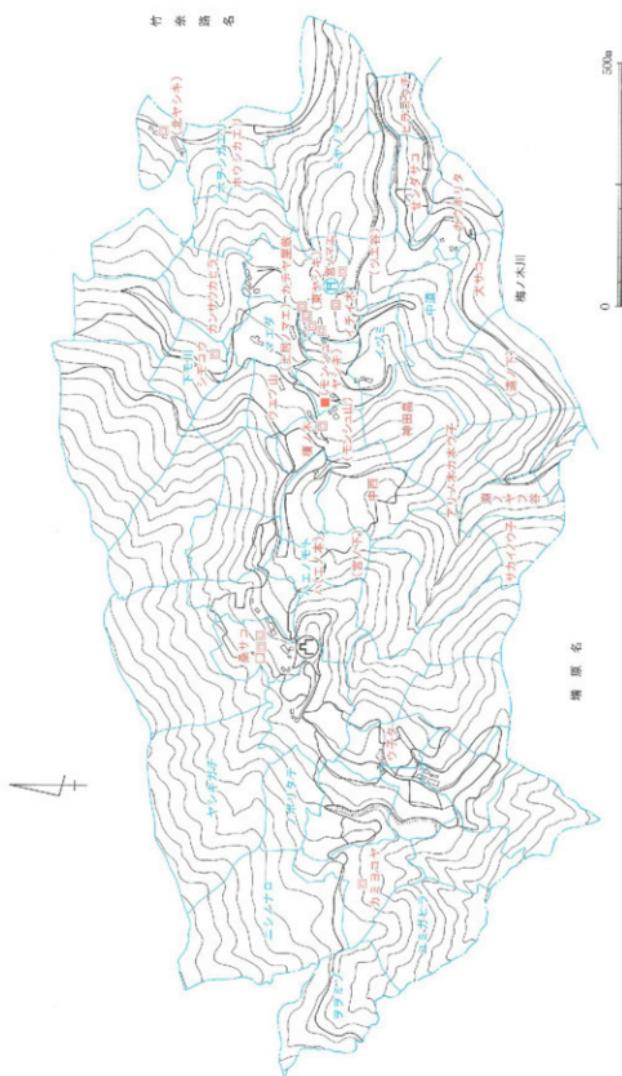


Fig. 40 橫屋名擬要圖

傾向が考えられる。なお、出田は本田と同等の地積が記されている。

去坂名 (Fig.41)

小浜村、下村、草宗名などからみて川の対岸に所在する。全て名地である。台地状の地形に集落が展開し、上里名が南接する。検地は西限の「コウホリノ東」より始められ、「タラヤフ」、「古川」、「有瀬」、「坂本」と川沿いから、「カチカフ」、「皮ハリタ」、「亀ノサコ」、「花ノ木」と谷や斜面部を経て、「永サコ」に至る。次に再び「ヨセマチタ」、「タラヤフ」に移り、「ツエキレ」、「ミコノ窟」より中心部に入る。「上ノ山」の後、位置の比定不能な6つのホノギをまわって切畠以外の検地を終える。切畠も大略同様な順路である。「土居ヤシキ」は40代の上ヤシキで、神九郎が居する。「□ノナロ」は現在の「宮ガ奈路」に想定でき、十二所権現⁹が比定できる。同神社の明細帳には、1502年棟上の記事がある。また近くには「観正寺」や「□ノナロノ西ノ谷大門」のホノギが所在する。耕作関係では、まず「主作」「某作・名本分」のいずれも存在しないことが特徴である。扣・作職人は28人と、他村と比べれば名の規模に見合って余りある人数が記載されている。彼らが負う地積をみれば、7反を超える者から6代少々まで偏りなく存在し、大から小まで様々な規模の扣・作職人が把握されているものと解釈できる。名内の実態を示唆する好資料といえよう。以上から考えて本名は、一定の規模を持ち、寺社も擁っている様相が想定できる。そして耕作関係の記事からは、長宗我部氏による掌握が進んでいる名と理解でき、名本の居所が存在しないこともこれに符合させて捉えることができよう。なお、現小字城山が去坂城跡といわれる。

上里名

去坂名の隣で、同じ台地状地形の上に所在する。全て「河西惣左衛門給」で、下畠や下々、下山田と下ヤシキなどが散在する様相を呈す。「名本ヤシキ」が唯一の中ヤシキで「主居」であり、「新寺」が隣接する。本名に含まれる西部の「カツラ山之村」には「オモヤシキ」、「オモタ」のホノギがある。また、主作地の占める比率が5割に及ぶことと、「主居」の存在や寺の在り方から、名本の権能が一定残されているものと理解することができる。以上のような様相は、隣の去坂名と対称的である。出田の地積は本田と同等である。西河氏については、横屋名の現八社河内神社の1721年棟札に、同氏が1576年、横屋名に定着したとの記述がある。横屋名に上里の筆があるとの指摘に加え⁹、上里名に「新寺」が所在することも、西河氏の領地移転を示唆する。仮にそうであれば、同氏は長宗我部氏による土佐平定後に当地に定着したが、検地時までに近隣に領地替えされたことになる。また新領でも居ヤシキや寺を持つことができ、上記のように一定の権能を保つことも許された家臣といえる。

尾沙子名

川口地区で草宗名の対岸に位置し、規模は小村クラスを合わせても最小の部類に近い。「西 源兵衛給」であるが、名本の居所は記されていない。内部の構成は、「主作」或いは「某作・名本分」のいずれも存在しないことが特徴である。出田の地積は本田と同等である。名内には切畠の記載がなく、上里名に西 源兵衛給が一筆ある。ホノギでは、草宗との境界付近の川沿いに「コジヲ」(Fig.41)がある。現在去坂にある小字「ツラジロ」の裾部である。



Fig. 41 去坂名概要図

	村・名	村・名の所有權	ホノギ	居・作	姓	地	備 考
上左山九 名	宝蔵村	御直分	—	—	—	—	なし
	三谷村	+	トイ	名本分み	中ヤシキ	23代2分	
	津見見村	+	トイ	名本分み	下ヤシキ	47代3分	
	水谷村	+	トイ	名本分	下ヤシキ	2反20代	主作なし
	口浦村	+	—	—	—	—	なし。主作なし。
	梶谷村	+	トイ	名本分み	下ヤシキ	23代	寺社なし
	高瀬村	+	—	—	—	—	なし
	西川村	中島益助	トイ	甚五郎み	下ヤシキ	20代	
	高川村	御直分	トイ	名本分み	下ヤシキ	15代	
地 城 源 分 領 家 山	桑尾村	+	トイ	名本分み	下ヤシキ	13代	
	久万川村	+	—	—	—	—	なし
	東川村	+	—	—	—	—	なし。寺社なし。
	広瀬村	+	トイ石枕引テ	名本分・善余み	上ヤシキ	5反2代3分勾	
	芝巻村	芝巻平兵衛	ムヤシキ	主居	中ヤシキ	1反7代5分	
	蓮台村	蓮台分	—	—	—	—	なし
	大塙内村	吉村筑前	土居ヤシキ	主居	中ヤシキ	1反6代4分	現小字「土居ヤシキ」。 寺社なし。
	コハマノ村	小浜次郎兵衛	ムヤシキ	主居	中ヤシキ	39代	
	太利村	太利民船	ニシタノ北	主居	中ヤシキ	15代3分	
分 領 家 山	中切名	公事分・名本分	名本ヤシキ	名本ぬ	下ヤシキ	21代5分	名本分
	穴川村	今井左近	—	—	—	—	なし
	水野村	+	—	—	—	—	なし
	水端村	+	—	—	—	—	なし
	下村	+	十居ヤシキ	主居	中ヤシキ	26代	
	定永村	+	—	—	—	—	なし
	草宗名	公事分・名本分	カミヤシキ	主居	下ヤシキ	2反1分	名本分。内荒25代。
	白岩名	久万極介	—	—	—	—	なし
	翁山名	公事分・名本分	ナロノ北	主居	下ヤシキ	23代	名本分。寺社なし。
行川名	古原名	+	—	—	—	—	なし。寺社なし。
	藏山名	+	大シロノド	主居	下ヤシキ	2反21代1分勾	名本分
	柿又名	+	名本ヤシキ	主居	下ヤシキ	21代1分	名本分
	的瀬名	+	名本ヤシキ	半居	中ヤシキ	16代2分勾	名本分
	唐岩名	大風寺七兵衛	中ヤ	四郎左衛門分 主居	ヤシキ	5代	
	唐岩名	+	名本ヤシキ	弓懸居	トヤシキ	1反14代3分	
	樺名	唐岩分	名本ヤシキ	主居	中ヤシキ	41代	
	梅木名	+	上居/下	主作	下・藏藏家免	45代4分	
	梅木名	大黒懸前守	土居ヤシキ	土居	上ヤシキ	30代	
中道名 引地名 増原名 横尾名 竹奈路名 去坂名 上里名 上里名カツ 尾砂子名 針原名 針原名小山之村	梅木名	+	キトヤシキ	藤左衛門居	中ヤシキ	29代4分	
	中道名	片岡人助助	土居ヤシキ	主居	下ヤシキ	25代	
	引地名	+	—	—	—	—	なし
	増原名	増原名	名モトヤシキ	名本居	中ヤシキ	29代2分	
	横尾名	横尾名	土居ノマエ	名本分同作	中	2反28代4分	
	竹奈路名	竹奈路名	名木ヤシキ/上	名本□	切畠	9代	寺社なし。
	去坂名	去坂名	土居ヤシキ	神九郎居	上ヤシキ	49代	
	上里名	西川惣左衛門	名本ヤシキ	主居	中ヤシキ	46代3分	
	上里名カツ 尾砂子名	+	オモヤシキ	介左衛門居	下ヤシキ	26代	
	尾砂子名	尾砂子名	—	—	—	—	なし。寺社なし。
	針原名	針原名	名本ヤシキ	名本分	中ヤシキ	1反16代	寺社なし。
	針原名小山之村	針原名小山之村	—	—	—	—	なし。寺社なし。

Tab. 6 名本等居所一覧表

※ 註 (51)

	村・名	村・名の所有権	地検帳 寺社名	棲札にある 寺社名	主名請	副名請	ホノギ	地 日	地 稟	現 状 (推定合計)	権 札 等
左	宝蔵村	御直分	—	—	—	—	—	—	—	—	
	三谷村	弘法寺	—	御直分	—	コウホウシ	堂床	7代			
		酒内人明神	—	御宮床	—	中ウ子	—	3代5分			
		觀音堂	—	御殿音堂床	—	清水	—	10代			
		—	—	同寺中 太郎庵門石	清水/西	ドタヤシキ	13代				
	津々見村	觀音堂	—	觀音堂床	—	寺ヤシキノ上	—	1代2分			
	永谷村	—	—	—	—	—	—	—			
	日浦村	—	—	—	—	—	—	—			
	鶴谷村	—	—	—	—	—	—	—			
山	菖蒲村	—	地藏堂	御直分	—	シャウブ ノ上	下々山 品荒 地藏堂敷	10代			
	西田村	中島甚介	—	白山権現	—	—	—	—	白山神社	文禄五年(1596)「奉上種造り白山権現」「本領長之隼人助」他	
	高田村	御直分	—	五雲分	大補扣	ヒライシ	下タヤシ キ竈屋敷	2反18代			
	—	—	—	—	—	—	—	—	千手觀音 堂	天正二十年(1592)「奉植上」 「本願高河助家(書判)」	
九	桑尾村	—	—	御直分	—	宮ノ駄	切畠免	—			
		淺宮	—	浅宮神田	二郎左衛 門扣	コミノ西	下々山 品ヤシキ 竈屋敷	45代			
		地藏寺	—	御直分	名本扣	堂ノ本	切畠・地 藏寺免	1反40代			
		—	河鹿現	—	—	—	—	—	仁井田神 社	永祿三年(1560)「奉上権現 河鹿現御宝殿」「領主源口善 潤」	
名	久万川村	—	西音寺	御直分	名本分	寺ヤシキ 西音寺・中	下タヤシキ 西音寺・中	5代2分			
	東川村	—	—	—	—	—	—	—			
	広瀬村	—	—	御直分	名本分	ミヤノ前	下タヤシキ 21代4分				
通	芝巻村	芝巻 平兵衛	—	—	—	—	—	—			
	窓台村	窓台分	—	—	非有資持 窓台分	—	堂ノナロ ト窓堂床 久光	36代			
		大坊寺	—	—	非有資持 ツリホン扣	—	大ハウ ヤシキ	下ヤシキ 大坊寺床	27代2分		
		—	—	—	非有資持 孫因房居	—	タニノホウ ヤシキ	下ヤシキ ワキ持分	35代		
		—	—	—	非有資持 前立庵門石	—	中ノ房 ヤシキ	中ヤシキ 43代1分			
		—	—	—	非有資持 与二郎ふ	—	イワ本房 ヤシキ	下ヤシキ	27代		
		—	—	—	非有資持 小立庵門石	—	岡ノ坊 ヤシキ	中ヤシキ	35代		
		—	—	—	非有資持 源範門石	寺使ヤシキ	下ヤシキ	30代			
		—	—	—	非有資持 藤法郎ふ	ソウモン ヤシキ	下ヤシキ	26代			
分	大豆内村	吉松筑前	—	吉松筑前	—	池ノヲク	下	—	杉本神社	「文祿三年(1594)…建立」 「神社明間根」「『地頭分風土 記』忠出扣」宝永三年」	

Tab.7 地検帳等の史料にみる寺社関連一覧表(1)

村・名	村・名の所有権	地検帳 寺社名	権利にある 名前	主名前	兩名前	ホノギ	地 日	地 積	現 状 (推定合む)	被 札 等
地 コハマノ 村	小浜 次郎兵衛	—	—	小浜 次郎兵衛	又六作	カウチ神	ド	13代	河内神社	「土佐國七郷郡村石刻」寛文七年(1667)
	タ	—	—	*	神五郎扣	堂メン	下タ	9反1分	般音堂	
	太利民部	地福寺	—	太利民部	寺床	地福寺中	下ヤシキ 内堂床	4代		
		新宮 大明神	*	—	宮ノ前	下タ	—	新宮神社	「文明」三年(1481)…建立…太 助左衛門」「天正十八年(1590) …福島氏部開敷」	
中切名	公事分 名本分	—	名本分	伊予坊扣	堂メン	堂免	4代3分勾			
大川村	今井左近	—	—	今井左近	—	堂ノ前	下	—		
永野村	*	—	*	吉左衛門扣	カウチ神	下	19代	河内神社		
永崎村	*	—	—	—	—	—	—	—		
下村	*	西寺	—	今井左近	寺中	きタヤシキノ 西寺ヤシキ	下タ ヤシキ	8代勾		
寛永村	*	寛永寺	—	今井左近	寛永寺	トウトコ	堂床	3代	江戸期に 退転か	
草原名	公事分 名本分	—	—	公事分	与三郎み	堂ノ本	下ヤシキ	16代	般音堂か	
白岩名	久万権介	—	—	久万権介	孫八作	堂ノ本	下タ	7代勾	地藏堂か	
狩山名	*	—	*	—	堂ノ下	下山島	—		地藏堂か	
古原名	*	—	(坂本御用)	名本分	主作	カウチ神	ド	37代	坂本神社	
吉原名一 ノセ村	*	—	(地藏堂)	公事分	吉方衛門 作	ノノセ堂 ノ木	初煙	3代	地藏堂	
瀧山名	*	—	—	名事分	—	大シロノ下	堂床	10代2分	般音堂か	
椎又名	*	—	—	公事分	—	宮ノワキ	下	—	河内神社か	
	*	—	*	—	宮ノ東ノ上	初煙	—			
的瀬名	*	墓御堂	—	名本分	坊主扣	役ヤシキ ノ東	下タヤシ キ内堂床	2代	熊野神社 西隣	
	*	権現神	三所 権現社	*	大近 左衛門扣	ハエワキ	下 権現神領 三月田	19代3分	熊野神社 「天正年中…新建立」 「南路志」	
重 行川名	大黒 与七兵衛	宝積院	—	大黒 与七兵衛	宝積院	寺中外ノ 品木矣	下ヤシキ	10代		
	*	宝積院	—	*	宝積院分	宝積ヤシキ	下ヤシキ	10代		
廣 唐岩名	唐岩分	地藏堂	—	唐岩分	主扣 名本分	堂ヤシキ	下山島 元 地藏堂免丸	9代		
	*	地藏堂	—	*	主作名本分	土居ノド	下地藏堂免丸	45代4分		
	*	—	—	*	在延納院分	川内神	下	50代1分		
	*	—	—	*	太郎次郎作	*	下	10代2分		
根 権名	権名	テコウ寺	—	権名	太郎 左衛門扣	テコウ寺	下ヤシキ	18代		
	*	弥勒寺	—	*	弥勒寺	弥勒寺ヤシ キノ上寺中	下ヤシキ	24代		
権 木	大黒 備前守	西光寺	—	大黒 備前守	西光寺分 應左衛門作	西光寺 ヤシキ	下ヤシキ	30代4分	西光寺跡	
	*	大王正月 三月 九月神田	(天王、 龜)	*	平太郎作	イホウシ リノ西	中・下・下	90代31分4	八坂神社	「建立天王神社江戸天正5年 (1577)…大黒備前守…天王 社焼也」 「十佐園文鏡」

Tab.7 地検帳等の史料にみる寺社関連一覧表(2)

	村・名	村・名の所有権	地帳帳 寺社名	律札にある 名称	主名消	副名消	ホノギ	地 目	地 種	現 状 (推定含む)	棟 札 等
御 領	中道名 引地名	片岡人款跡 片岡大助跡	渋中庵 片岡大助跡	一 片岡大助跡	片岡中 片岡大助跡	寺中 藏家寺中	トヤシキ 下ヤシキ	5代2分 25代4分			
	埋原名	火天神 。	増原名 コツウ宮	（牛王、 氏之牛王） 名本分	新左衛門押 主作	火天ノモト 井ノシタ ノ上	中 中	47代 32代	宇治神社		
	横屋名	一 一 一 一	横屋名 カツウ番田 カツウ （八社河内 大明神） (八幡宮)	一 一 一 一	カツウ番田 ミンヨウヤシキ 一 一	下ヤシキ 下 一 一	36代 — — —	文殊堂 1775年が最古。『南路志』			
家	竹余路名	竹余路名 去坂名 去坂名 去坂名 去坂名	齋正寺 齋正寺 齋正寺 齋正寺 齋正寺	一 一 一 一 一	竹余路名 觀止寺押 觀止寺押 動市扣 （十二所 権現）	宮エノカキ 寺中 口（宮） ノナロ 口（宮） ノナロ	切畠 中ヤシキ 下ヤシキ 中 下	2反21代 10代 3反36代 — —	齋正寺		
	上里名 尾沙子名	西川左衛門 尾沙子名	新寺 —	— —	西川左衛門 —	新寺 —	— —	13代 —			
	針原名	針原名 。	針原名 。	— —	針原名 新左衛門作	名本ヤシキ 若宮	下ヤシキ 下	13代2分 4代5分			
山	針原名小 山之村	ムヒラ天 神十一月 神田 天神五月 五日神田 。	吉兵衛扣 神大郎作 又五郎作	一 一 一	久兵衛ヤ シキノ東 モ・カイ チ・シタ シ・ハノ シモ・堂 ノモト	下 下 下	35代4分勾 27代4分 22代4分				

Tab.7 地検帳等の史料にみる寺社関連一覧表(3)

※ 註 (52)

針原名・小山之村

針原名は鏡川西岸の斜面部に占地する。小山之村はこの本村と離れて西方にあるが、針原名分となっている。小山之村の方が規模が大きい。両者とも全て名地である。本村では主作地の比率が高く、「名本分」を加えればさらに高くなる。一方、小山之村では主作、名本分ともに皆無である。針原名本村では、8筆あるヤシキのうち「名本ヤシキ」、「堂ヤシキ」を含む6筆が「名本分」である。「若宮」のホノギもみえる。

4. 小結

Tab. 6～10及びFig. 33～42より看取できた諸事象についてまとめる。まず、景観としては各村・名の中核地区に給人・名本の居所或いは「名本ヤシキ」等のホノギがあり、寺社や「堂」が近接している。地帳帳からの復元ではあるが、このような景観の形成時期には長宗我部期以前に遡るものも多いとみられ、各村落が土豪層を中心とした秩序のもと、寺社を営んで精神的紐帯をも深めてい

たことが推察される。Tab. 7 の各「明細帳」をみれば、棟上や建立の時期には戦国期から安土・桃山期以降のものがあり、それらが活発になった時期を示唆している。また鍛冶関連のホノギも上記のような各村・名の中核地区に所在する場合が多く、名本や寺社のもとでの活動が窺える。しかし検討してきたように、例えば地検帳における名本の不在や上居、名本ヤシキ、寺社等を示す地名の形骸化、城の廃絶などから、このような地域のあり方は、戦国後期の変動と長宗我部氏による支配下で一転換期を迎えたものと考えられる。なお、城跡の有無や規模と村・名の規模の関係については、今回指摘できる事柄はない。次節で検討するように村落との強い関連を想定させる城跡も少なからず含まれているが、この問題にアプローチするには、城の改修や使用時期に関するさらに正確な知見も望まれる。さて、地検帳及びそれより導いた結果についてまとめると、まず名本の居所についてはTab. 6のごとく土居や「名本ヤシキ」のホノギであるが、御直分である土左山九名では全て「ドイ」の表記である点が他の地域と異なる。村・名の規模と名主の居所の地積に相関関係はみられないが、中・上ヤシキは比較的平坦地の広い地区や川沿いに多く、奥まった山間部や小規模な村・名では下ヤシキ以下となる傾向がある。「主居」が中ヤシキである村・名のうち、田・畠・ヤシキの総地積が最小値を示すのは瀬名で、同じく上ヤシキを有す村・名の最小は広瀬村である。但し、広瀬村は広大な切畑を有する。寺社についてみると、小堂を除く寺院はまず一定の地積規模を有す村・名に所在しており、村落の生産力に準拠する傾向を指摘できる。三谷、太利、横、梅木、去坂の各村・名では、複数の寺社を擁す。上里名のように、長宗我部家臣の領地換えに伴って新しく寺が造営されたことを示唆する例もあった。そして、名本の居所が実在せずに小堂以外の寺社を有する定永、蓮台、引地の各村・名では、そのような状況の要因を推測することも可能である³⁰。以上から、比較的主要な寺社が名本や長宗我部家臣によって營まれていたことが窺える。小規模な堂や河内神等は村・名の規模や名本の居所の有無にかかわらず存在し、その位置も、必ずしも名本の居所付近や村落の中核部に限られておらず、そのような寺社とは性格の異なることが窺える。土佐西南部で、村落の境に位置する寺社を復元した例があるが³¹、本節対象地域ではこのような小堂などの中にその機能の一部を負うものが存在すると考えられる。

5. 地検帳からみた各村落の特徴と類型

(1) 分類

以上の知見をもとに考察するため、まず村落を便宜的に分類する。

家臣給地型 長宗我部氏家臣に一村給地されている村・名であり、今井氏給地、太利村、小浜村、芝巻村、上里名が該当する。今井氏、太利氏については既述のごとく、長宗我部氏の進出時期或いはそれ以前より、上里名の西河氏については長宗我部期における定着が想定できる。前2者については墓も伝わっており、後述のごとく長宗我部期以前に遡る可能性のある城跡も存在する。西河氏については領地替えに伴って寺を新たに建立した可能性があり、芝巻氏は村内の9割を超える田畠を手作地としていた。これらのことから本類型の家臣・名本には在地的なものが含まれているとみられ、一定の権限を保留していた面も窺える。なおTab. 9、10から、耕地經營上、他類型に比して目立った自律性は芝巻村を除いて看取できない。

	村・名	本 田	出 田	量 敷	轟	計	切 稚
		町 反. 代. 分	町 反. 代. 分	町 反. 代. 分	町 反. 代. 分	町 反. 代. 分	町 反. 代. 分
上左山 九名		869. 49. 5 勾才	89. 32. 5 勾	77. 15. 4	17. 30. 5 勾	1054. 29. 2 勾才	650. 27. 1
地 頭	大 嶺 内 村	25. 9. 3	4. 37. 4 勾	5. 17. 2 勾	1. 38. 0	37. 2. 4	1. 17. 4
	コ ハ マ ノ 村	13. 36. 1	4. 34. 5 才	6. 23. 2	1. 31. 5	26. 26. 1	5. 7. 5
	ツ リ ノ 村	34. 14. 4 勾才	2. 47. 5 勾	8. 4. 2 勾	1. 38. 4	47. 5. 4	10. 48. 4 勾
	中 切 名	10. 44. 3 勾	2. 17. 2	9. 11. 1 才	2. 21. 1	24. 44. 1 勾才	25. 4. 0 才
	穴川村、吉野村、下 村、水崎村、足利村	56. 44. 2 勾	10. 19. 2	19. 13. 1	12. 8. 1 勾才	98. 35. 2 勾才	39. 6. 1
	草 宗 名	11. 17. 5	0	8. 29. 1 勾	2. 20. 4	22. 17. 4 勾	13. 10. 0
	白 尚 名	21. 2 勾	0	6. 25. 4	2. 8. 2 勾	9. 5. 3	13. 16. 0
	狩 山 名	5. 48. 3 勾	0	5. 34. 3	2. 17. 3 勾	14. 00. 4 才	4. 9. 0 勾才
	青 原 名	13. 4. 4 勾	0	17. 49. 1 勾	48. 4	32. 2. 4 才	22. 46. 3 勾
	敷 山 名	3. 27. 5	0	8. 16. 0	34. 1	12. 28. 1	11. 37. 0
分	柿 又 名	1. 17. 5 才	0	2. 11. 0 才	1. 3. 4 勾	4. 32. 3	3. 26. 0
	的 潤 名	11. 00. 5	0	6. 11. 0	5. 26. 1	26. 38. 2	30. 38. 4
	芝 稲	16. 48. 4 勾	3. 44. 4	4. 33. 3 勾	1. 20. 0	26. 47. 0	39. 0
	蓬 台	20. 40. 0 才	40. 1. 4 勾才	11. 29. 3	1. 14. 0	73. 35. 2	3. 48. 0
家 山	行 川 名	53. 9. 2 勾	32. 35. 0 才	11. 8. 5 勾	5. 1. 1	102. 4. 3 才	21. 46. 4
	引 地 名	35. 9. 3 勾	26. 18. 1	11. 35. 5	5. 30. 5	78. 44. 2 勾	17. 49. 2 勾
	唐 岩 名	18. 8. 0 勾	27. 49. 2	2. 45. 3	1. 8. 4	5. 11. 3 勾	0
	横 名	29. 1. 5 勾	29. 26. 1	11. 25. 1	4. 22. 3	74. 25. 4 勾	24. 16. 1 勾
	小 山 之 村	9. 21. 4 勾	9. 33. 5	4. 8. 5	32. 2	23. 46. 4 勾	7. 30. 0
	梅 木 名	34. 6. 5 勾	23. 24. 0 勾才	11. 37. 2	2. 35. 4	72. 4. 0 勾才	29. 18. 0
	中 退 名	7. 22. 1	4. 27. 3	11. 39. 1	4. 5. 3	28. 44. 2	23. 27. 3
	増 原 名	9. 24. 5	10. 15. 1	44. 1	33. 3	25. 17. 4	8. 9. 5 勾
	横 麓	8. 8. 3	10. 00. 5	9. 6. 0	5. 30. 0	28. 45. 2	40. 25. 5
	竹 东 路 名	5. 23. 2	5. 31. 2	1. 23. 1	1. 38. 0	14. 15. 5 勾才	12. 12. 2
山	去 枝 名	20. 44. 4 勾	13. 17. 0 勾才	18. 30. 2	2. 21. 0	55. 13. 0	5. 23. 1 勾
	上 里 名	12. 18. 5	12. 9. 2	6. 17. 5	2. 9. 0	33. 5. 0	1. 48. 2
	カ ツ ラ 山 之 村	2. 28. 2	1. 47. 0	47. 0	13. 0	5. 35. 2	0
	尾 沙 子 名	1. 23. 2	1. 28. 2	2. 35. 3	20. 4	6. 7. 5	0
	針 原 名	9. 16. 5	4. 11. 2	4. 4. 3	20. 0	18. 2. 4	2. 5. 3

Tab. 8 地目別地積集計表

幸 註 (53)

	村・名	田・畠・ヤシキ	扣・作職人	平 均	ヤシキ	切 烟	切堀扣・作職人
土 左 山 九 名	宝藏村	5町8反13代3分勾	4人	1町4反28代2分	3(1)	なし	—
	三谷村	3町2反24代2分	5人	6反24代5分	15(9)	1町6反19代	4人
	松尾分三谷村	3町1反40代4分勾	14人	2反13代4分	1(久見)	1反18代	1人
	津々見村	3町7反25代4分	15人	2反25代	10(5)	4町8反35代2分	14人
	永谷村	5反36代	4人	1反21代3分	3(1)	3町7反24代4分	9人
	永谷分本高川村	—	—	—	—	3反	1人
	鴨谷村	3反32代2分	3人	1反10代5分	5(4)	6町5反38代	21人
	日御村	3反37代4分	3人	1反12代3分	3(3)	3町9反30代	2人
	菖蒲村	5反1分	4人	1反12代3分	3(3)	3反41代	3人
地 地 頭	西川村	8反16代2分	4人	2反4代21分	2(2)	7反15代	5人
	高川村	5反39代4分	10人	29代	5(4)	3町3反39代	14人
	桑尾村	1町37代1分	8人	1反17代1分	9(4)	9町9反13代2分	17人
	久万川村	1町11代5分勾	4人	2反28代	6(2)	5町5反3代	7人
	東川村	2反20代	3人	40代	3(2)	4反42代5分	2人
	広瀬村	4町8反32代3分	24人	2反1代2分	31(9)	21町9反41代1分	24人
	芝巻村	2町6反48代	5人	5反19代4分	5(4)	39代	2人
	薫台村	7町3反35代2分	23人	3反10代1分	18(9)	3反48代	10人
	大畠内村	3町7反2代4分	20人	1反42代4分	17(2)	1反17代4分	5人
分 額 家 山	コハマノ村	2町6反26代1分	12人	2反10代3分	10(9)	5反7代5分	4人(うち1筆不明)
	太柄村	4町7反5代4分	17人	2反38代3分	19(6)	1町48代4分	11人
	中切名	2町4反44代1分勾	20人	1反12代1分	14(9)	2町5反46代才	8人
	穴川村	5反10代勾	7人	39代1分	5(5)	8反35代5分	8人
	水野村	1町12代1分	6人	1反35代2分	4(4)	—	—
	永崎村	1町8反14代5分	10人	1反41代3分	3(3)	—	—
	下村	5町7反20代1分才	23人	2反24代5分	21(9)	7反36代1分	9人
	福留村	—	—	—	—	13代1分	2人
	袖ノ森村	—	—	—	—	1反45代	3人
分 額 家 山	定永村	4反48代5分勾	7人	35代3分	3(3)	1町25反勾	9人
	タモウノ村	—	—	—	—	1町	1人(今井)
	草宗名	2町2反17代4分勾	15人	1反24代3分	11(1)	1町3反10代	16人
	白岩名	9反5代3分	9人	1反4分	11(9)	1町3反16代	10人(うち1筆不明)
	舞山名	1町4反5分	7人	2反1分	10(8)	4反9代	5人
	吉原名	3町2反2代4分才	18人	1反39代	22(6)	2町2反46代3分才	4人
	礪山名	1町2反28代1分才	10人	1反12代5分	10(9)	1町1反37代勾	7人(うち1筆不明)
	袖又名	4反32代3分	5人	46代3分	6(5)	3反26代	4人
	的御名	2町6反38代2分	16人	1反33代4分	13(3)	3町38代4分	20人
分 額 家 山	行川名	13町2反4代3分才	54人	2反22代2分	24(6)	2町1反46代4分	17人
	引地名	7町8反44代2分勾	35人(うち1筆不明)	2反12代4分	24(6)	1町7反49代2分勾	14人
	唐岩名	5町11反3分勾	20人	2反25代3分	8(2)	なし	—
	樋名	7町4反25代4分勾	35人	2反6代3分	28(6)	2町4反16代1分勾	18人
	梅木名	7町2反4代勾	34人(うち1筆名分6個)	1反44代5分	23(8)	2町□9反18代	20人(うち2筆不明)
	中道名	2町8反4代2分	26人	1反4代	32(9)	2町3反27代3分	12人
	増原名	2町5反17代4分	9人	2反40代5分	8(7)	8反9代5分	6人(後2筆缺欠)
	楓原名	2町8反5代2分	15人	1反46代2分	14(9)	4町25代5分勾	24人(後11筆缺欠)
	竹奈跡名	1町4反15代5分	5人	2反43代1分	3(3)	1町2反12代2分	5人
山	去板名	5町5反19代勾	29人(うち1筆不明)	1反45代2分	27(6)	5反23代1分勾	11人
	上里名	3町3反5代	16人	2反33代3分	14(8)	1反33代2分	2人
	尾沙子名	6反7代5分	3人	2反2代4分	3(1)	なし	—
	針原名	1町8反2代4分	7人	2反29代	8(4)	2反5代3分	3人
山	針原名小山ノ村	2町3反46代4分勾	10人	2反19代4分	5(5)	7反30代	6人

Tab. 9 地積と扣・作職人数一覧表

幸 胜 (54)

	村・名	内訳	田・畠地積計	うち主作分	%	備考
土左	宝藏村	5町6反10代3分匁	2町7反17代4分匁	49%	鴨宮神田、一宮領、中島勘助給あり。執谷名本分50代、名本分御笠持田1町9反44代	
	三谷村	2町6反30代1分匁	1町2反32代3分	48%	宝藏村三谷名本分23代、永谷村三谷名本分4代。梶谷分H浦村二谷名本分2反34代を含む。御床、清水寺分、御殿香當、同寺中あり。松尾分也三谷村で中島殿分、福留牛樋分・繪、桑尾本助分、鴨宮神田あり。	
	津々見村	2町9反24代3分	1町46代5分(名本分・扣1反38代)	38%	清水田、綱吉家床、綱吉領あり。松尾分也三谷村津々見分17反33代(内名本分8反8代5分、名本分某扣40代2分)合む。	
		名本分某扣	40代2分	60%		
山高	永谷村	47代	0	0%		
	梶谷村	2反25代5分	2反25代5分	100%	宝藏村梶谷名本扣1反15代合む	
	梶谷分日置村	1反32代	0	0%	権現領あり	
	梶谷分高瀬村	1反46代	0	0%		
	西川村	3反34代2分	0	0%	中島甚介給	
	高川村	4反34代2分	2反21代4分	52%	五雲分あり。宝藏村高川名本分2反11代4分合む。	
		名本分某扣	36代	67%		
名桑	桑尾村	6反28代5分	5反1代5分	77%	鴨宮神田あり。宝藏村桑尾名本分2反19代5分、広瀬村桑尾村分名本分16代合む。	
		名本分某扣	19代	82%		
	久万川村	6反18代1分匁	3反5代2分	49%		
		名本分某扣	1反10代	65%		
	東川村	31代4分	0	0%		
	広瀬村	2町7反13代2分匁	8反18代4分匁	31%	宝藏村広瀬名本分2反4代4分匁合む	
		名本分某扣	2反19代2分	39%		
地頭	芝巻村	2町2反13代2分匁	2町20代1分匁	92%		
	蓬古村	5町1反41代4分匁才	0	0%		
	大垣内村	3町1反35代1分匁	9反26代2分	30%		
	コハマノ村	2町2代5分	9反46代4分	50%		
	太利村	3町9反1代1分	16反4分	41%		
	中切名	全称	1町5反33代匁	3反19代5分	22%	
		名本分	4反41代5分	3反15代2分	70%	
	穴川村・永野村・永崎村・下村・定永村	5町29反22代匁	26反47代5歩匁	34%	今井左近給	
	草宗名	金体	1町3反38代3歩匁才	5反44代1歩匁	43%	
		名本分	9反45代5分	5反44代1歩匁	59%	
分吉	白岩名	2反29代4分匁	0	0%		
	舞山名	金体	8反16代1分	3反14代5分匁	40%	
		名本分	3反14代5分	3反14代5分匁	100%	
	吉原名	金体	1町4反1代14分	2反5代4分	15%	
		名本分	6反49代1分	2反5代4分	30%	
	讃山名	金体	4反12代匁才	40代5歩	19%	
		名本分	3反29代3分	40代5歩	23%	

Tab.10 田・畠の地積と主作・名本分等比率一覧表(1)

	村・名	内訳	田・畠地積計	うち主作分	%	備 考
地 領 分 的 の 名	全体	2反21代3分	1反43代4分	77%		
	名本分	1反47代4分	1反43代4分	96%		
	全体	1町6反32代勺才	2反13代	14%		
	名本分	6反9代	2反13代	35%		
領 家 出	行田名	9町反45代2分	1町7反10代勺	19%	重松分、大慈院分、御公田あり	
	引地名	5町17反8代3分勺	15反13代5分	23%	蘿雲庵あり	
	唐岩名	5町5反5代5分勺	1町4反4代4分	26%		
		名本分某作	1町2反33代1分	49%	引地名の中にある唐岩名1反48代5分(全て作人分)含む	
	横名	4町23反2分	1町1反47代5分	19%		
	梅木名	6町16代4分才	2町2反23代	37%		
	中道名	1町6反5代1分	5反36代4分	36%		
	増原名	4町3代3分	主のみ8反35代5分	20%		
		名本分某作	1反12代2分	23%		
	横屋名	2町3反39代2歩	0	0 %		
		名本分某作	6反49代5歩	29%		
	竹奈路名	12反42代4分	5反6代5分	40%		
	去坂名	3町6反32代4歩勺才	0	0 %		
	上里名	2町6反37代1分	1町3反36代3分	50%		
	尾沙子名	3反12代2分	0	0 %		
	封原名	1町3反47代1分	主のみ9反48代3分	72%		
		名本分某作	1反15代2分	79%		
	針原名小山ノ村	1町9反37代5分勺	0	0 %		

※ 註 (55)、(56)

Tab. 10 田・畠の地積と主作・名本分等比率一覧表(2)

直轄地型 長宗我部氏の直轄地となっている村・名で、本節対象地域では「御直分」と表記され、土左山九名の西川村及び松尾分也三谷村を除く地域が該当する。既述した「名本扣」という表記や村・名の分限の錯綜は、土左山九名が「御直分」化されたことと関連するのであろうか。そうであればTab. 10にみるように、耐名請が名本分又は名本扣となっている地積の比率等にはばらつきが大きいことも、このような状況と関連付けられるであろう。また、Tab. 9では扣・作職人あたりの地積が他の2領域よりかなり大きい村があり、Tab. 8における出田比率は他領域の平均値より明らかに少ない。つまりこれらの数値からは、新たな耕地や小農民の把握における積極性が指摘できない。Tab. 10のように寺社分も多い。以上の諸事象の要因については今後の課題としたいが、土左山九名が御直分化された経緯自体にも、長宗我部期以前からの地域性が関係している可能性もある⁵⁰。

公事分・名本分並存型 「名本分」と「公事分」が並存する名で、地頭分のみに存在する。既述の特徴をまとめると、両分は空間的に分離しているのみならず、扣・作職人も分離的であったり、切畑の地積比率が公事分で高いなど、内部構造も分離的である。田畠における主作地の比率は、Tab. 10のごとく名内全域では他類型の値に及ばず、長宗我部氏が名本の領域を侵食したり、あるいは新開

拓地を公事分化していった可能性が考えられる。小農民の把握については、総じて進んでいる傾向がTab. 9にも表れている。また、ヤシキを記載された小農民は公事分が多い。公事分については諸先学の論考があるが、例えば本類型の名においては「公事分だけが「直分」ではなく、「名本分」と公事分を合わせた「名」を「直分」として、長宗我部氏が掌握し」しており、「名本の手元にあった公事微収権の奪取を図る上での「名体制への楔の打ち込み」として評価する見方がある³⁷。また「公事子職」についても、「本来的には屋敷地の免除」との見方や、「公事分の公事子は一応名本からの従属性的・隸属性的支配を公的に脱することになった」とする見方があり³⁸、本類型にみられる上記の諸事象に合致する点がある。

有力家臣型 長宗我部氏の有力な家臣となっている一族の氏を持つ人物に一村給地される村・名で、一族の本拠地は他所にある。大黒備前守、大黒与七兵衛、片岡大炊助、吉松筑前、久万權介の他、非有齋も該当すると考えられる。他類型の村・名では、名本等の居所は原則的に「主居」と記されるが、本類に該当する村・名では表記が異なるものや不在のものがあった。また、後述のごとく長宗我部期頃の構築や改修の可能性を持つ山城が存在する名もある。村・名内の構造はTab. 9、10でみたように、記載された扣・作職人の数比が高く、主作地の比率は低い傾向を示すものが多かった。これらのことから本類型の村・名では、長宗我部氏による土地や小農民の把握が進んでいる傾向が看取でき、これら有力氏族が、まさに有力な家臣として機能していることが認識できる。これは後述の山城跡に関する諸相とも関連すると考えられる。

その他 現段階では類型化の困難な村・名があるが、その中でもTab. 6~10等より特徴を抽出できるものがある。まず増原名、芝卷村は扣・作職人数の比率が低く、小農民の把握が進んでいるとは言い難い。三谷村は御直分で宝藏村との関係もあるが、数値からみればこの2村落に類する。これらに比して横屋名、去坂名では扣・作職人数の比率が高くなっている。名本の居所をみれば増原名、芝卷村、三谷村にはそれが存在するが、横屋名、去坂名にはそれが実在しない。主作地の比率も、芝卷村が極めて高率で、横屋名、去坂名では皆無である。このように諸事象の符合が看取でき、名本が一定の分限を保って小農民の把握が進んでいない村・名と、名本不在で小農民の把握が進んでいる村・名を認識できる例がある。なお唐岩名では名本の存在と、長宗我部氏による把握の浸透という両面が看取できる。

(2) 各類型の分布

上記の各類型に基づき、村・名を表示したのがFig. 43である。まず、土左山九名が一部を除いて「御直分」である。土左山九名では既述のごとく、他領域との相違点が多く指摘できた。これに東接する地頭分では、公事分と名本分が並存する名が存在し、さらに西側の領家山では御直分や公事分は全く存在しない。このように、3領域においてほぼ東西方向の分布上の傾斜が看取できる。上記のように御直分や公事分が分布するに至った経緯については興味深いものであるが、現段階では説明できない。このような領域的まとまりやそれを超える傾斜傾向の意味については、前代からの経緯も重要であり、今後検討されなければならない。ここで公事分の配置に注目すれば、まず中切、草宗、的淵といった名は、いずれも水運及び陸路の要地に位置し、特に中切名では名内でもまさに

そのような要所を中心に公事分が設定されていることが想定できた。また狩山名、柿又名、識山名、吉原名は上流部にあり、公事分では切畠經營が積極的であったことと併せれば、長宗我部政権によつて山中への開拓が進められたことも考えられる。ところでこのような山間部の経済基盤について、まず切畠は近世においても重要な生産基盤として評価する見方がある⁹⁹。また例えば本稿の今井氏給地でみた「ヤナ瀬」や、吉原名の地検帳ホノギ「リヤウシノナロ」と近隣の村の近世の狐銚数¹⁰⁰、識山名の現地籍名「ウルシャヤシキ」等からも、水田耕作以外の様々な経済基盤が想定されよう。次に以上のような各村・名の内部を概観すると、公事分・名本分並存型や有力家臣型でも名本や家臣の分限は制限され、小農民の把握も進んでおり、一見した以上に長宗我部氏によって把握されているものと評価できた。このような見方を受け入れるならば、地検帳からみた本節対象地域では、既述のような支配形態に分かれながらも、大勢では長宗我部氏による支配の浸透を看取できよう。

次に、Fig.43で各類型の分布をみると、家臣給地型は地頭分の南部と領家山の東部、言い換れば山間部で通行上特に重要な地点の一つである「川口」地区を中心としてその近辺、或いは同地区につながるルート上に所在する。そしてそれを取り囲むように、その東側に御直分、北側に公事分・名本分並存型、南東、南、西側に有力家臣型等が位置する。有力家臣型では、大黒氏と片岡氏の給地は交互に配されている。また、成山名は長宗我部元親の姉妹の「御持」となっている¹⁰¹。このような配置からみて、行川名から引地名、梅木名、中追名にかけては、鏡川沿いに拠点を持つ大黒氏と、仁淀川中流域に拠点を持つ片岡氏に広い給地を与え、しかも有力家臣や長宗我部氏一族領の交互の配置による牽制効果も考慮されていた可能性がある¹⁰²。また、後述するように当該地域の有力家臣給地には、長宗我部期頃の特徴を示すといわれる遺構を持つ城郭が存在する例がある。これらを含めた状況について考えるには、単に当該地域の支配の問題にとどまらず、視野を広げて検討することも必要であろう。付図2からもわかるように、領家山の南部では東西方向の陸路と鏡川、仁淀川が交差しており、当該地域はそのような交通や物流面での重要性も備えている。因みに、現在の鉄道や国道も当該部を通っている。仁淀川の中上流域には、土佐北西部から伊予に及ぶ山間地域が展開している。高知平野は土佐の要であって、その全域が重要であることは言うまでもないが、既述のような領家山付近の状況を考える上では、仁淀川中上流域を視野に入れた流通や軍事の一要所としての性格を考慮することも必要と思われる。

II. 高知平野北西部の山城 一鏡村周辺を中心の一

諸項目はTab.11、12にまとめ、文中では適宜触ることとする。当該地域の地勢により、対象のほとんどは山城となった。位置や村・名内でのあり方については、付図2や前掲のFig.33、Fig.42、及び各村・名の復元図を参照されたい。

1. 土左山九名、地頭分、領家山の諸城跡

今回池田氏が作成された縄張り図や、踏査の所見を中心に述べる¹⁰³。吉原城跡、陣ヶ森城跡、狩山城跡を除く城跡については今回踏査を行っており、以下に記す諸計測値は現地で巻き尺を使用して計測したものである。曲輪の長さや幅は、原則として最大となる部分を計測した。



Fig. 42 地検帳による寺社・名本の居所と城跡





Fig. 43 村落類型分布図